仲大地遺跡

——上野原町仲大地遺跡発掘調査報告書——

1976

上野原町教育委員会

仲大地遺跡発掘調査団

仲　大　地　遺　跡

——上野原町仲大地遺跡発掘調査報告書——

1976

上　野　原　町　教　育　委　員　会

仲　大　地　遺　跡　発　掘　調　査　団

序

山梨県の東縁，神奈川県北端部津久井郡藤野町と東接する国鉄中央沿線に所在の北都留郡上野原町は，相模川上流域，本流と鶴川の分岐点付近左岸の標高250～270mの段丘上に所在する。町村合併後の町域は旧町を東縁として北・西・南へ拡がる。ここに報告する仲大地遺跡は，町の西方約8kmの旧大目村の地にあり，標高1,137mの扇山の東南麓，日留野部落の南を流れる小流の右岸台上，標高436mの東北に突出した台地の東南面に位置する小遺跡である。本遺跡は他地域の山地遺跡同様に，山地としては集落立地に最も適した場所であったものか，縄文文化草創期以降，平安期に至るまでの遺物が発見された。また縄文時代早期の炉穴遺構，奈良末期から平安期頃の土師器，須恵器出土の竪穴住居跡の発見などもあった。この地方における初めての学術的発掘調査であった。このたびこの調査を推進された上野原考古学研究会員諸氏が苦心執筆編纂された同遺跡の調査報告書が脱稿し，町教育委員会の努力によって上梓の運びとなったことは実に欣快にたえぬところである。

本地方は甲信地方と武相地方の文化交流のかなめとなる地区であり，本報告書の刊行はかならずや学界に被益するところ尽大なるものがあると信ずるものである。

本報告書刊行を機縁として上野原町付近考古学的研究が益々さかんになり，上野原考古学研究会の発展を切に望むものである。

以上所感の一端をのべ序とする次第である。

慶応義塾大学教授
江　坂　輝　弥

刊行のことば

上野原町をとりまく美しい山なみは，遠い大古からこの地に根をおろした人々の営みをじっと見守っています。この恵まれた環境のもとに町には多くの縄文時代の遺跡が点在し，往時の人々の心に潤いを与えていたものと思われます。

この多くの文化遺産ともいうべき遺跡も，開発の美名のもとに自然環境とともに破壊が進み，大きな意味で人類の生存にかかわる問題としてとりあげられ，経済優先の思想は，今日大きく転換を迫られております。

当町では，幸いにも最近文化財保護に理解をもつ方々が多く，とりわけ埋蔵文化財については，町考古学研究会員の方々を主軸に種々の調査が行われ，記録の保存等に全力を傾け，少なくとも次善の策により多くの成果を上げ得たものと考えております。

今回の発掘調査は，㈱上野原カントリークラブのゴルフ場造成に伴うもので，予定地内に多くの遺跡が存在し，この保護に苦慮しながらも各方面に働きかけ，現況保存を最優先させるための努力をしたわけでありますが，コース変更，工事方法等あらゆる角度から検討を加え，その結果仲大遺跡を除く6遺跡の保護を見ることになりました。

不幸にも，遺跡の破壊が決定的になった仲大地遺跡については，記録保存をするための発掘調査を行うことになったものです。このような大規模調査の実施にあたっては当然のことながら調査態勢が問題であり，町段階では極めて困難視されたものでありますが，幸い慶応義塾大学江坂輝弥教授をはじめ県文化課の指導のもとに調査団を編成し，調査を行うことになりました。

調査は約2年数ヵ月に亘り，夏の炎天下あるいは寒風の吹きすさぶ中で献身的に指導にあたった諸先生，発掘に全勢力を傾けた町考古学研究会員のみなさま，そしてこの発掘に理解をしていただいた多くの協力者の努力を忘れることはできません。

ここに調査の資料を整理検討を経て一書としたものが本報告書であります。

本書が学術・研究の資料として，また郷土の文化遺産を知る参考資料として活用されるならば，望外の幸せに存じます。

長期に亘って調査・整理作業にご努力いただきました関係者各位に対し，衷心より謝意を表す次第であります。

上野原町教育委員会教育長

横瀬　　仁

例　　言

1. 本書は上野原カントリーゴルフ場造成に伴う，行政発掘調査の一環として実施した仲大地遺跡の第１次，(1974. 7. 8) 第２次調査 (1975. 7. 8) の報告書である。

2. 発掘費用は上野原カントリーで負担し，報告書の出版費を上野原町で負担した。

3. 発掘調査は上野原町教育委員会の依頼で，上野原考古学研究会が主体となり，江坂輝弥教授，川崎義雄先生，重住豊先生の指導のもとに行った。

4. 編集と校正は小俣博（町企画課）長谷川孟（上野原考古学研究会）が担当し，図版を田中悟，佐藤正，奈良泰史，山田行輝，佐々木克典。実測を横瀬武文，田中悟。写真を田中悟，山田行輝，奈良泰史，佐々木克典の同研究会員が担当した。

5. 執筆は主に同研究会員が分担し，地質については，専門の内藤久敬（上野原中学校教諭）が担当した。

6. 報文の末尾にその文責を記した。

目　　次

序
刊行のことば
例　言
第１章　はじめに …… 10
第２章　遺跡の位置と環境 …… 11
(1)　仲大地の地誌…… 11
(2)　地形概観…… 15
(3)　地質概観…… 16
第３章　調査の概要…… 19
(1)　調査にいたるまでの経過…… 19
(2)　第１次調査の経過…… 20
(3)　第２次調査の経過…… 23
第４章　遺　構 …… 26
(1)　土　層…… 26
(2)　住居址…… 27
(3)　土壙群Ⅰ（A地点） …… 30
(4)　土壙群Ⅱ（B地点） …… 40
第５章　遺　物 …… 53
(1)　住居址内の出土遺物…… 53
(2)　土壙群出土遺物…… 57
第６章　むすび …… 99
調査団の構成と参加者 ……101

挿図目次

第 1 図　仲大地遺跡付近の地形図……12
第 2 図　仲大地遺跡の地形図……14
第 3 図　段丘分布図……15
第 4 図　地形断面図……16
第 5 図　中位段丘ローム層柱状図……17
第 6 図　模式柱状図……18
第 7 図　遺跡土層図……27
第 8 図1～4　第1号住居址平面図……28
第 9 図　第3号住居付近平面図……31
第 10 図1～2　A地点　東西セクション図　南北セクション図……32
第 11 図　A地点　土壙分布図……33
第 12 図　A地点　第1号土壙……33
第 13 図　A地点　第2号土壙……34
第 14 図　A地点　第3号土壙……35
第 15 図　A地点　第4号土壙……35
第 16 図　A地点　第5号土壙……36
第 17 図　A地点　第6～15号土壙……37
第 18 図　A地点　第12号土壙（第2号小竪穴住居址）……39
第 19 図　A地点　土壙群及び礫分布図……40
第 20 図　B地点　土壙分布図……41
第 21 図　B地点　ソフトローム上面の礫分布図……42
第 22 図　B地点　礫群分布図……43
第 23 図　B地点　第5号土壙と焼石図……44
第 24 図　B地点　遺物分布図……45
第 25 図　B地点　第1号土壙……46
第 26 図　B地点　第2号土壙……47
第 27 図　B地点　第3号土壙……48
第 28 図　B地点　第4号土壙……49
第 29 図　B地点　第5号土壙……50
第 30 図　B地点　第6号土壙……51
第 31 図　B地点　第7号土壙……52

第 32 図　B地点　第8号土壙……52
第 33 図　第1号住居址内出土遺物……54
第 34 図　第3号住居址内出土遺物……55
第 35 図　土壙群出土遺物（図上復元）……57
第 36 図　土壙群出土遺物（図上復元）……58
第 37 図　土壙群出土遺物（土器拓影）……59
第 38 図　土壙群出土遺物（土器拓影）……60
第 39 図　土壙群出土遺物（土器拓影）……61
第 40 図　土壙群出土遺物（土器拓影）……62
第 41 図　土壙群出土遺物（石器実測）……75
第 42 図　土壙群出土遺物（石器実測）……76
第 43 図　土壙群出土遺物（石器実測）……77
第 44 図　土壙群出土遺物（石器実測）……78

図 版 目 次

図 版 1　仲大地遺跡全景……81
　Ｂ３区　発掘風景……81
図 版 2　発掘中間現場報告会風景……82
　Ａ地点Ａ′01区　発掘風景……82
図 版 3　Ｂ３区　第１号住居発掘途中風景……83
　Ｂ３区　第１号住居……83
図 版 4　Ｂ３区　第１号住居遺物出土状況……84
　Ａ地点Ａ01区　第３号住居……84
図 版 5　Ａ地点Ａ′01区　実測途中風景……85
　Ａ地点Ａ′01区　ファイヤーピット群出土状況……85
図 版 6　Ａ地点Ａ′01区　第２号土壙発掘途中風景……86
　Ａ地点Ａ′01区　第２号土壙……86
　Ａ地点Ａ′01区　第４号土壙……86
図 版 7　Ｂ地点Ａ６区　発掘風景……87
　Ｂ地点Ａ６区　第７・８号土壙……87
図 版 8　Ｂ地点Ａ６区　発掘風景……88
　Ｂ地点Ａ６区　礫分布……88
図 版 9　Ｂ地点Ａ６区　第５・６号土壙と焼石……89
　Ｂ地点Ａ６区　遺物出土状況……89
図版10～18　第33～44図出土遺物写真

仲　大　地　遺　跡

——上野原仲大地遺跡発掘調査報告書——

第1章　はじめに

近年開発の波は山間地まで及び，中央線の複線化，中央道の開通等により，上野原町も大きく変貌して来た。もともと小さな河岸段丘や山腹の緩傾斜地しか平地のなかったこの地域に，大工場や学校等を建設すると，平地の畑の下に眠っていた埋蔵文化財は，あっという間に破壊され消滅してしまう，とくに最近のブームに乗っての大規模な宅地造成や，ゴルフ場の建設は一郭が，変形してしまう大土木工事であり，埋蔵文化財は完全に壊滅してしまう。

この地域の先史遺跡は他地域に比べ驚異的な密度に分布しており，狩猟や採集経済の時代には，起伏に富んだこの地域が，かえって暮らし良かったのかもしれない。また平地が少なかったので，同じ場所に居住せざるを得なかったため，遺跡が多くなったのかもしれない。いずれにしてもこの多くの埋蔵文化財を守るためには，強力な資本と機械力による無謀な開発を押さえ，地域に適した計画的な開発に，変改させていかなければならない。しかし一部の考古学を研究する者だけが，いかに遺跡の重要性を説いても，地域住民の理解と協力がなかったら決して守れるものではない。そのためにわれわれは上野原カントリーゴルフ場建設予定地内の遺跡保護について努力して来たのである。

この発掘調査は「こわされるから，その前に掘れ」ではなく，「これだけ重要なものが，眠っているから，こわさないでくれ」というために掘ったのであり，この点とくに重要な問題である。そのために同ゴルフ場建設予定地内に確認されている7遺跡中，仲大地遺跡だけにしぼり発掘調査を約2年数カ月の歳月をかけて，実施して来たのである。そして他の遺跡については，予備調査等で重要性を確認し，コース変更，工事方法の改善等により遺跡を保護するよう，業者に協力を求めて来たのである。このことは町教育委員会，県教育委員会文化課，国の文化庁と一連の関係官庁の努力もさる事ながら，大田・大沢・恋塚部落を中心に，地域住民の方々が遺跡の重要性を考え，埋蔵文化財の保護に理解をもった時，はじめて遺跡が守られ，上野原町の文化財保護の新しい歴史が始まる時だと思うのである。

このささやかな報告書が，その手引書となってくれることを信じて，われわれ地元研究会員の手でまとめたのである。

（長谷川　孟）

第2章　遺跡の位置と環境

(1)　仲大地の地誌

仲大地とその周辺の歴史を，地域住民の言い伝えや，諸調査の結果からまとめてみた。

地理的には上野原町と大月市の梁川町・富浜町との境を接する位置にあり，上野原町大野に属している。人口も少なく，町の中心から離れているため，現在まで地域住民の他は，ほとんど知られなかった所である。しかし，近年，中央高速自動車道が付近を通過してから，にわかに見直され，ゴルフ場建設計画等が起きたのである。

地形を見ると，扇山（海抜1137.8m）山麓の南東に位置する丘陵地帯で，旧甲州街道の犬目峠から鶴川の渡し場までの交通の要所であり，中世から近世にかけては，かなり人の往来も多かったものと思われる。

扇山から流れる谷田川の水量は少ないが，小さな谷川をいくつも集め，四方津の呼戸にて相模川に合流する。その上流の小さな谷沿いには，早くから沢田としての水田が開けていた地域でもある。

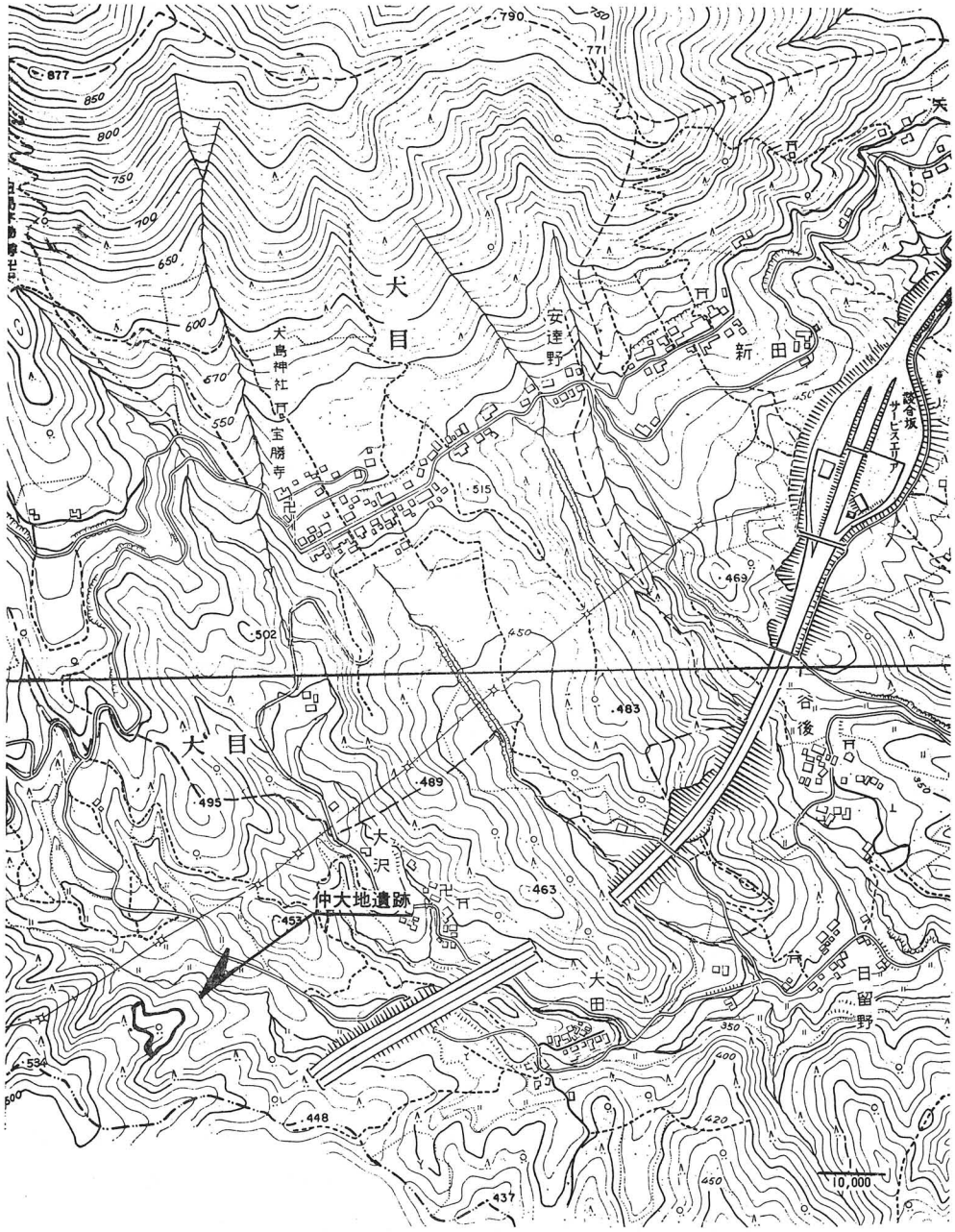
仲大地の行政区の変遷をたどれば遠く近世には上大野村に含まれ，明治5年（1872）上大野村と下大野村が合併し大野村となり，さらに同9年（1876）犬目村を合わせて大目村に，その後昭和30年現在の上野原町となったのである。

現在周辺には，上野原町大野の大田・大沢・日留野・恋塚・大月市梁川町斧窪等の集落がある。これらの集落が歴史的に，いつごろ形成されたのか明らかではないが，言い伝えによると日本武尊が東征の時，恋塚を通ったといわれ日本武尊の伝説も残っている。またこのことを不動尊に祭ったともいわれる。現在不動尊は白馬不動として犬目に祭られているが，これが日本武尊を祭ったものかどうかは明確でない。

『上野原町誌』によれば「天平9年（737），犬目の里の白馬不動が……」とあり，奈良時代には，すでに現在の集落があったのか明確ではないが，なんらかの関係は充分考えられる。

現在集落のある場所で，土師器片を確認しているのは，恋塚下・大沢・日留野で，大田・犬目では確認していない。仲大地・中野原・恋塚下と連なって同時代（国分期？）の土師器片が発見されていることから，この地域に集落があったものと思われる。また仲大地より南東に，扇久保・恋沢・上けぬきと丘陵が連なり，それぞれに同様な土師器片が見られることから，やはり集落があったものと思われる。

現在の恋塚部落は恋沢から，また犬目部落は日留野に近い土橋という所から，旧甲州街道がつくられた時，街道沿いに移転したといわれ，恋沢・土橋から土師器片が発見されている。また犬目や恋塚の現在集落のある場所から，土師器片が発見されないことなどから，これらの言い伝え



第1図　仲大地遺跡付近の地形図

がかなり正確なものではないかと思われる。

奈良・平安時代と思われるこの種の土師の分布を見ると，旧甲州街道以前の道や集落の様子が推定できるのではないかと思われる。すなわち，恋塚下・中野原・仲大地・日留野・談合坂・荻野・野田尻と通ったのではないかと推定される。

現在の集落は甲州街道が整備された江戸時代初めに出来たと思われ，犬目宿を中心とした犬目村と，それ以外の大野村とが出来たのも，このころと思われる。

江戸時代に助郷のため梁川の人が通ったといわれる。「伝馬道」は，仲大地と大田・大沢の中間にわずかに残っている。この地域が梁川と深い関係があったことがわかる。

仲大地遺跡のある台地の西側は，昔から畑で下の沢田と合わせて，たかん沢と呼ばれていた。東側は戦後（1947～1950）開墾したもので，それ以前は大田・大沢・日留野・谷後部落の共同草刈り場であった。

当時開墾した人の話では，土器がかごで背負う程でたそうであるが，みんな使い物にならないから捨てたということであり，今考えるとまったく残念でならない。

仲大地を中心としてこの地域には，縄文時代の初めから現在に至るまで，人間の生活がある時は栄え，またある時は忘れられ蜿蜒と続いて来たことを思うと，その長い長い歴史の眠るこの自然を，現代人がいかに科学が進歩したからといって，開発という名のもとに破壊してしまっていいのだろうか。

この地域の方言をみると「おめえ」（おまえ）「そうだんべえ」（そうでしょう），（語尾の「べえ」は音がさがる）などと，関東なまりである。恋塚部落から1キロぐらい行った所に，大月市富浜町の山谷部落がある。ここでは「おみゃあ」（おまえ），「そうずら」（そうでしょう）と静岡方面の言葉と共通している。

この地域の神楽を見ると，現在は行われていないが，御輿・神楽堂・女獅子一頭の三つが，そろって練り歩いたといわれている。鳴り物は残っていないが，御輿・神楽堂・女獅子の頭は現存し，大田部落で保管している。この神楽が大田・大沢部落だけのものだったか，上大野4部落のものであったか明確でないが，上野原町にはこの形式の神楽は他に見ることができない。この種の神楽は，富士吉田市や大月市の一部にみられることから，この方面から伝わったものと思われ，今後の研究によれば，その時代的なものも考察できると思われる。

この地域と他地域の関連では，古老の話を聞くと扇山の北側に，大月市七保町の浅川部落があり，扇山の中腹を越えて人の往来があったそうである。また，この道は日本武尊が通ったとも伝えられ，関東山地から中部山岳地帯に通じる，重要なコースであったことが推測される。すなわち地誌的にみてこの地域が関東地方・東海地方・中部山岳地帯との接点であったように思われる。このことは，まったく時代的に食い違うが，今回の発掘調査で，鵜ガ島台や諸磯式・阿玉台式等の関東系の文化と粕畑式等の東海系文化と，勝坂式（新道に近い）曽利式等の中部山岳系文化とが，仲大地遺跡にまとまって発見されたことは何か偶然ではないように思われ，興味深いものがある。

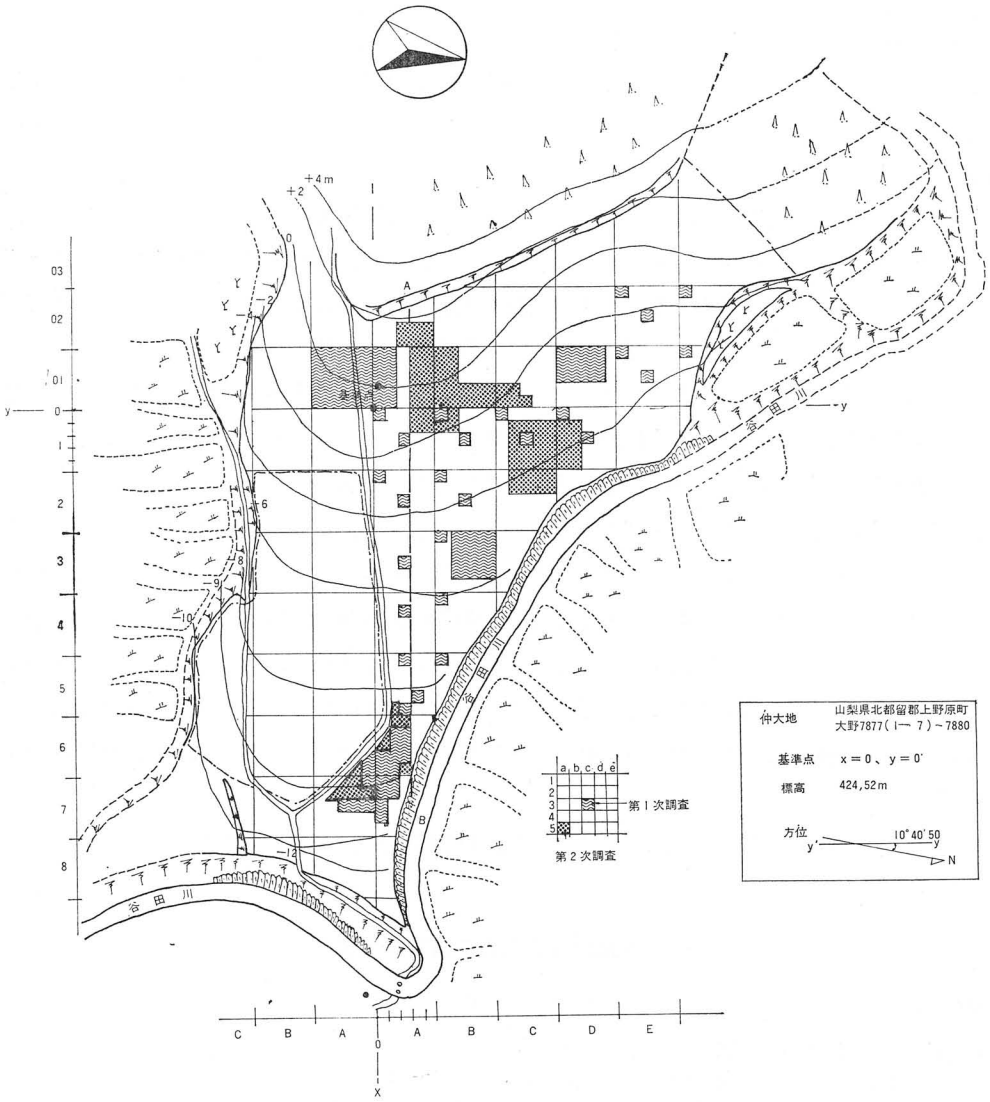
以上地誌についてまとめてみたが，資料不足，研究不足の点がおおいに反省される。

（横瀬　武文）

仲大地遺跡周辺の遺跡一覧表

遺跡の名称	所在地	推定時期	備考
中野原　1	上野原町大野7,797 付近	縄文中	S47. 埋蔵文化財包蔵地カード
〃　2	〃　7,793　〃	縄文早・奈良・平安	〃
〃　3	〃　7,771　〃	縄文前・中？・奈良・平安	〃

恋塚下	上野原町大野8,110 付近	縄文中・弥生・奈良・平安	S47. 埋蔵文化財包蔵地カード
扇久保	〃 632 〃	縄文早・中	〃
恋　沢	〃 7,042 〃	縄文早・前・中・奈良・平安	〃
穴観音	〃 7,034 〃	縄文早・中	〃
上けぬき	〃 6,990 〃	縄文早・前・奈良・平安	〃
大　沢	〃 7,516 〃	縄文前・奈良・平安	〃
日留野	〃 6,550 〃	縄文早・中・後？・奈良・平安	〃
谷　後	〃 6,168 〃	縄文中	〃
君　越	犬目 1,348 〃	縄文中・弥生	〃
談合坂	大野 4,655 〃	縄文早・奈良・平安	山本寿々雄，山梨県の考古学
荻　野	大野 5,441 〃	縄文中？・奈良・平安	S47. 埋蔵文化財包蔵地カード
野田尻2	野田尻 979 〃	古墳？・奈良・平安	〃
〃 1	〃 200～400 〃	縄文中・弥生・奈良・平安	〃



第2図　仲大地遺跡の地形図

(2) 地形概観

上野原に住む者に与えられた平坦面，それは断片的でしかも狭小な段丘面であるが，他の地域と比較し顕著な発達を見せ，本流の相模川，支流の鶴川・仲間川などの河川の働きで，流域に明瞭な段丘面を発達させている。

対称的な段丘面の形成は仲間川の一部で少々見られる程度で，他の大部分は非対称的な段丘面の発達である。

大きく三段に分類できる段丘面中，高位に属するものはきわめて狭小であり，ともすると時代の古さや浸食の影響のため，定高性をもった馬の背状の発達しか見せない段丘面もある。標高は約320～340mである。高位段丘の分布は大椚・根本山等である。

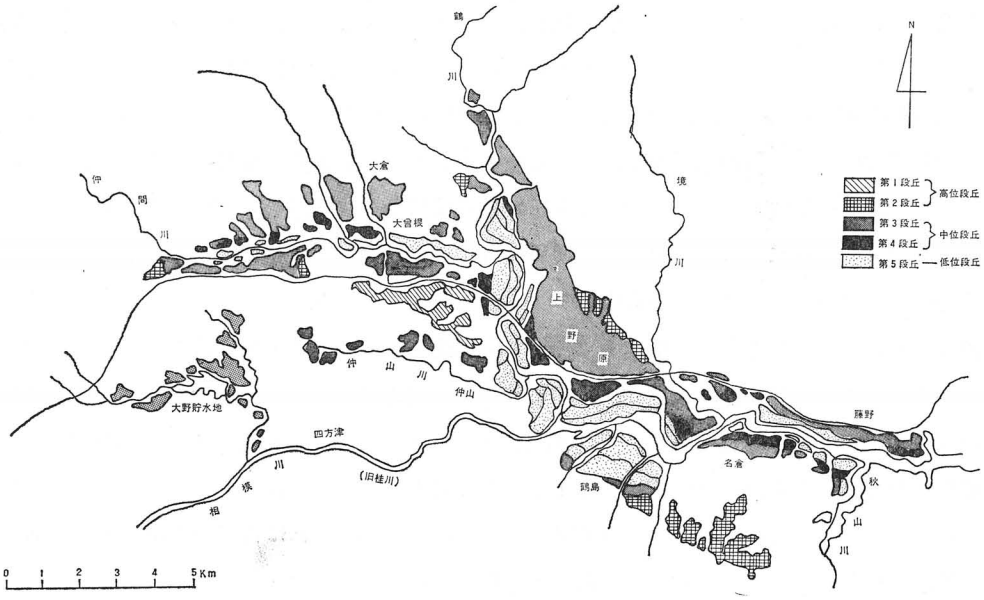
中位段丘は広範囲にしかも顕著に発達している。なかでも上野原のある約250～280mの標高を有する面は典型的である。

中位段丘面は古くから生活の場として利用され，日野・野田尻・荻野・桑久保・芦垣・大倉・川合・久保・杖突等，部落の立地も多い。

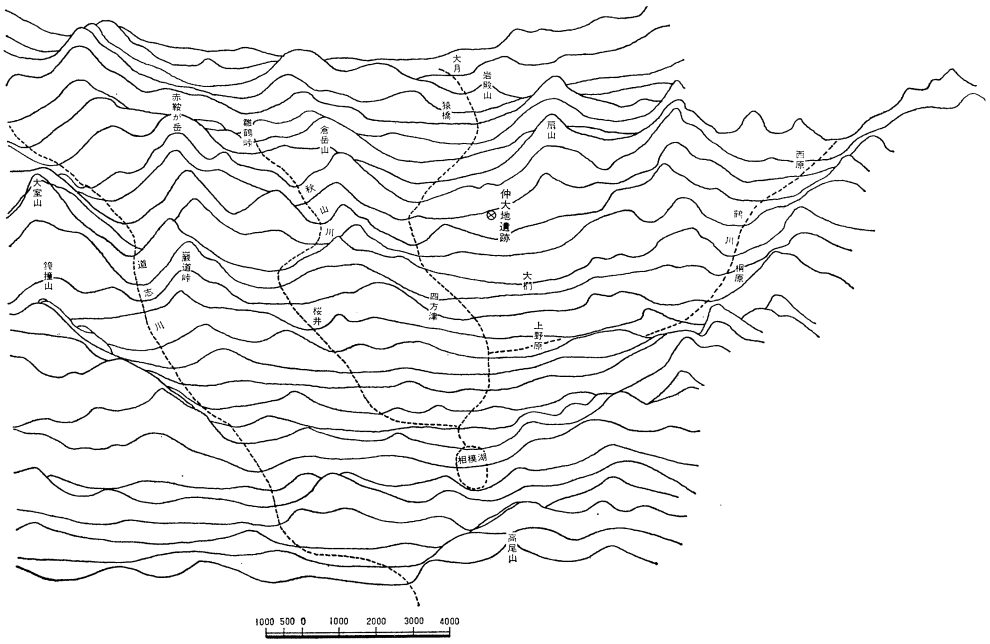
山地に対し平坦面をなす河岸段丘は，地形的に利用度が高い反面，段丘構成物質の性質上水利が悪く，地下水はほとんど得られないという不便さがあり，住民の水に対する苦労はひとしおである。

低位段丘は水面からの比高が最も小さく，かつ現流路に最も近く，かつまたそれに寄り添うように発達している段丘である。とくに新田のある段丘はその典型例である。

浸食の復活による浸食力の増大は下方や側方の浸食作用をおこし，谷は広く深く形成され，原地形は谷の発達により起伏の激しい地形と化してしまう。現在見られる地形も浸食作用の結果生



第3図 段丘分布図



第4図　地形断面図

じたものであるが，約20～30万年前の地形景観を推測すると，図のようになる。図の中の線は現在の相模川，鶴川等の流路であるが，過去の流路と比較すると，谷の位置や方向は今とほぼ同じであったことが予測できる。また過去の谷中は今の谷中よりはるかに広く，平原的景観をなし居住には現在よりはるかに適していたように思える。

(3) 地質概観

地質時代の中できわめて新しい時代の物質，それは段丘礫層やそれらをおおう関東ローム層である。そしてこれらの土台になっている物質は古くは中生代（約2億年前）に始まり，新しくとも新生代前期の第三紀層（1千万年前）である。上野原町においては北部にきわめて古い中生代の地層，南部に古い第三紀層前期の地層，中部にやや古い第三紀層後期の地層が分布している。そしてこれらの地層は基盤をなし，この上に第四紀の砂礫層やテフラがのっているのである。

テフロクロノジーによる富士火山との関係は古くから研究がなされているが，上野原町で見られるのは，高位段丘にのる古富士火山のテフラ等である。

古富士火山の噴火にともなう噴出物には，火山角礫・灰砂・泥流・溶岩層などが見られるが，その泥流の中から発見された天然木炭の年齢を放射性炭素（C^{14}）法によって測定した結果，(21,900±）年（津屋弘逵1969）という値が出ている。したがって，この天然木炭を包蔵する泥流を噴出した古富士火山は，今から約2万1千年前に噴火したことが推測される。

古富士の泥流の上には整合してスコリア質ロームがのるが，これは古富士火山の末期の活動により噴出されたものであり，約1万年前と考えられている。

ロームの酸性度は，PHが（4.0～6.5）であるため，生物の遺骸は化石として残されている場

合がきわめて少なく，化石による層位の決定は困難で，それ以外の鍵層・鉱物組成・不整合面と暗色帯等の諸特徴により，決めなければならない。

上野原付近に発達する河岸段丘の構成物質は，次のようになる。

高位段丘は砂岸・頁岩・粘板岩・凝灰岩等からなる段丘砂礫層の上に，クラックの発達した黒褐色のローム層，その上に7～8cmの層厚をもつ木層の御岳山に由来する白色パミス（Pm—1）その上に古富士火山のスコリア混じりのローム層がのっている。また高位段丘中下位にあたる段丘の構成物質は，砂礫層の上に水成の白色パミス（アリタ状Pm—1）が約50cmの厚さでのり，その上にはPm—1が点在した細砂・シルトの互層，またはシルト質細砂の中に直径10cm前後の埋積木がはいっている層がのり，さらにその上には，スコリア混じりのロームがのっている。

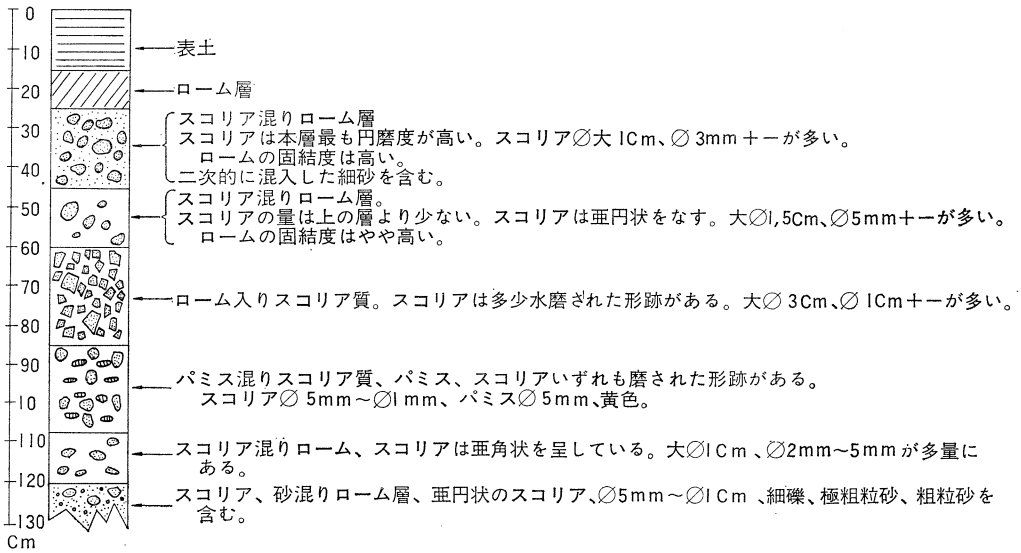
中位段丘の堆積物はチャート・砂岩・頁岩等の礫からなる砂礫層の上に，シルト質の亜角礫層が不整合でのり，その上に古富士火山に由来する泥流がのり，さらにその上には，スコリア混じりのローム層がのっている。

これは詳細には赤褐色スコリア質ロームであり，古富士火山の末期の火山活動に由来するもので，この活動は約1万年前まで続いたと考えられている。またこの上に黒い褐色のスコリアがのっている所があるが，これは新富士火山の活動に由来するものであり，その年代は数千年前と推定される。

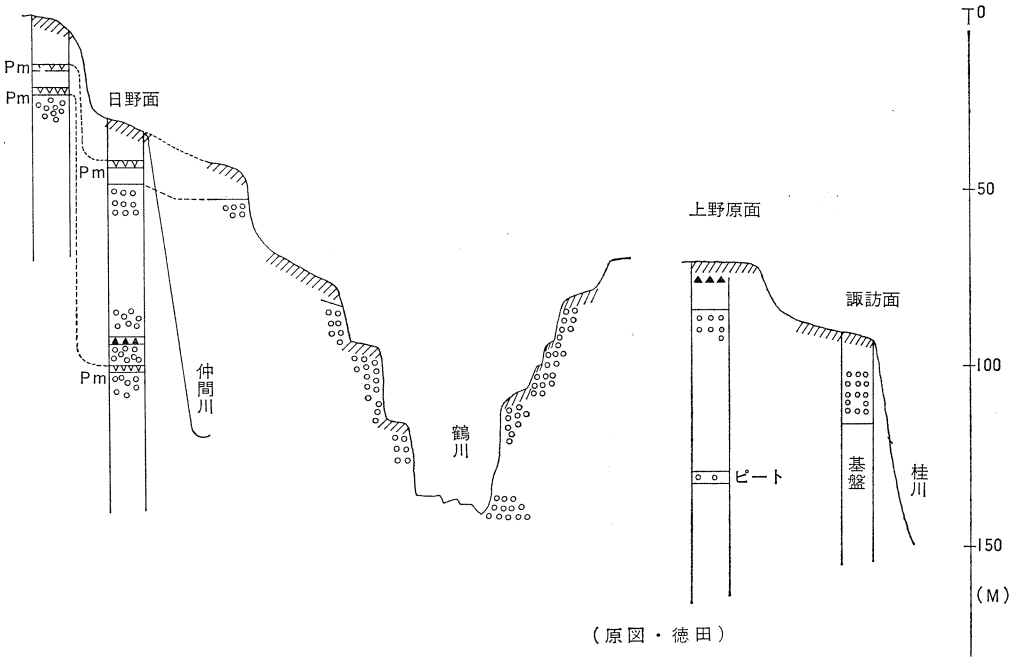
ローム層中に含まれるスコリアは降下後水磨された形跡があり，多孔質の角ばったスコリアが円形になっている層もある。またローム層中下位の方には，水成のパミス層もはさまれている。

低位段丘は直接基盤が露出している面，沖積薄層がのる面，スコリア混じりのローム層ののる面等がある。以上の段丘中高位段丘と中位段丘を構成している物質を模式的に柱状図に示すと次のようになる。

（内藤　久敬）



第5図　中位段丘ローム層柱状図



（原図・徳田）

第6図　模式柱状図

第３章　調査の概要

(1)　調査にいたるまでの経過

昭和47年から48年にかけての山梨県埋蔵文化財包蔵地調査の一環として，昭和48年３月地元の横瀬武文の報告及び案内により，恋塚下・中野原１・２・３・仲大地等，(株)上野原カントリーゴルフ場建設予定地内に，７カ所の遺跡を確認した。

昭和48年10月，上野原考古学研究会員連名で，(株)上野原カントリーに対し，ゴルフ場建設予定地内の遺跡保護について，８項目の要望書を提出した。

上野原町教育委員会は業者を行政指導するとともに，県文化課の係長及び森，森本両文化財主事を招き，現地調査を行う一方，同研究会でも東京より川崎義雄，重住豊両先生を招き，現地調査を行う。

その結果，恋塚下遺跡は弥生時代から古墳時代の土器片が確認され，しかも海抜540mと高地にあり，古い時代の弥生土器ではないかと推測された。中野原２・３遺跡からは，縄文早期及び土師・須恵の土器片が確認された。

町教育委員会の横瀬教育長をはじめ，前鷹取次長，前木下主任，村上信行係員等の努力で業者側は，行政発掘の線で動き出した。

昭和49年１月７日から３日間，業者の依頼により同ゴルフ場建設予定地内の７遺跡，８カ所を予備調査した。これには森本圭一，川崎義雄，重住豊先生等の指導のもとに，同研究会員を中心として延べ60人が動員された。

その結果，中野原３遺跡で土師の住居址を確認，中野原２遺跡では，縄文早期の押型文の土器片を伴う焼土を発見，仲大地遺跡では，縄文早期の条痕文の土器片を伴う石組を発見等，多くの成果がみられた。

町教育委員会は研究会員の意向を汲み，コース変更等により遺跡を保護するよう業者を行政指導した。しかし地形上コース変更は不可能という結論に達し，やむなく業者は，文化財保護法25条により行政発掘調査を申し出た。

昭和49年７月３日，上野原町教育委員会と上野原カントリーの間で，ゴルフ場建設予定地内遺跡の行政発掘の委託契約が結ばれた。その内容は，予定地内重要遺跡４カ所を中心に約30aをすでに調査済の予備調査費を含め，400万円で発掘調査するという厳しいものであった。

地元の埋蔵文化財を守ろうとして立ち上がった。われわれが，このような厳しい条件で，発掘調査をすることは，大きな矛盾であり再三に及ぶ徹夜の討議の末，町教育委員会が最善の協力をするという条件で，同研究会がこの調査を担当することになった。もちろん川崎義雄，重住豊両先生の直接の指導や，慶応大学の江坂輝弥教授の助言があったからこそできたことである。

しかし，発掘にかかる直前に町教育委員会の人事移動があり，この調査を一層苦しいものにしたことは，紛れもない事実である。

(2) 第1次調査の経過

49年7月8日(晴) 現地にて，鍬入式および地形測量と基準点の設定。

7月9日(晴のち曇) カヤやシノの雑草，雑木の刈り取りと，グリットラインの延長およびテントの設営。

7月10日(曇のち雨) 雑草の刈り取りと飲料水の探索，雨の中も続行。

7月11日(曇のち雨) 器材の運搬と雑草の刈り取り，夜測量の反省と今後の対策について話し合う。

7月14日(曇のち雨) 水道の設置とボーリング棒による表土の調査。

7月15日(曇のち雨) 本部の宿泊所の交渉および現場の隣接地主宅への接渉。

7月16日(曇のち雨) A5区のグリット設定とA5c5・A5d4・A5e5の3グリットを掘り下げ，剥片石器および土器片発見。

7月17日(曇のち雨) A5区の同3グリット掘り下げ，石器および土器片発見。

7月18日(曇) A4区のグリット設定と同3グリットの掘り下げ，A5c5グリット内に落ち込み確認。

7月19日(雨のち晴) A5c5グリットの床面清掃と写真撮影およびA5c1・A4c2の2グリットを掘る。

7月20日(晴のち雨) 同2グリットの掘り下げと器材の運搬，土器片多数発見。

7月21日(曇のち雨) A1区・A2区・B1区・B2区等のグリット設定。A1a1・A1c3・A2a1・A2c3・B2a1の5グリットを掘り下げ，A1a1より石組と落ち込み確認B2a1より勝坂式土器片発見。他グリットより多数の土器片および黒曜石やチャートのフレーク等多数発見。

7月22日(晴) A6区・A7区・A′7区等のグリット設定。B1c3・B2c3・B3a1・B4a1・B5a1の5グリットを掘り下げB3a1より打製石斧と石鏃を発見。他グリットより多数の土器片及び黒曜石のフレーク等多数発見。

7月23日(晴) A2c3・A3a1・A3c3・B2a1・B3c3・B4a1・B5a1・A4a1・A′7c3の9グリットを掘り下げB2a1より押型文土器片発見。B3c3より土師器片発見。その他グリットより土器片多数発見。

7月24日(曇のち雨) B3c2・3・4・B3d2・3・4の6グリットの表土を剥ぎ，土師の住居址らしい落ち込み確認。

7月25日(雨) 雨天のため作業中止。現場にて重住豊先生より発掘方法の指導を受ける。

7月26日(晴) B3区の拡張（B3e2・3・4）とA1a1・B3a5・A3b5・A4b1の4グリットを掘り下げ，A1a1よりファイヤーピットを確認。B3区より土師の住居址（第1号住居址）の方形プラン確認。

7月27日(晴)　B３区の第１号住居址（以後第１住と呼ぶ）の掘り下げとＡ３a４の拡張およびＡ１a１の写真撮影。第１住内より良質の粘土発見（釜？）。床面には全体に炭が分布している様子。夕方地元住民に第１号パンフレット配布。

7月28日(晴)　B３区第１住の発掘方法について川崎義雄先生の指導を受ける。

7月29日(晴)　A′01区のグリット設定と表土剥ぎ，およびＡ６b２・Ａ６c２の掘り下げ県文化課森本圭一先生現地視察。

7月30日(晴)　A′01区の掘り下げとＡ６c２・Ａ６c３・Ｂ５c５・Ａ７a１の４グリット掘り下げ。A′01区よりファイヤーピットを含む土壙群確認。また同区より押型文及び条痕文系土器片多数発見。Ａ６c２より諸磯式土器片発見。

7月31日(晴のち雨)　A′01地区の土壙群を掘る。Ｂ３区の第１住を掘る。Ａ２a１・Ａ２c３・Ｂ２a１・Ｂ２c３・Ａ１c３の５グリットの掘り下げ，A′01区より配石遺構らしきもの確認。多数の土器片と石器および黒曜石のフレーク等も発見。夜発掘方法及び今後の方針について討議し決定する。

8月1日(晴のち雨)　A′01区の土壙群を掘りセクション図をとる。Ｂ３区の第１住の掘り下げ，上げ土の整理。

8月2日(晴のち雨)　Ｂ２a１にて仲大地遺跡の地層の名称統一。重住豊先生より指導を受ける。Ｂ２c４・Ｂ２d３・同d４・Ａ２b１・同a２・Ｂ３b２・同b３の７グリット表土を剥ぎ，Ｂ３区の第１住の掘り下げと写真撮影。Ａ６区の掘り下げ，Ａ６b２より配石および焼土確認し清掃して写真撮影。Ａ７a１より落ち込み確認。夕方地元住民に第２号パンフレット配布。

8月3日(晴のち雨)　Ｂ３区の第１住の掘り下げをしＡ６区を実測。E01区の掘り下げ。遺跡全景写真の撮影。第１住の床面確認終わり，見学者の増加が目立つ。

8月4日(晴)　A′01区の土壙群を掘る。Ｂ３区の第１住を掘り記録写真（スライド用）および遺物・遺構の写真撮影。A′01区のセクションベルトの一部を取り土壙群の確認ほぼ終わる。

8月5日(晴)　休日，夜反省会。

8月6日(晴)　A′01区の床面清掃。Ｂ３区の第１住の掘り下げＣ１c３・E01c３の２グリットの掘り下げを行う。

8月7日(晴)　Ａ６区の掘り下げ，Ｂ３区の第１住のセクション図作成。A′01区のセクション図作成。D01a１の掘り下げを行う。

8月8日(晴)　Ａ６区の掘り下げ，Ｂ３区の第１住内のセクションベルトを取る。A′01区のセクション図作成。Ｄ１b１の掘り下げ，Ｂ３区第１住内中央部より大きい炭化物のかたまり（柱？）と西側壁付近より周溝を発見。夕方地元住民に第３号パンフレット配布。

8月9日(晴)　A′01区のセクション図完成と第１号土壙から第４号土壙を決定。Ｂ３区第１住内を保護するため，シートと盛り土をする。上げ土の整理作業をし夕方，宣伝カーを使い11日の説明会について地元住民にピーアールする。

8月10日(晴)　A′01区の拡張。第２号土壙の実測。第５号から第９号土壙決定しＢ２区を掘る。Ａ６区の掘り下げA′01区第６号土壙よりローム直上に焼土発見。焼土中に黒岩を含み，焼石

と土器片を発見。第７号土壙内より条痕文系土器片を発見。

８月11日(曇)　現地説明会を開催し約100名参加。A′01区の土壙群とＢ３区の第１住を中心に重住豊先生説明。町教育委員会臼井次長より挨拶を受ける。

８月12日(晴)　Ｂ３区の第１住内釜（？）実測しA′01区とＡ６区を掘る。E02a１・同ｃ３・E02a１の３グリットを掘る。Ａ６a６より落ち込みを確認し茅山式土器片と石器を発見。Ｅ02a１より諸磯式土器片発見。

８月13日(晴)　Ａ６区のセクション図執りと遺物の平板およびレベルの測量。Ｂ３区の第１住内釜（？）の切り取りおよび平板測量。A′01区の拡張により第10号と第11号土壙を決定。石組や焼土を発見。

８月14日(晴)　休日。

８月15日(晴)　A′01区の拡張部分の清掃と11号土壙を掘る。Ａ６区の実測作業。上げ土の整理。A′01区の拡張部分で，落ち込みや石組を発見。

８月16日(晴)　休日。

８月17日(晴)　A′01区の土壙を掘り，Ａ６区の実測作業。夕方教育委員会と今後の方法について交渉。

８月18日(曇)　A′01区の土壙を掘り，Ａ６区の実測作業。発掘のまとめについて，川崎義雄先生の指導を受ける。夜研究会幹部の話し合い。

８月19日(晴)　A′01区の土壙を掘る。Ａ６区の実測作業。

８月20日(晴)　A′01区の土壙を掘り，Ａ６区の実測作業。中野原２遺跡の現地踏査と発掘前の写真撮影。都留市教育委員会・文化財審議委員６名見学。

８月21日(晴)　A′01区の土壙を掘り，Ａ６区の実測作業。夕方研究会幹部東京へ行く。

８月22日(晴)　A′01区の土壙を掘り，Ａ６区の実測作業。Ｂ３区第１住の煙道（？）を掘る。

８月23日(晴)　慶応大学江坂輝弥教授，川崎義雄先生の案内で現地を視察。大韓民国の林先生も同伴。A′01区の配石土壙は茅山あたり。同第12号土壙は小竪穴住居址（第２住居址）と決定。床面直上の大形土器片より西日本的な文化とくに東海系の粕畑式に類似，午後作業続行。

８月24日(曇のち晴)　休日。横瀬武文現地にて見学者に説明。

８月25日(雨)　現地での作業を中止し，室内で遺物整理。夜研究会役員会を開催今後の対策を協議。

８月26日(雨)　遺物を整理し，午後町教育委員会と今後の対策について協議。夕方地元住民に第４号パンフレット配布。

８月27日(晴)　現地で台風の後かたづけ，中野原２遺跡でトレンチの雑草を刈り取る。

８月28日(晴)　A′01区の土壙とＢ３区の第１住を実測。Ａ６区の整理作業。

８月29日(晴)　A′01区の土壙とＢ３区の第１住を実測。Ａ６区の整理作業。

８月30日(晴のち曇)　A′01区とＢ３区の第１住の整理作業およびＡ６区の整理作業。現地より本部宿泊所へ遺物の運搬と会計整理。

８月31日(雨)　雨の中Ａ６区・Ａ７区の整理作業。第１次調査の概報作成。夕方地元住民に発

掘調査のスライドを公開。夜遺物台帳の整理と概報の印刷。

9月1日(大雨)　台風のため慰労会1週間延期。

9月8日(晴)　仲大地遺跡第1次発掘調査中間報告会および慰労会実施。

9月13日　町教育委員会と遺跡の保護と今後の調査について協議。

9月14日　夜，研究会役員会を開き第1次調査の反省と今後の対策について協議。

11月3日　A6区・A7区にビニールシートを張り，盛り土して遺構を保護する作業。

11月4日　遺構の保護作業完了。

11月5日　教育委員会と第1次調査の整理と今後の対策について協議し昭和50年3月までに，遺構・遺物について整理し，図版等を作成，ゴルフ場予定地内の他遺跡に対し，コース変更，工事方法の改善等により保護し，仲大地遺跡の第2次調査が出来るよう町教育委員会は業者を行政指導する等の結論を出す。

以上が第1次発掘調査の主な経過であるが，その後上野原カントリーの経営者交代等いろいろな出来ごとがあり，昭和50年2月10日，業者の依頼によりゴルフ場建設予定地内の主な4遺跡に，ビニールテープを張り所在を明確にする作業を実施，業者より工事方法（盛り土等により）およびコースの変更をすることの了解を得た。

(3) 第2次調査の経過

50年7月5日仲大地遺跡第2次発掘調査調査団会議を開催第2次調査の内容と方法を決定。

7月16日(晴)　現地にて鍬入式。器材の整理と水道の修理を行う。

7月17日(晴)　休日。

7月18日(晴)　雑草の刈り取り。水道の修理，80mトレンチの設定と表土剥ぎ。

7月19日(晴)　80mトレンチの表土剥ぎ。

7月20日(晴)　A6区・A7区の盛り土とビニールシートの排除及び整理。

7月21日(雨)　A6区・A7区の整理と土壙のプラン確認。

7月22日(晴)　A6区・A7区の整理と土壙のプラン確認。褐色土（ソフトローム）直上よりチャート製スクレーパー・黒曜石製剥片石器・尖頭器（？）等を発見。

7月23日(晴)　A6区・A7区の清掃と土壙のプラン確認。ローム直上より表裏縄文土器片発見。

7月24日(晴)　A6区の一部を拡張し第2層まで掘り下げる。土器片等多数発見。

7月25日(晴)　A6区・A7区のセクション図作成と平板測量。A7区の第3号・第4号土壙を半分掘る。第3号土壙内より条痕文系の土器片発見。第4号土壙内より，尖底土器の底部発見。

7月26日(晴)　A6区・A7区の平板測量と第3号・第4号土壙内の断面図作成。80mトレンチの掘り下げ。

7月27日(晴)　A7区の第3号・第4号土壙を掘り上げる。80mトレンチの掘り下げと雑草の刈り取り。第3号土壙内より尖底土器の底部発見。

7月28日(晴)　80mトレンチの掘り下げ，押型文土器片や加曽利E式（？）土器等多数発見。

7月29日(晴)　A01区を拡張し表土を剥ぐ。午後ロームまで掘り下げ，拡張部分からはあまり遺物も見られず，土壙群の広がりも確認できない。夜，宿舎にて津久井高校生のミーティング実施。

7月30日(晴)　A01区の拡張部分の掘り下げと清掃。A6区の整理。A01区の拡張部分より数カ所の落ち込み確認。

7月31日(晴)　休日。

8月1日(晴)　A01区の拡張部分のセクションベルトの一部を取る。A7区の土壙を写真撮影。

8月2日(晴)　A01区の拡張部分の清掃。80mトレンチのセクション図作成，A01区の拡張部分より，土師の住居址らしいもの確認。

8月3日(晴)　A01区の拡張部分の土師の住居址らしいものの掘り下げ。80mトレンチのセクション図作成。A6区第1号・第2号土壙を掘る。

8月4日(晴)　A01区の拡張部分の土師の住居址らしいものの掘り下げ。80mトレンチのセクション図作成。夜，発掘方法等の反省会を開き今後の対策を決定。

8月5日(晴)　80mトレンチのセクション図作成。A1区およびA01区の拡張と掘り下げ，A6区の1部拡張。

8月6日(晴)　80mトレンチのセクション図作成。A01区の南北セクション図作成。A01区及び80mトレンチの写真撮影。A01区のセクションベルトを取る。A01区のセクションベルトより，押型文土器の尖底部発見。

8月7日(雨)　現地での作業中止，宿舎で遺物の整理。

8月8日(曇り)　80mトレンチのセクション図作成。A01区の清掃。A6区拡張部分の掘り下げ。C1区の雑草を刈り取る。A01区よりいくつかの落ち込み確認。

8月9日(曇)　C1区のグリット設定。A01区の小ピット群を掘る。A6区の拡張部分ロームまで掘り下げる。80mトレンチのセクション図作成。A01区の土師の住居址らしいものを掘る。A01区の土師の住居址らしいものは，張り床と釜および床面直上より大形の土師器片を発見。土師の住居址（以後第3住と呼ぶ）と決定。A6区の拡張部分より大形の撚糸文土器（井草式？）片を発見。

8月10日(曇)　80mトレンチのセクション図完成。C1区の表土剥ぎ。A01区の小ピット群の平板測量。A6区また拡張，同大形土器片発見の小ピットを掘る。

8月11日(曇)　A01区およびA6区の写真撮影。A01区の第3住の清掃。C1区の表土剥ぎ。

8月12日(晴)　A01区の第3住を釜切りだけ残して掘り上げる。A1区の落ち込みを掘る。C1区の表土剥ぎ。A6区の拡張部分掘り下げ。A6区の拡張部分で，土壙とファイヤーピットを確認する。

8月13・14・15日　休日。

8月16日(曇のち雨)　A1区の落ち込み掘り下げ，雨のため午前中で作業中止。

8月17日(雨)　作業中止。

8月18日(雨のち晴)　A１区の落ち込みを掘る。C１区の清掃。A01区の小ピット群の平板測量完成。A１区の落ち込みは遺構でないことを確認する。

8月19日(晴)　A１区の落ち込みを掘る。A01区の第３住の釜の一部を掘る。C１区の清掃と落ち込みの調査。A１区の小竪穴らしい方形の落ち込みは床面がきまらず，立ち上がりも弱いため，住居址でないことを確認する。

8月20日(晴)　A１区の落ち込み掘り上げる。A01区の南北セクション図完成。A01区の第３号住の釜の断面図作成。C１区の清掃と落ち込みの調査。

8月21日(晴)　A１区のセクションベルトを取る。A01区の第３号住の平板測量。C１区の清掃と落ち込みの調査。C１区とC２区にまたがり，約12m×12mの面積に表土を剥ぎ調査したが，遺構らしい落ち込みは確認できなかった。

8月22日(曇のち雨)　雨のため作業を中止し，地元住民にパンフレットを配布。

8月23日(雨)　作業中止。

8月24日(晴)　台風の後かたづけ。A５d５の掘り下げ。A６区のファイヤーピットを掘る。A６区の埋め戻し作業。A５d５より土器片と石器等多数発見。

8月25日(晴)　A01区の第３号住の測量を終わり写真撮影。A６区のファイヤーピット内の断面図作成。A５d５を掘り下げ。A６区の埋め戻し作業。

8月26日(晴)　C１区のセクション図作成。A６区にロームまでのテストピットを掘る。

8月27日(晴)　A６区のロームへのテストピットを掘り下げる。A６区のファイヤーピットの測量完成。A６区の埋め戻し作業。A６区のロームまでのテストピットで，ローム層中より黒曜石の破片発見。夜，反省会にて今後の整理作業について討議する。

8月28日(晴)　A６区のロームへのテストピットを掘り下げる。A６区ファイヤーピットおよび集石の整理。A６区の埋め戻し作業。

8月29日(晴)　危険性のある廃土の山の処理作業。現地作業完了の祝。水道ホース・器材・器具の整理とその運搬。

8月30日(晴)　甲府より見学者あり，現地を案内する。

9月７日(晴)　A６区のロームまでのテストピットの断面図と写真を撮り，埋め戻す。

9月13日(晴)　仲大地遺跡第２次発掘調査，報告会及び慰労会実施。

第4章　遺　　構

(1) 土　層

本遺跡には各時代の遺構が，台地上に点在していることと，山際の台地の付け根と先端部では，著しく土層が異なっていたため，約70mにおよぶトレンチを掘って土層を調査した。図示したこの土層は台地の東西セクション図である。

第Ⅰ層は表土で15～40cm（上部山際が薄く，下部先端部が厚い）の厚さに堆積しているやわらかい黒色腐植土で，カヤ・ツタ・シノ等の根が張っていた。遺物は少なくほとんどが，土器の小破片であった。台地の上部山際では土師器片を中心に確認された。

第Ⅱ層は砂質の黒褐色土を主体とし，スコリア粒を含有する粘性のない層である。

第Ⅱ－1層と第Ⅱ層とは土質が同じであるが，堆積した時期が異なると思われる。すなわちⅡ－1層は土師片を主に含有し，Ⅱ層は縄文前期の土器片を主に含有していた。

第Ⅲ層は暗褐色土で，スコリア粒をⅡ層より多く含有している。主体となる粒子の大きさはほぼ同程度だが，粘性はⅡ層より強い。Ⅲ－1・2・3・4・5はⅢと同質であるが，含有する遺物が異なっていた。すなわちⅢ－1は主に土師片を含み，Ⅲは縄文早期の土器片を主に含んでいた。なお，Ⅲ－2・3・4・5は倒木痕と思われる。

第Ⅳ層は褐色土であり，ソフトローム層へと続くため，スコリア粒を多量に含み，粘性も強い。この層からは縄文早期の土器片が主に発見され，表裏縄文土器もこの層から確認されている。

第Ⅴ層は黄褐色土でスコリア粒を含み，粒子が粗くパサパサしている。台地中央部より先端部にかけて堆積しており，縄文中期の土器片を主に包含している。

第Ⅵ層は赤褐色土で粒子は細かいが，粘性はなくスコリア粒を少量含有する。おもに縄文前期の遺物包含層と思われる。

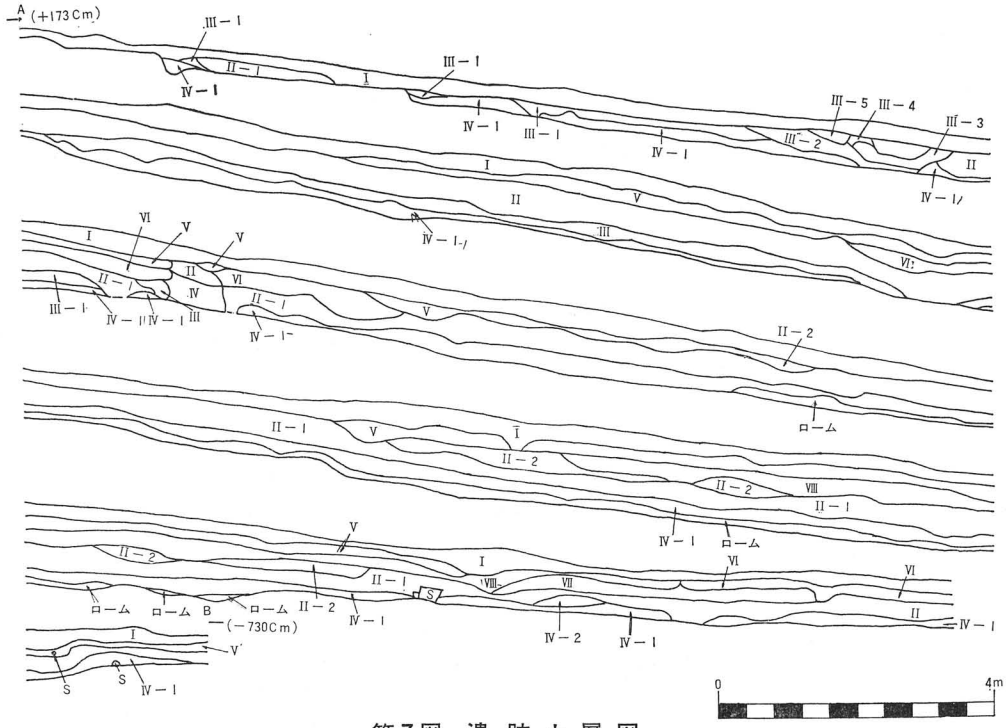
第Ⅶ層は暗黒褐色土でスコリア粒を多量に含み，粒子は粗く粘性はない。おもに縄文前期の遺物を包含している。

第Ⅷ層は黒色土でスコリア粒をごく微量に含み，粒子は粗くゴリゴリしている。この層から縄文中期の土器片を確認している。

第Ⅸ層はいわゆるソフトローム層である。図では部分的にしか見られないが，30～40cmの厚さに堆積し，ハードローム層へと続いている。

以上が主な概要であるが，このセクション図でわかるように土層が非常に複雑であるため，土層番号が層位的に付けられていないので，その見方に特に注意されたい。

（山田　行輝）



第7図　遺 跡 土 層 図

(2)　住居址

本遺跡において，土師・須恵を伴う住居址が発見されることは，当初予想もしなかったが，第1次調査で台地中央部の北側より第1号住居址が発見され，第2次調査でも台地の上部山際より，第3号住居址が発見されたのである。今回の調査では，台地の北側半分しかできなかったため，2基しか発見できなかったが，はたしてこの台地に当時の聚落があったか否かは確認できなかった。しかし地形的にみて，大規模な聚落でなく小規模なものであったと推測される。

第1号住居址

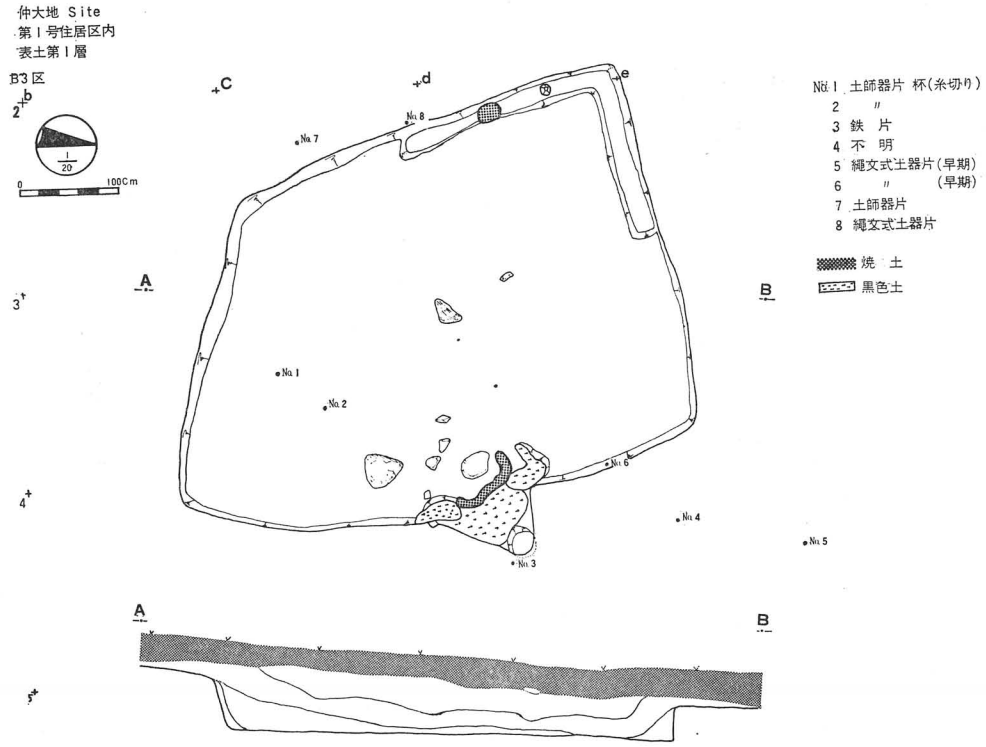
調査過程を層序別に説明すると次のようである。

(1)　表土第1層（第8図−1）

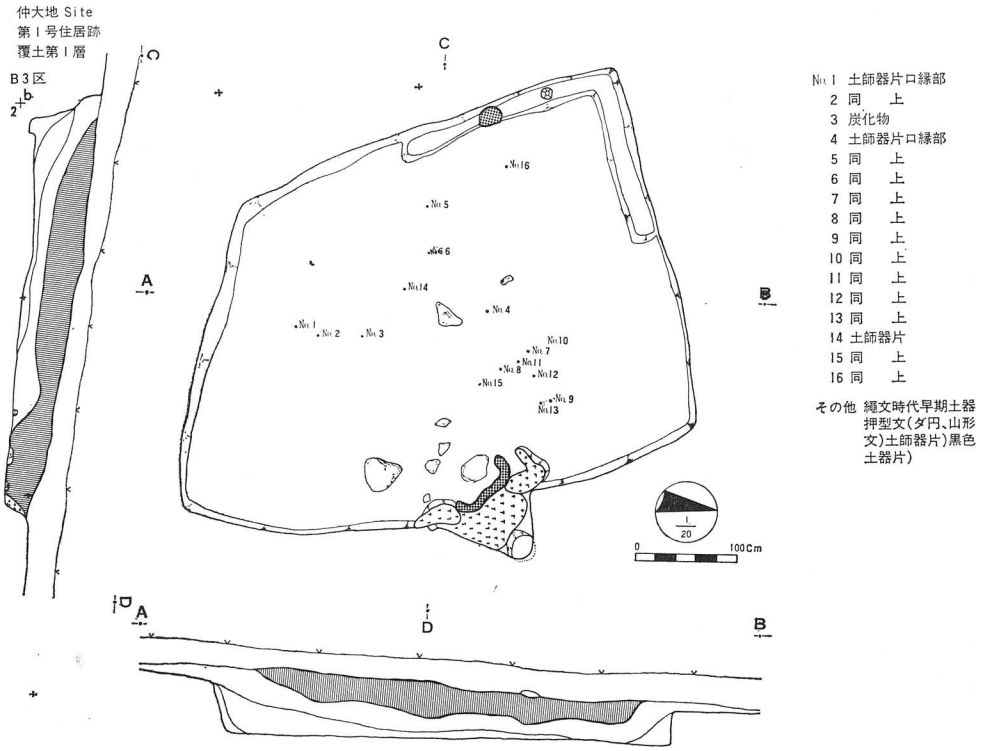
カヤ，シノ等の根を含む黒色腐植土で，かつてこの台地が開墾された時は，耕作土となった地層である。出土遺物は土師器片及び縄文早期の貝殻条痕文系土器片等が見られた。この縄文土器片はおそらく，A′01区よりの流入と思われる。第2層は第1住で切り込んでおり，そのプランや焼土等が確認された。

(2)　第1号住居内覆土第1層（第8図−2）

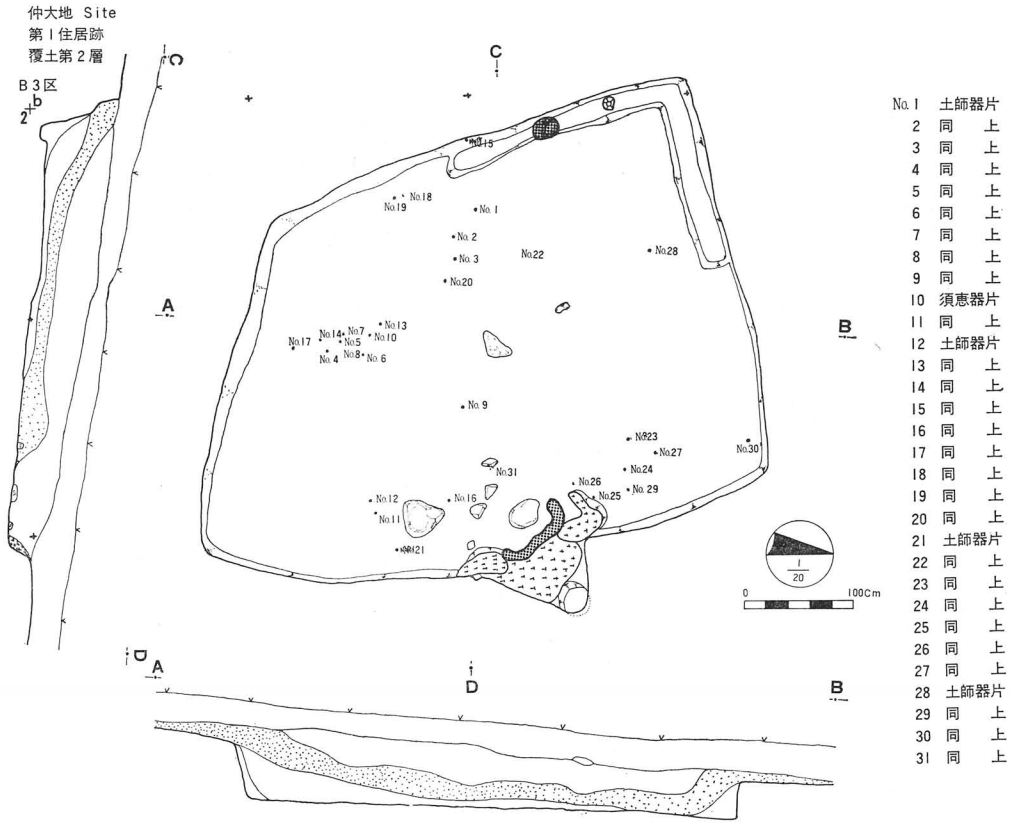
黒々とした黒色土で砂質を含み，粘性のない土層である。出土遺物は土師器片16点，縄文早期の押型文土器片2点を含んでいた。おそらくA1区より押型文が多く見られたことから，そこからの流入と思われる。



第8図 第1号住居址平面図（第8図—1）



（第8図—2）



(第8図—3)

(3) 第1号住居内覆土第2層(第8図—3)

黒色土でスコリア粒を含み，やや粘性のある土層である。出土遺物は土師・須恵器片31点，それに炭化物(木炭状)が多量に見られ，床面を覆うように存在するものと推測された。

(4) 第1号住居内覆土第3層(第8図—4)

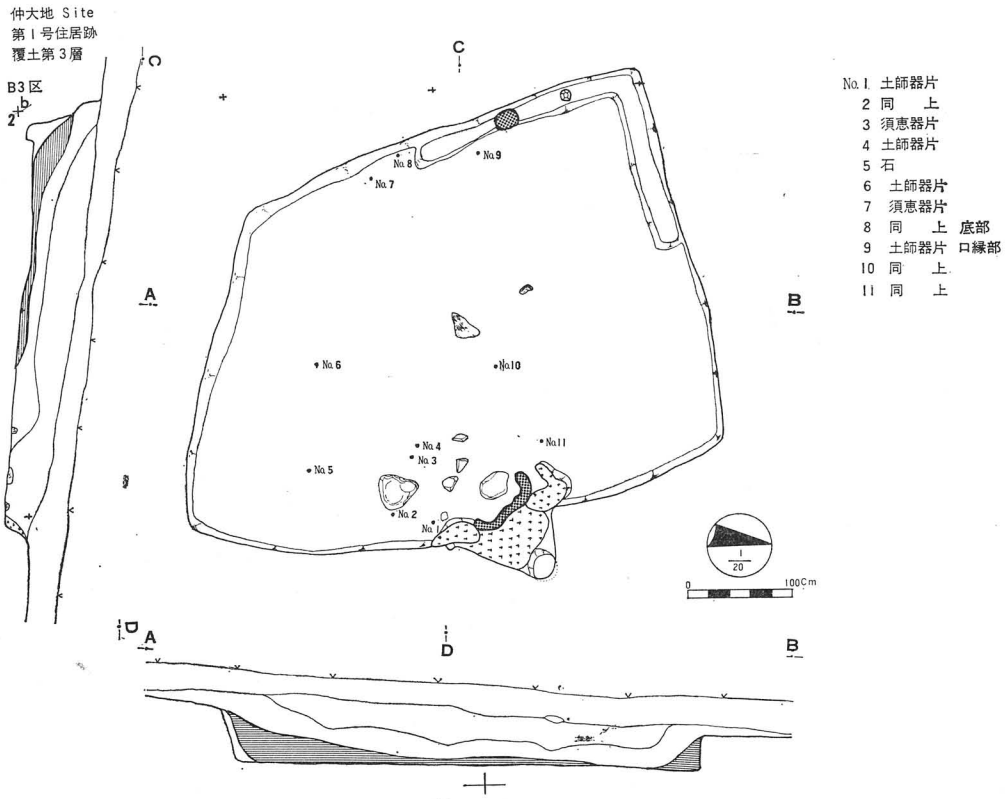
黒色土でスコリア粒をかなり含み，粘性のある土層である床面東部にはほとんど見られず，西側の壁近くで厚く堆積している。出土遺物は土師・須恵器片11点である。

(5) まとめ

第1号住居址は不整隅丸方形プランを呈し，単独住居址で複合は認められなかった。東西3m80cm，南北の西側4m，東側5m10cmの住居址である。北西の隅に一部周溝が見られた。東側の壁面に焼土と多量の灰を確認し，火使用の痕跡(釜?)があった。とくにその部分に大小7個位の石が見られ，一部に煙道らしき物も見られ，芯に石を用いたカマドが崩されたものではないかと推測される。床面中央部に大きな木の炭化物が見られ，この住居が火災にあったことも考えられる。しかし出土する遺物が貧弱であり，完形品がほとんど見られなかったことなどから，やはり捨てられた住居址だと思われる。

第3号住居(第9図)

表土第1層を剥ぐと，はり床式の住居が確認された。不整方形プランを呈し，単独住居址であ



（第８図―４）

る。東西３m60cm，南北３mで，東側に張り出し部分を持ち，南壁面及び西壁面に周溝があり，北側にある溝に流れ出すように構造化された住居である。東側の張り出し部に焼土があり，その部分から土師器片が集中して発見された。床面には径約17・24・20cm，深さ約10cmの３個の小ピットが確認された。また焼土中には焼石がしかれており，一部分にカマドらしきものも見られたが，樹木の根等で崩されており確認できなかった。

第３号住居址周辺の状況

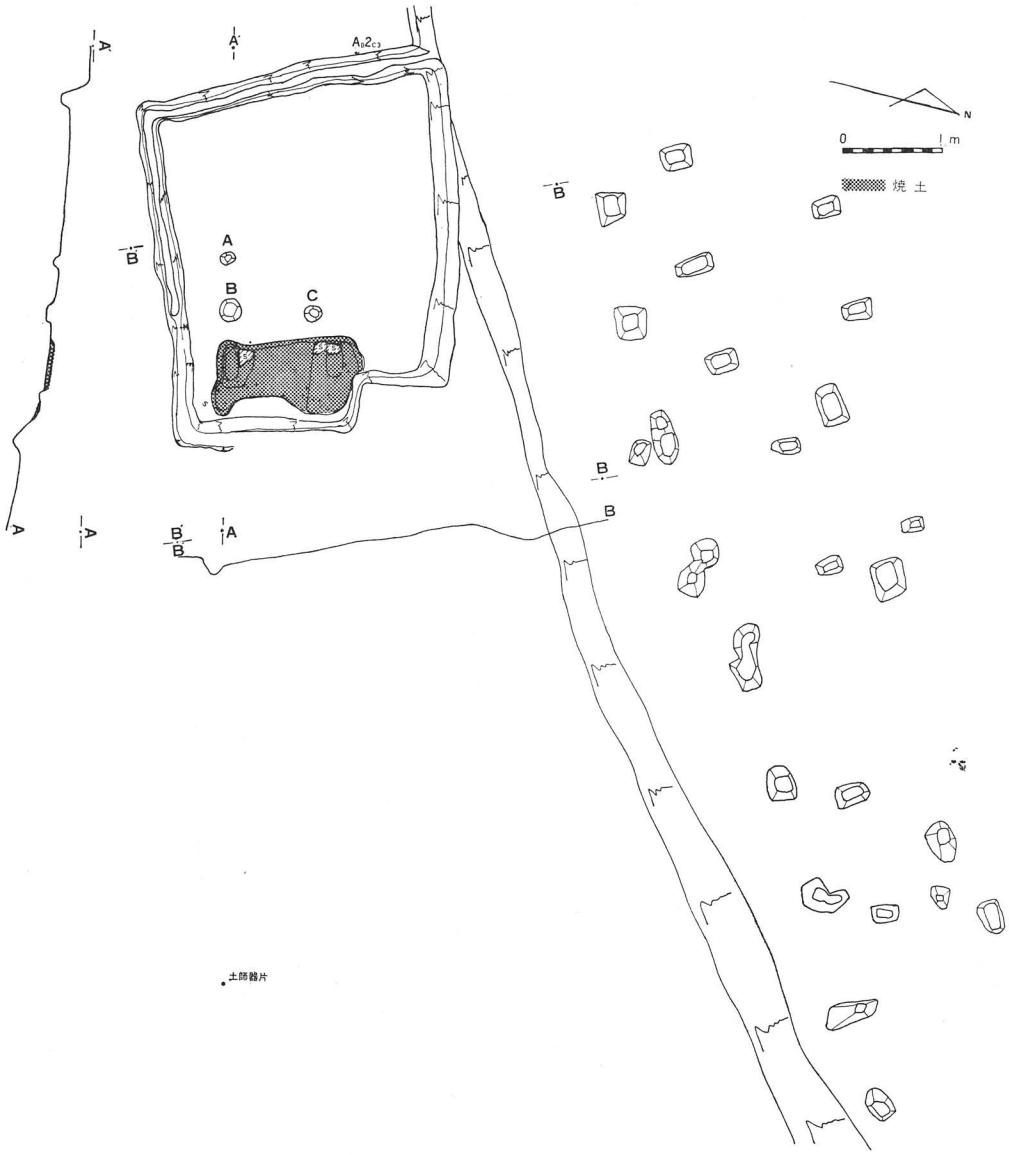
第３号住居址の北壁面には，北東に走る溝があり，溝に沿ってその北側に方形の人為的と思われる小ピット群が計画的に分布しており，さく（柵）ではないかと推測される。

（田中　悟）

(3) 土壙群Ⅰ（A地点）

A地点としたのは，本遺跡が占地する台地の上部山際A′01区である。すなわちＡ１ａ１グリットより集石と焼土を伴う第１号土壙が発見され，A′01区が拡張されたのである。そこには約20基位の土壙が確認されたが，とくに人為的と思われるものを15基調査した。

なおA地点，すなわちA′01区の東西及び南北のセクション図（第10図）を挿入し，その土層及び覆土の説明をしてあるので，遺構と対比して見てもらいたい。



第9図　第3号住居付近平面図

Ⅰ層　表土

Ⅱ層　黒褐色土　（スコリア粒を含む）

Ⅲ層　暗褐色土　（スコリア粒を含む）

Ⅳ層　黒色土　（スコリア粒を含む）

Ⅴ層　褐色土　（ロームブロックを少量含む）

Ⅵ層　　○褐色土（ロームブロックを少量含む）

Ⅶ層　第2号土壙の覆土○黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）

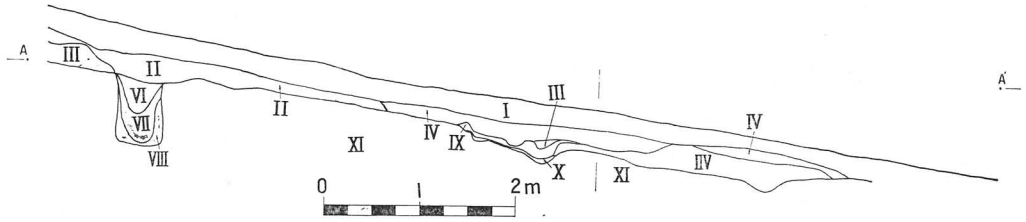
Ⅷ層　　○ロームブロック

Ⅸ層　　○褐色土（スコリアを含む）

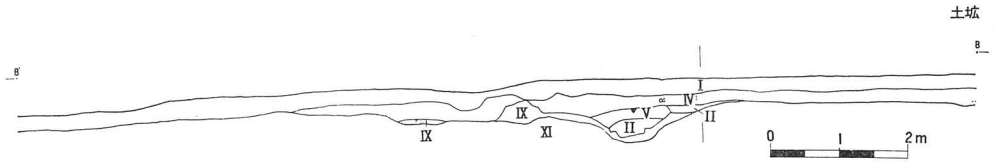
第４号土壙の覆土

Ⅹ層　　○黄褐色土（スコリアを含む）

Ⅺ層　ローム層



第10図　A地点東西セクション図（第10図―１）



A地点南北セクション図（第10図―２）

第１号土壙（第12図）

ほぼ隅丸長方形のプランで長軸146cm，短軸63cm，深さ5cmの土壙である。底面は平坦で，壁がやや傾斜をもって立ち上がっている。長軸東側の覆土第１層上面より，拳大の焼石20個程を認め，長軸西側より焼土を確認した。覆土中には遺物が見られなかった。

第２号土壙（第13図）

ほぼ隅丸長方形のプランで長軸165cm，短軸75cm，深さ75cmの土壙である。東西の壁は垂直に近く，南北の壁はオーバーハングしている。底面は平坦で，長軸に沿ってそれぞれ径25cm，30cm，深さ50cmのピット２個を有する。なお他の土壙と比べ最も深く，壁面や底面など非常にしまりが良い。覆土の状態は大部分がロームブロック層であり，上部は褐色土層である。土壙の周囲には取り巻くように，拳大を中心とした大小の配石が見られた。

第３号土壙（第14図）

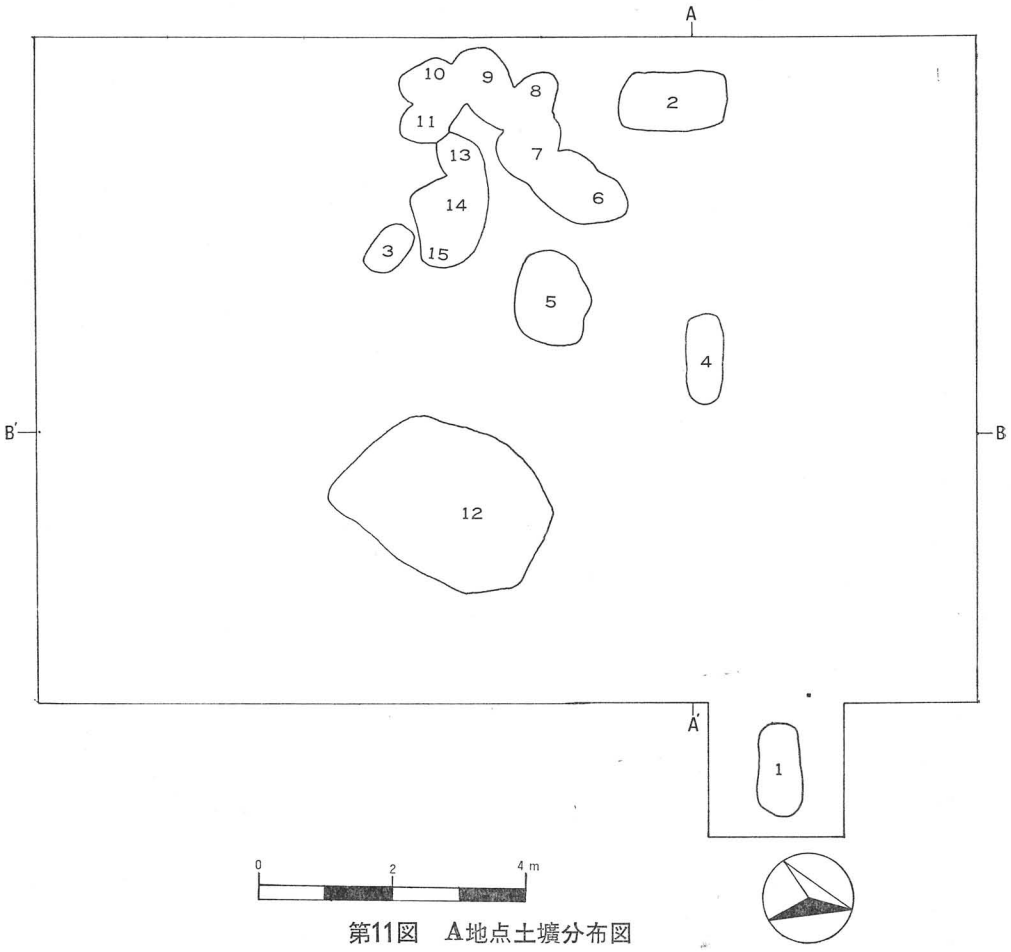
ほぼ楕円形のプランで長軸85cm，短軸45cm，深さ15cmの小形の土壙である。東側の壁は垂直に近く，西側の壁はなだらかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で東壁に径40cm，深さ20cmのピットを有する。覆土中より縄文早期後半の土器片を発見した。

第４号土壙（第15図）

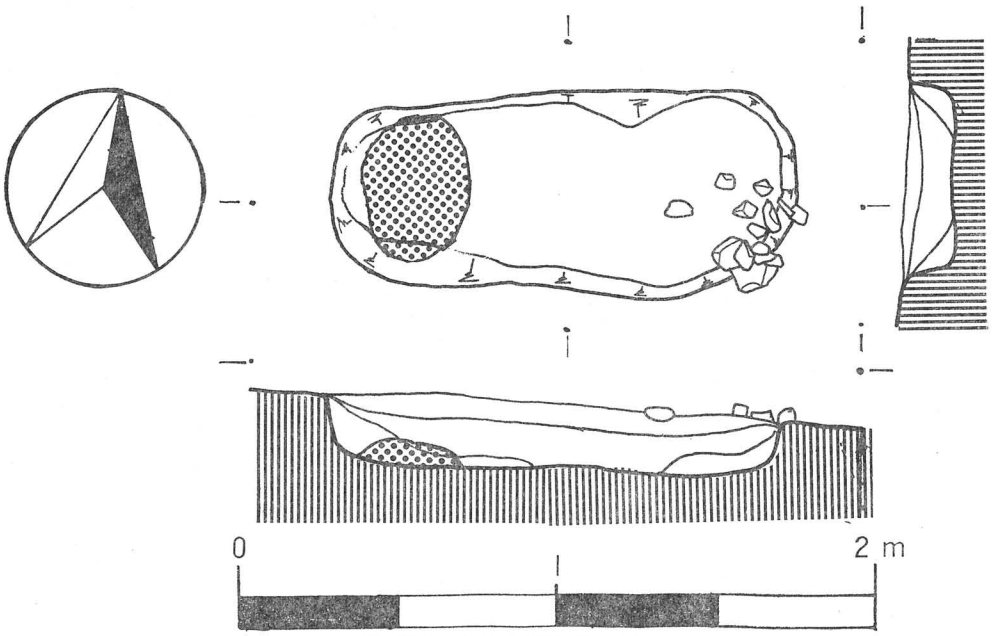
楕円形のプランで長軸132cm，短軸55cm，深さは西側の壁で22cmを測る土壙である。壁は，なだらかに立ち上がり，底面はほぼ平坦で，東側の壁に径30cm，深さ20cmのピットを有する。

第５号土壙（第16図）

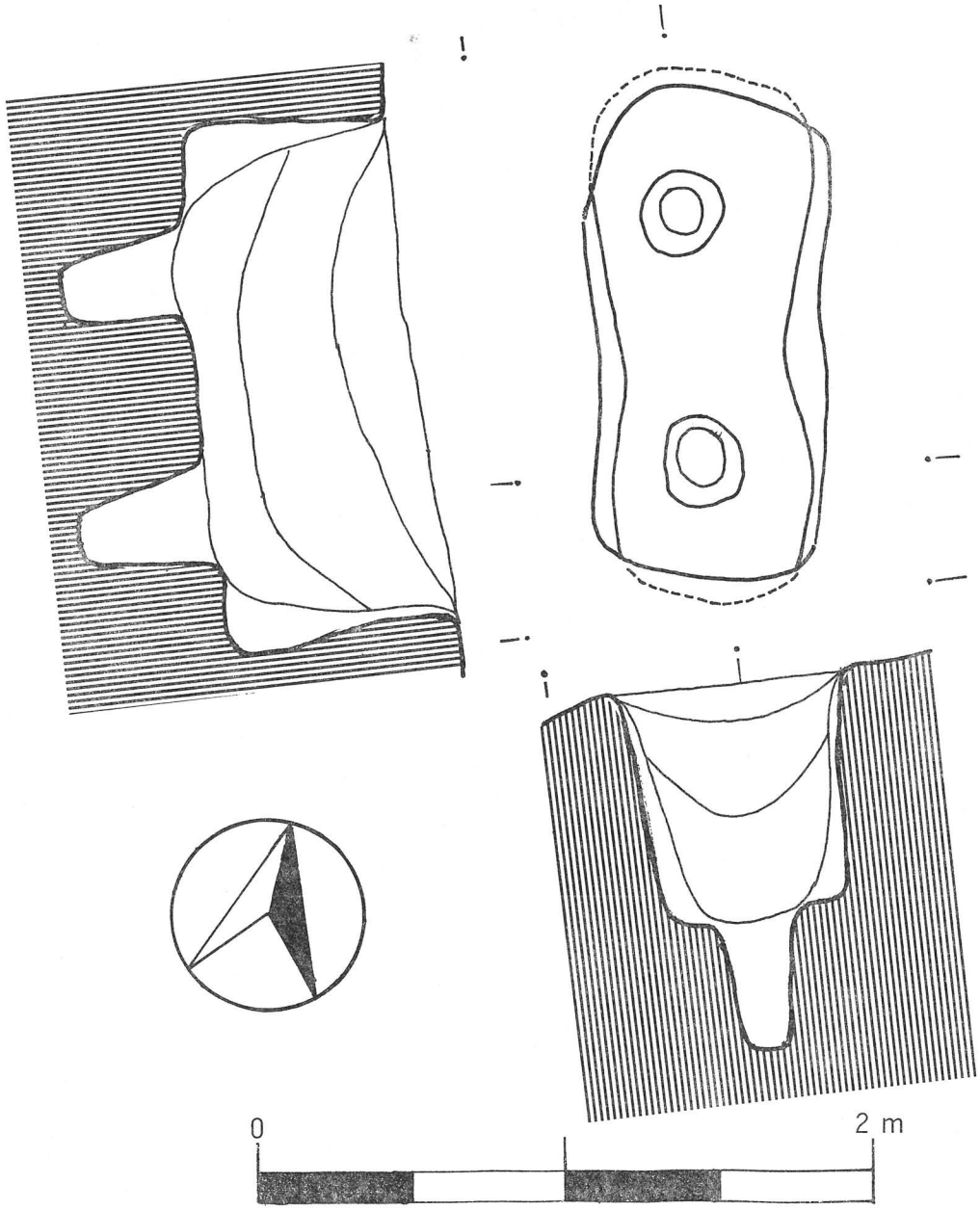
不整楕円形のプランで長軸145cm，短軸115cm，深さ30cmの割合大形の土壙である。東西の壁はほぼ垂直に近く，南北の壁はなだらかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で東壁に径30cm，深さ10cmのピットを有する。



第11図　A地点土壙分布図



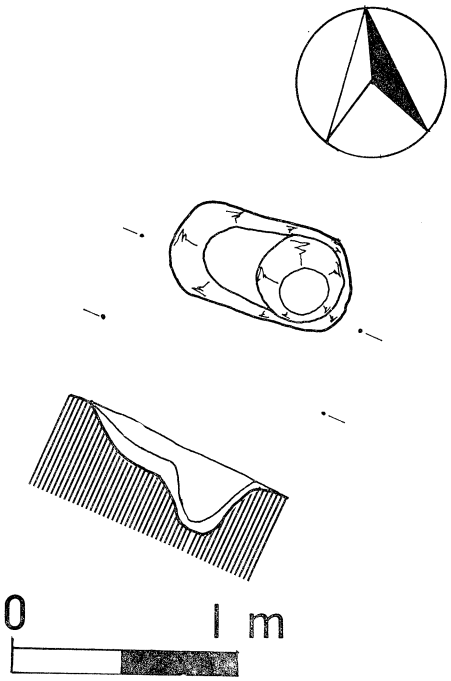
第12図　A地点第1号土壙



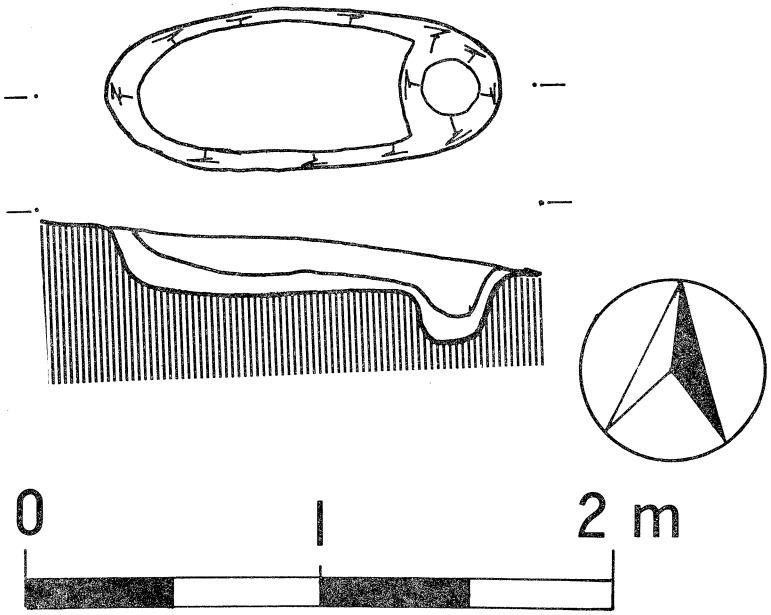
第13図　A地点第２号土壙

第６号土壙（第17図）

ほぼ楕円形のプランで長軸150cm，短軸90cm，深さ30cmの土壙である。南側の壁では本土壙が７号土壙を切っており，北側の壁はゆるやかな傾斜をもって立ち上がり，底面はほぼ平坦である。



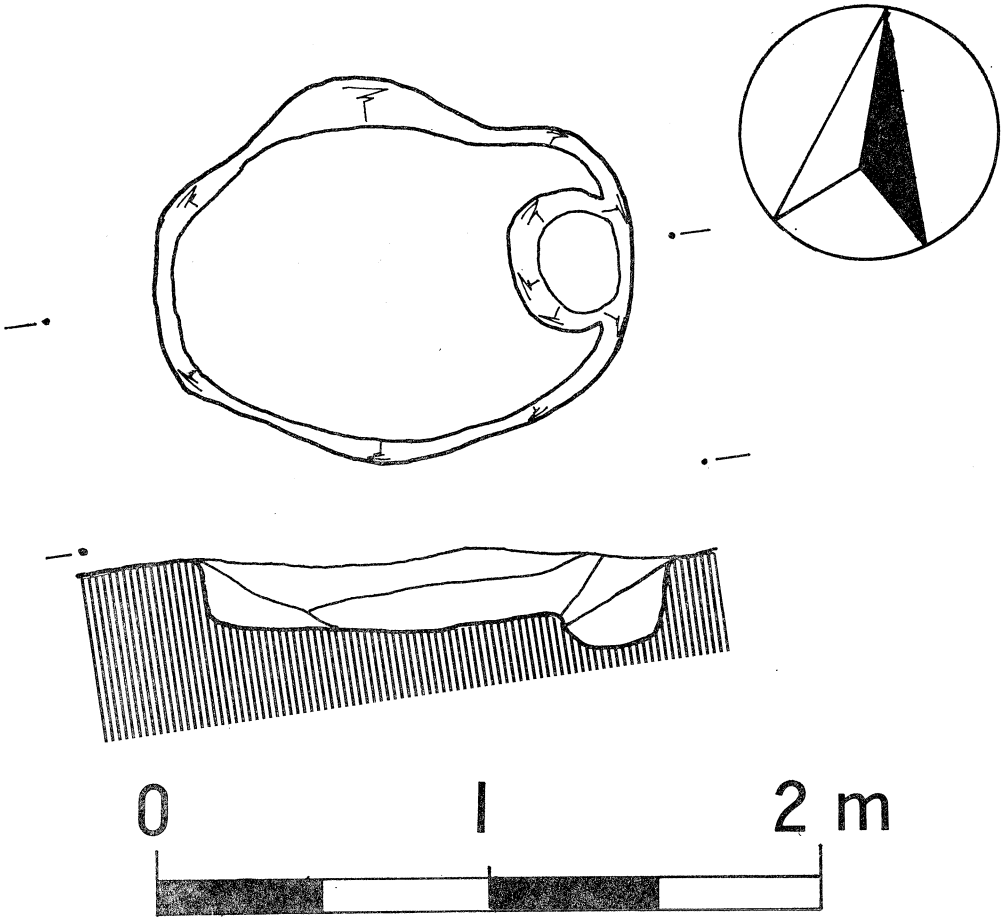
第14図　A地点第３号土壙



第15図　A地点第４号土壙

第７号土壙（第17図）

不整楕円形のプランで長軸105cm，短軸60cm，深さ25cmの土壙である。南側の壁は８号，９



第16図　A地点第5号土壙

号土壙と接しており，北側の壁は，6号土壙によって切られている。底面は平坦で東壁に径20cm，深さ10cmのピットを有する。

第8号土壙（第17図）

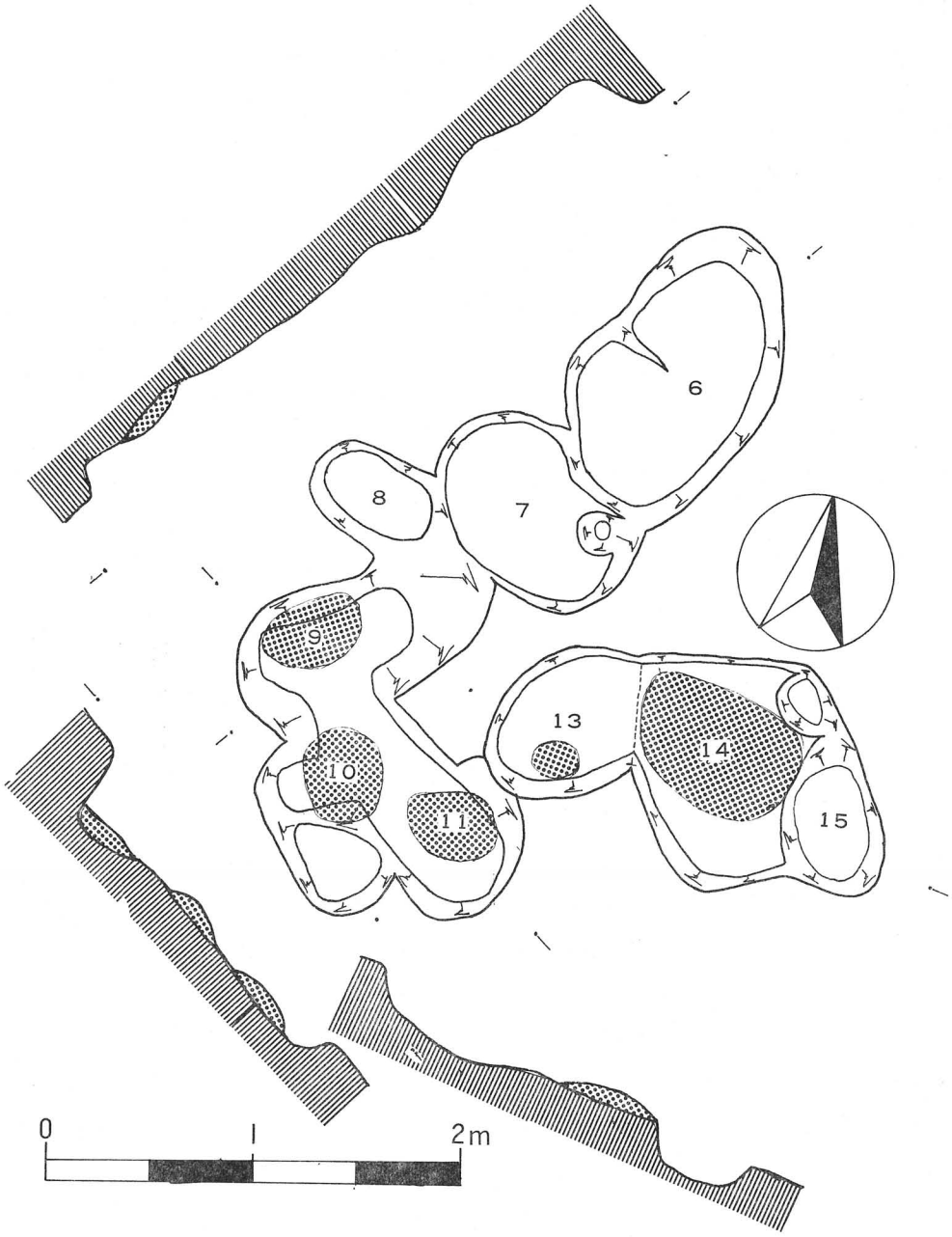
ほぼ楕円形のプランで長軸70cm，短軸40cm，深さ35cmの小形な土壙である。壁は北側で垂直に近く立ち上がり，南西側ではなだらかに立ち上がる。東側の壁で7号，9号土壙と接する。

第9号土壙（第17図）

不整楕円形のプランで長軸120cm，短軸75cm，深さ30cmの土壙である。北東側の壁で8号土壙と接し，南側で11号土壙と接している。北西側の壁はなだらかに立ち上がり，底面は平坦で北側に厚さ10cm程の焼土が堆積していた。なお覆土中より，縄文早期後半の条痕文系土器片が発見された。

第10号土壙（第17図）

楕円形のプランが推測でき，長軸90cm，短軸，測れず，深さ20cmの土壙である。西側と南側の壁は急傾斜しており，東側で11号土壙に切られている。底面はほぼ平坦である。



第17図　A地点第6～15号土壙

第11号土壙（第17図）

楕円形のプランが推測でき，長軸，測れず，短軸70cm，深さ25cmの土壙である。東側の壁はなだらかに立ち上がり，13号土壙により一部分破壊されている。南側の壁は垂直に近く立ち上がり，西側と北側の壁で，9号，10号土壙と切り合っており明らかでない。

なお本土壙の中央部に焼土が見られた。

第13号土壙（第17図）

ほぼ楕円形のプランで長軸106cm，短軸65cm，深さ25cmの土壙である。壁は全体になだらかに立ち上がり，底面が平坦で南側に焼土が堆積している。なお東側で14号土壙と接し，南側で11号土壙を切っている。

第14号土壙（第17図）

不整楕円形のプランで長軸110cm，短軸75cm，深さ25cmの土壙である。壁は北側でほぼ垂直に，南側でなだらかに立ち上がっている。東側で15号土壙に切られ，西側で13号土壙に接する。底面は平坦で径25cm，深さ10cm程のピットを持ち，中央部のほぼ全面に焼土が堆積している。

第15号土壙（第17図）

ほぼ楕円形のプランで長軸75cm，短軸50cm，深さ30cmの小形土壙である。壁は全体になだらかに立ち上がり，底面は平坦である。なお西側で14号土壙を切っている。

第12号土壙（第２号小竪穴住居址）（第18図）

不整方形のプランで長軸５m，短軸２m30cm，深さ25cmの遺構である。壁の立ち上がりは全体にほぼ垂直であり，西側が良くしまってきまっているのに対して，東側はやや軟弱である。床面はほぼ平坦であり，南東側の壁面に少量の焼土が見られた。壁に沿って，深さ15cm程の小ピットが５個確認された。出土遺物としては，西側の壁付近に流入したと思われる大石（30×40cm）の下の床面直上に敲石（第44図—56）と凹石（第44図—55）がセットで発見された。また中央部床面直上より，粕畠式？（第39図—39）の口縁部，大形土器片が発見され，本遺構の時代決定に重要な資料となるものと思われる。なお覆土中にも未完成の石器や，黒曜石・水晶・チャート等の破片が多量に確認された。

まとめ

Ａ地点の土壙群及び住居址は，その形態や性格から５種類に大別されるものと思われる。

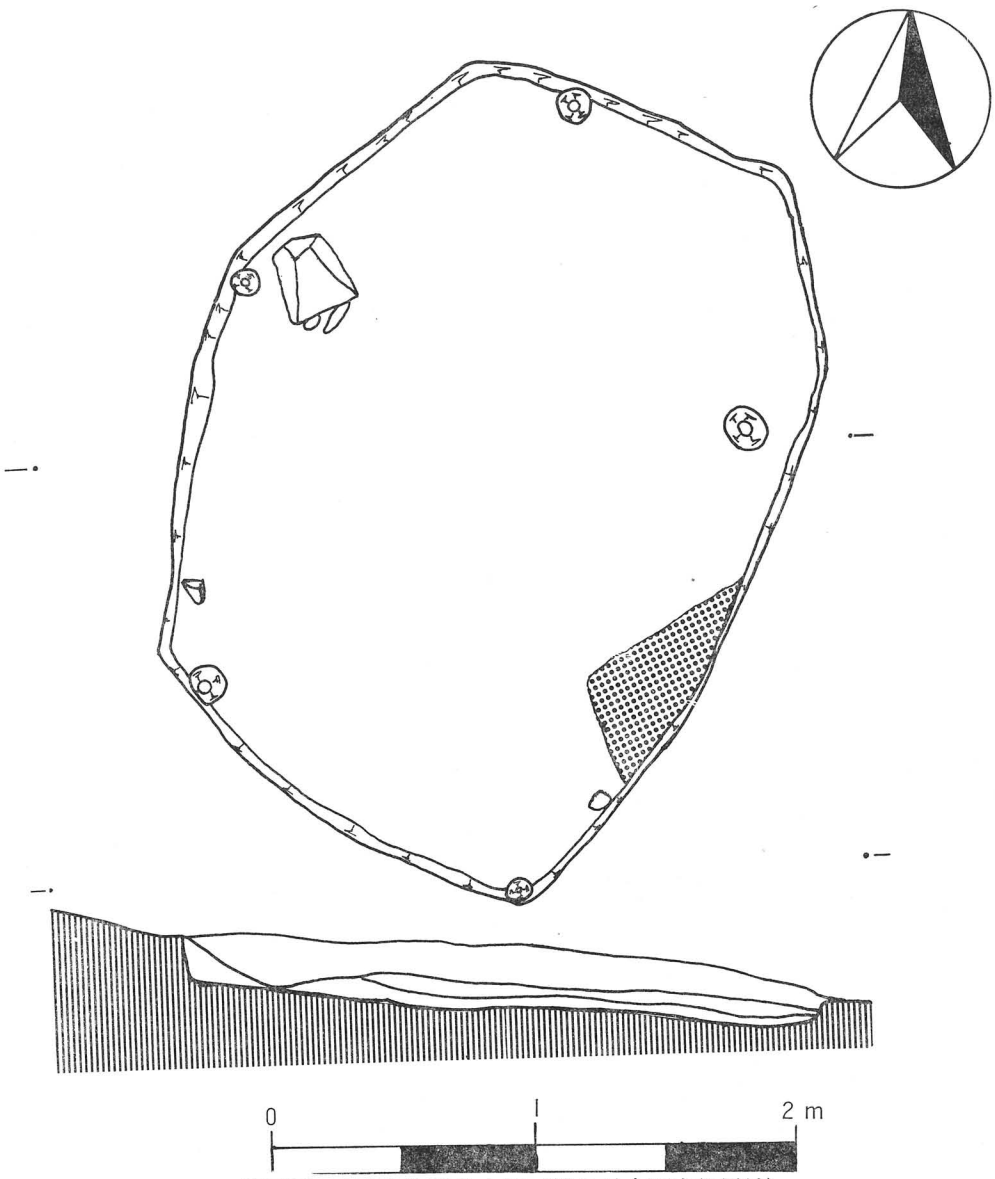
第１類は第１号土壙１基で，集石と焼土を持ちその集石が焼けていることから，明らかに炉穴（ファイヤーピット）である。しかしＢ地点に見られた炉穴（第５号土壙）とは，プランが著しく異なり時期や文化の異質なものと思われる(第19図)。

第２類は第２号土壙１基で，その形態が他の土壙とまったく異なっており，深くオーバーハングして掘り込んでいる。低部には50cmも深く掘り込んだピットを２個有し，周囲に配石が見られることから，墓穴としての性格が強いと思われる。またその異状な深さと，２個のピットから落穴説も充分考えられる。この土壙は技術的に見て他の土壙とは時期的に異なるように思うが，今回の調査では，それを実証することができなかった。

第３類は第３・４・５号土壙の３基で，楕円形のプランを持ち，東側に１個のピットを有する土壙である。その形態はまったく類似しており同時代，同一用途に作られたものと思われる。

第４類は第６～15号土壙(第12号土壙を除く)の９基で，これ等は相互に切り合っており重複土壙である。これは縄文早期における移住生活や，掘り具の未発達を物語る重要な遺構である。第４類の土壙はその性格から次の二つにわけられる。

(1) 焼土を伴うもの（第９・11・13号土壙）



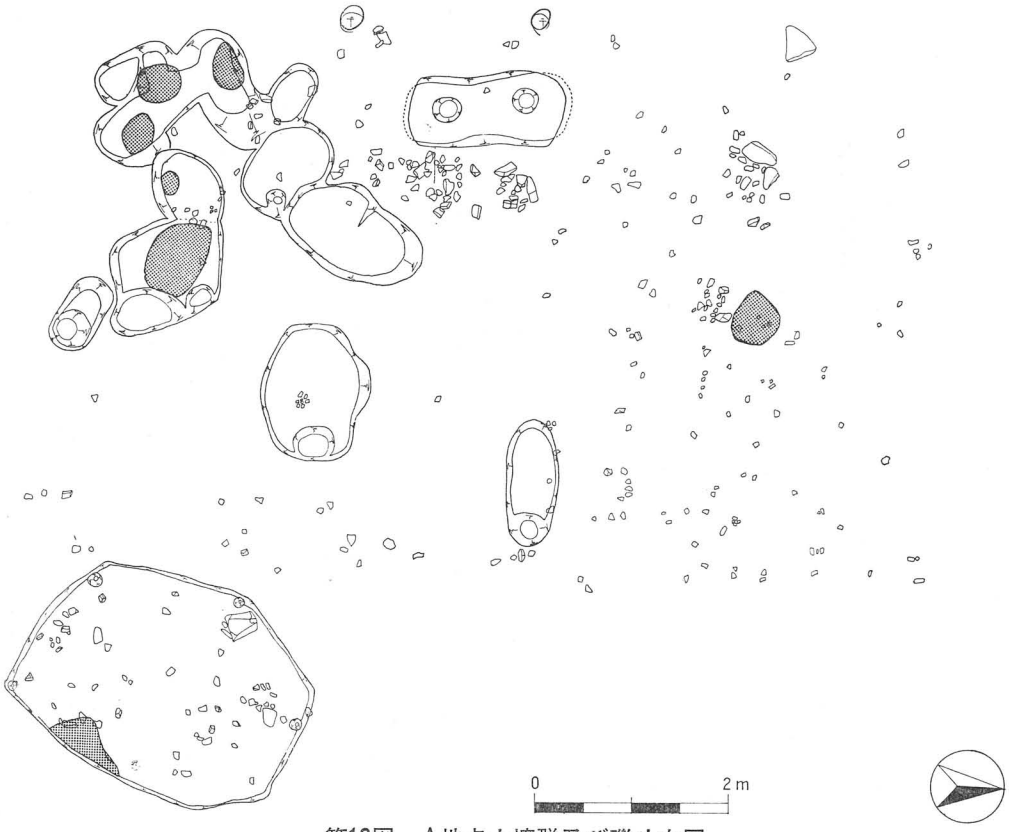
第18図　A地点第12号土壙（第２号小竪穴住居址）

この土壙ははっきりした集石は見られないが，やはり炉穴(ファイヤーピット)と思われる。周囲からかなり多くの焼石が散乱して見られることから，表土がきわめて薄いため攪乱により，集石がこわされたものか，またたび重なる重複により，こわされたものかのいずれかが考えられる。

(2)　焼土を伴わないもの（第６・７・８・10・15号土壙）

この中にはピットを１個持つもの（第７号土壙）が１基だけ含まれているが，たび重なる重複でその形態は明確でない。これ等の土壙はおそらく第３類に近い性格をもつものと推測される。

第５類は第12号土壙１基である。これは土壙と呼ぶより，小竪穴住居址と見るべきであろう。すなわち縄文早期に見られる住居址である。この小竪穴はその出土遺物から見ると，縄文早期後



第19図　A地点土壙群及び礫分布図

半の子母口式土器の時期に，比定されるものと思われるが，東海系の要素を持つ点，とくに興味深いものがある。今後の類似遺構の究明に参考となるものと思われる。

（佐藤　正）

(4)　土壙群Ⅱ（B地点）

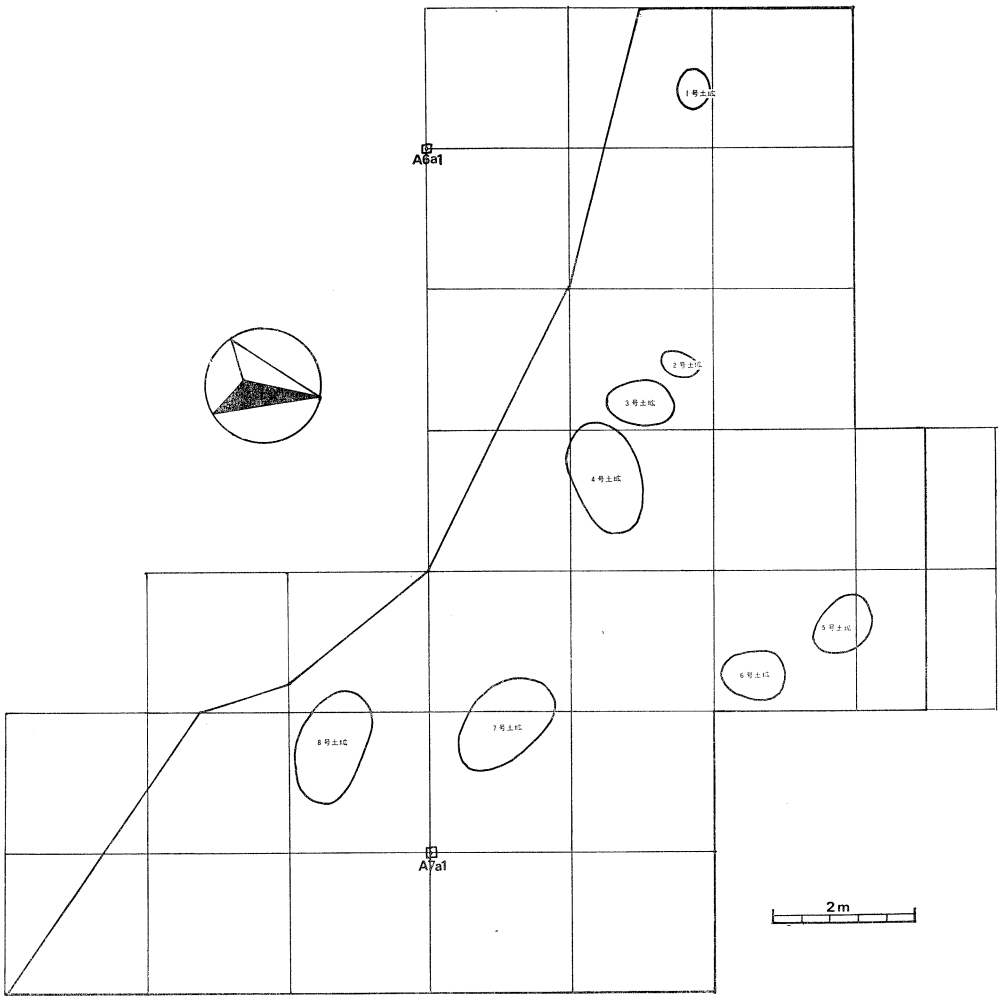
B地点は当遺跡が占地する台地の先端部，A６・A７区である。B地点の調査は予備調査で確認した，A６b２グリットの石組み（第２号土壙）を検出することから始めた。石組みは表土より70cm程あり，他の遺構および遺物の保存状態は良好と考え，石組み(焼土を伴っていた)を中心とした当時の生活跡の把握をめざして調査を進めた。

(1)　礫について

調査が進むにつれて，10～20cm程の礫の存在が気にかかるようになった。礫は表土を剥いだ位置から目立つようになり，第４層（黒褐色土）までまんべんなく認められた。

礫群の面的広がりの把握に努めたが，時間的な制約もあり図面に落して，随時取り上げていった。第21図はソフトローム上面の礫である。第22図は黒褐色土中の礫である。第23図は集石土壙（第５号土壙）とその周囲の礫である。

ここで気にかかるのは第24図の集石土壙とそのかたわらにある集石の存在である。この土壙よ



第20図　B地点土壙分布図

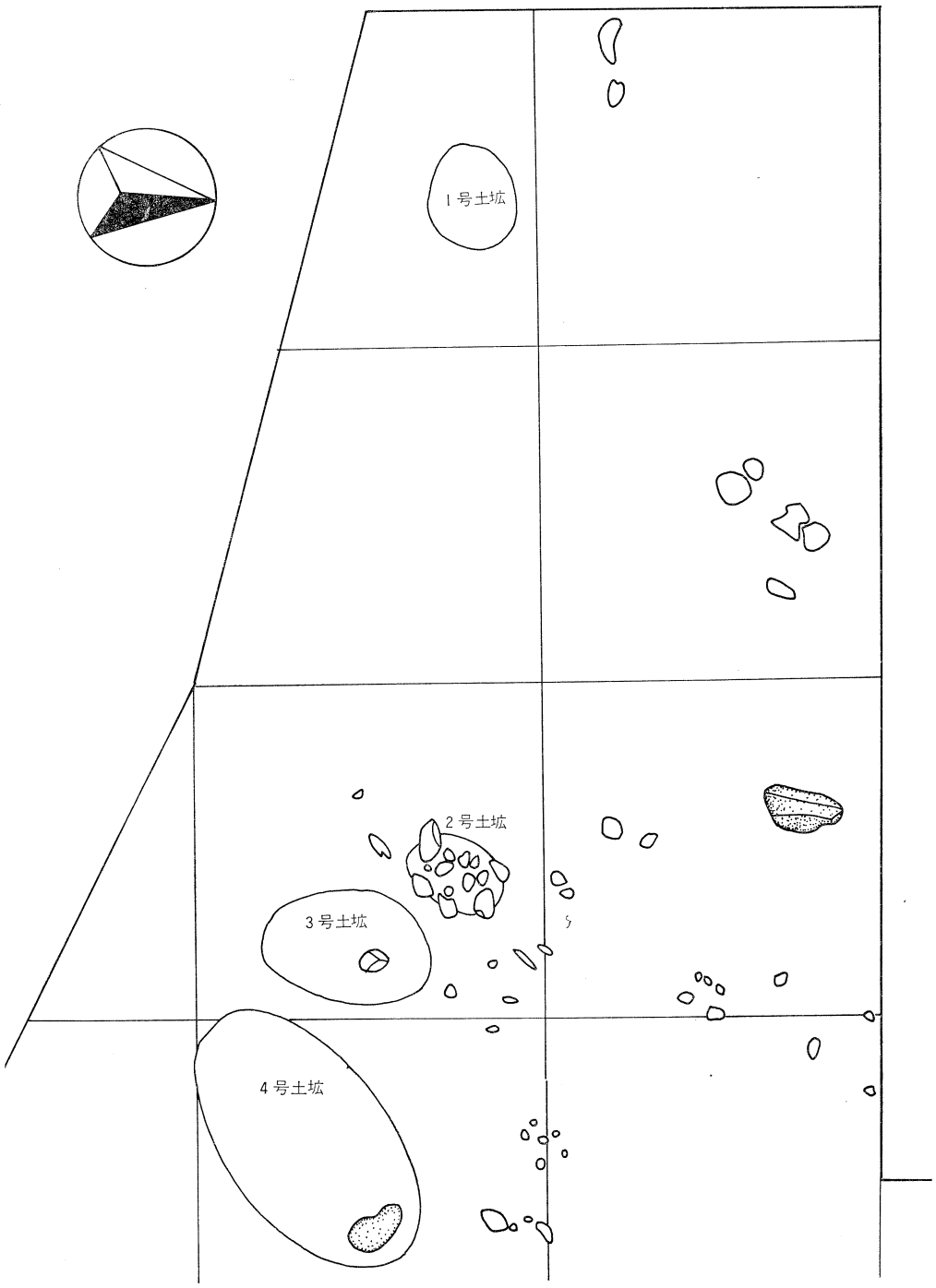
り焼土および焼けている礫が認められた。またその集石中にも顕著に焼けていると思われる礫が認められた。

第22図で示した礫群の広がりについては，予想外に攪乱を受けているために，それ自体ではさほど意味を持たないものと考えている。

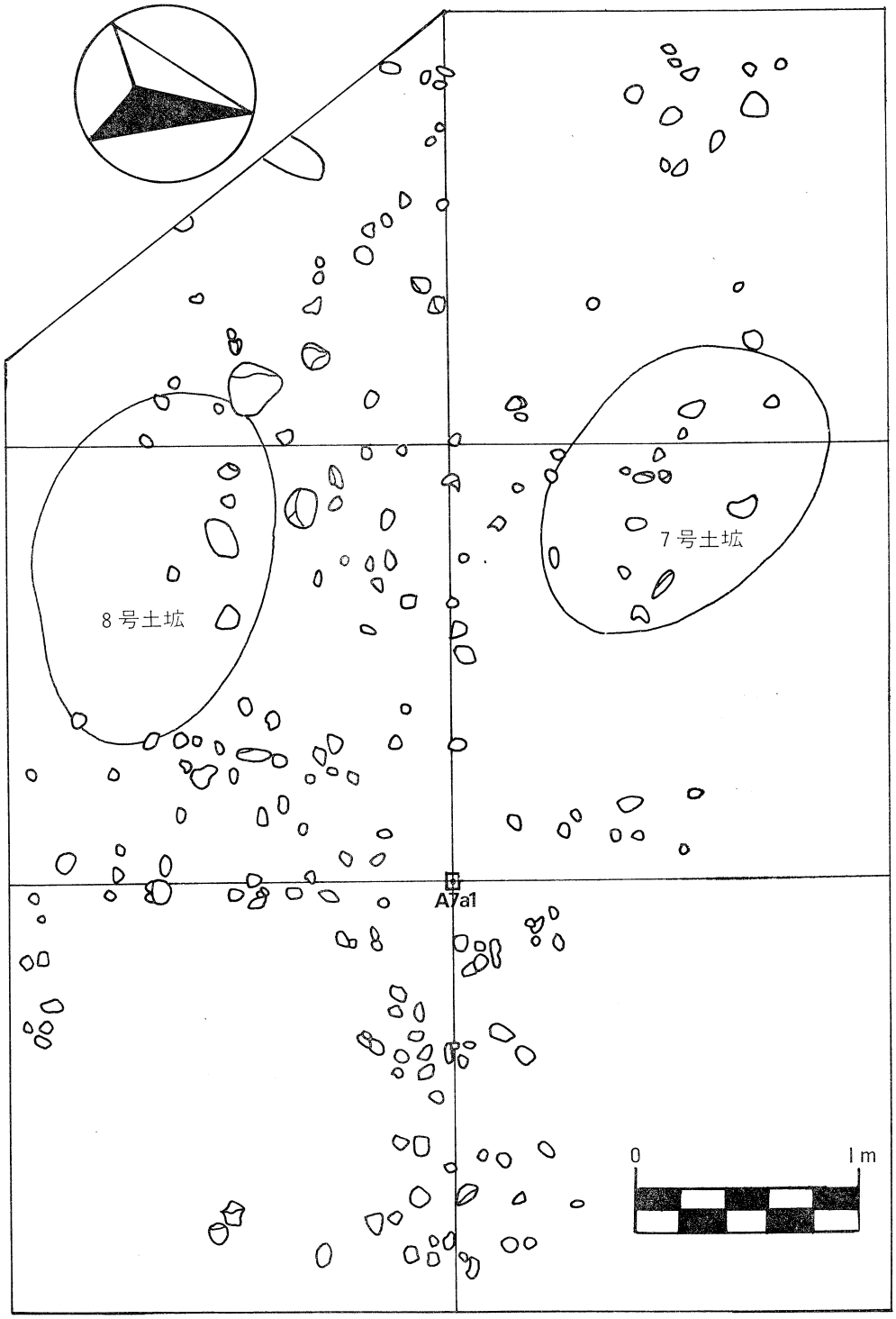
第21図で示したソフトローム上面の礫の存在については，石組（第2号土壙）以外のものが，特に何か意味を持つものか否かは不明である。

(2)　遺物の出土状態について

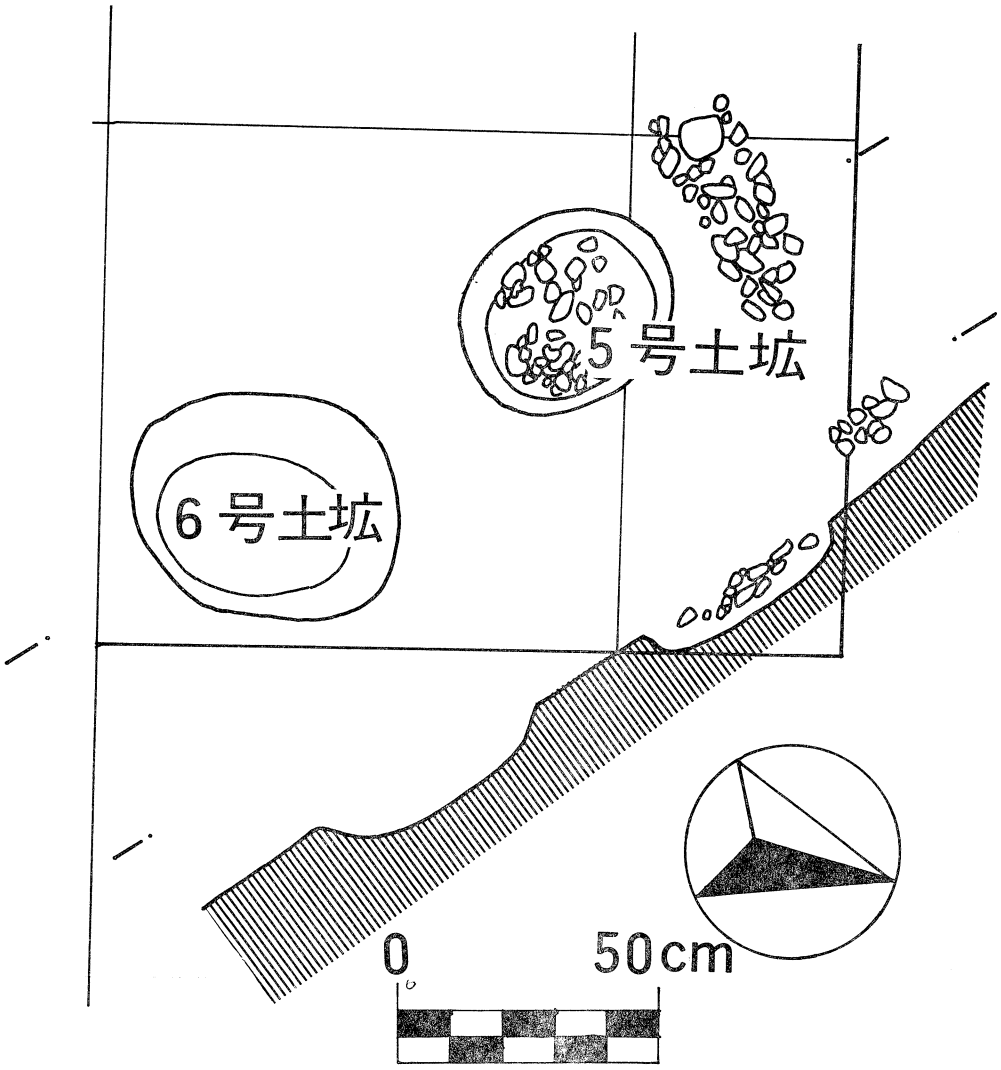
遺物は予備調査の際，第3群・第4群・第5群・第6群土器が認められ，概括的に縄文早期及び前期を予想した。調査の進展につれて，第7群土器片は攪乱層からの出土である。プライマリィーな状態は，第4層（黒褐色土）以下でないと望めないことが判明した。第4層および第5層（ソフトローム）上面からは第1群～第5群の土器が認められた。その中で最も出土量の多かったのは第4群および第5群の土器であった。



第21図　B地点ソフトローム上面の礫分布図



第22図　B地点礫群分布図



第23図　B地点第5号土壙と焼石図

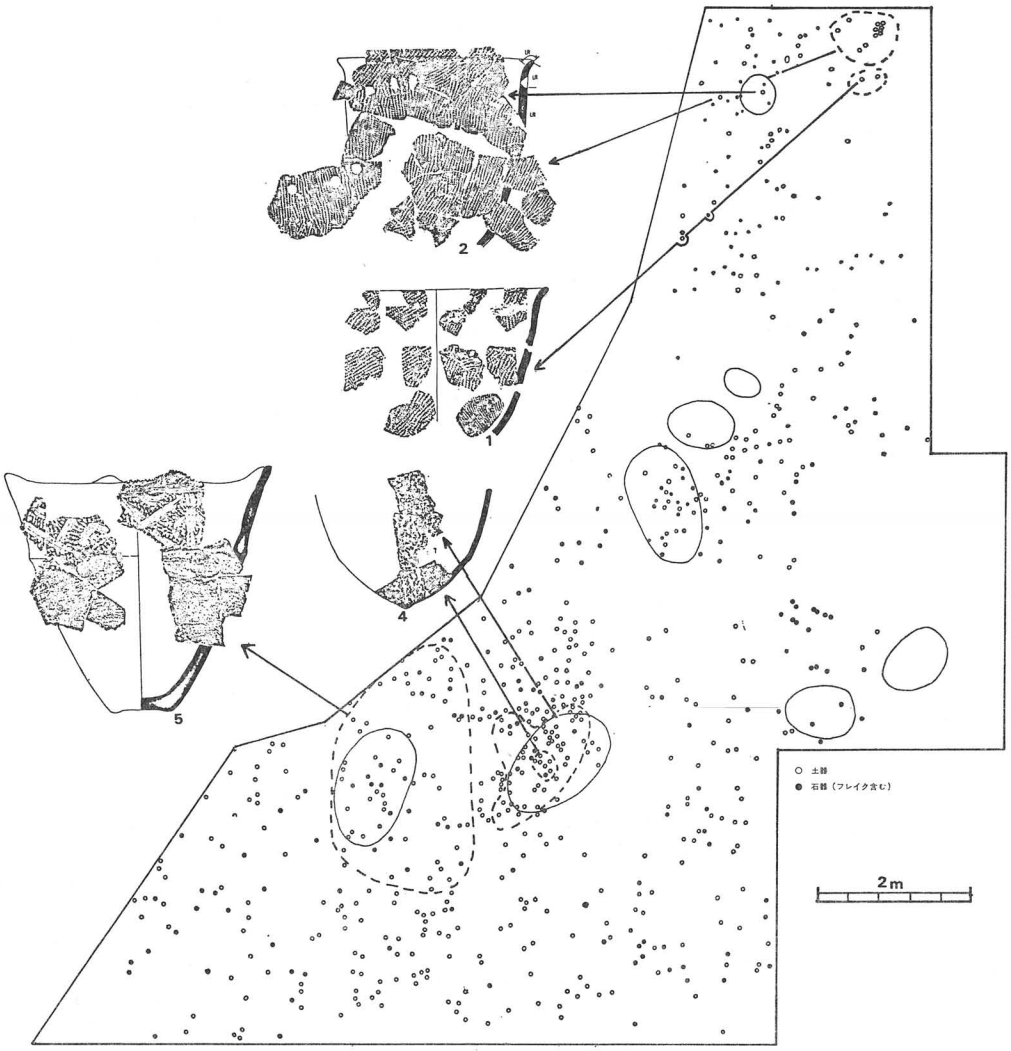
石器は石鏃・スクレイパー・磔器等かなり多く発見された。また黒曜石・チャート等のフレークも多く見られた。

(3)　土壙について

B地点からは人為的と思われる土壙が計8基確認された。これ等に台地の先端に向かって，第1号から第8号の番号を付けることにする（第20図参照）。

第1号土壙（第21図）

不整円形のプランで長軸60cm，短軸50cm，深さ20cmの土壙である。底面はなだらかなカーブを描き壁へと続いている。覆土第1層は赤色スコリアを少量含み，粘性を帯びた黒褐色土。第2層は第1層より黄味が強く，赤色スコリア・炭化粒を少量含む黒褐色土である。遺物は第35図(1)の口縁部が，覆土第1層より発見された。



第24図　B地点遺物分布図

第2号土壙（第21図）

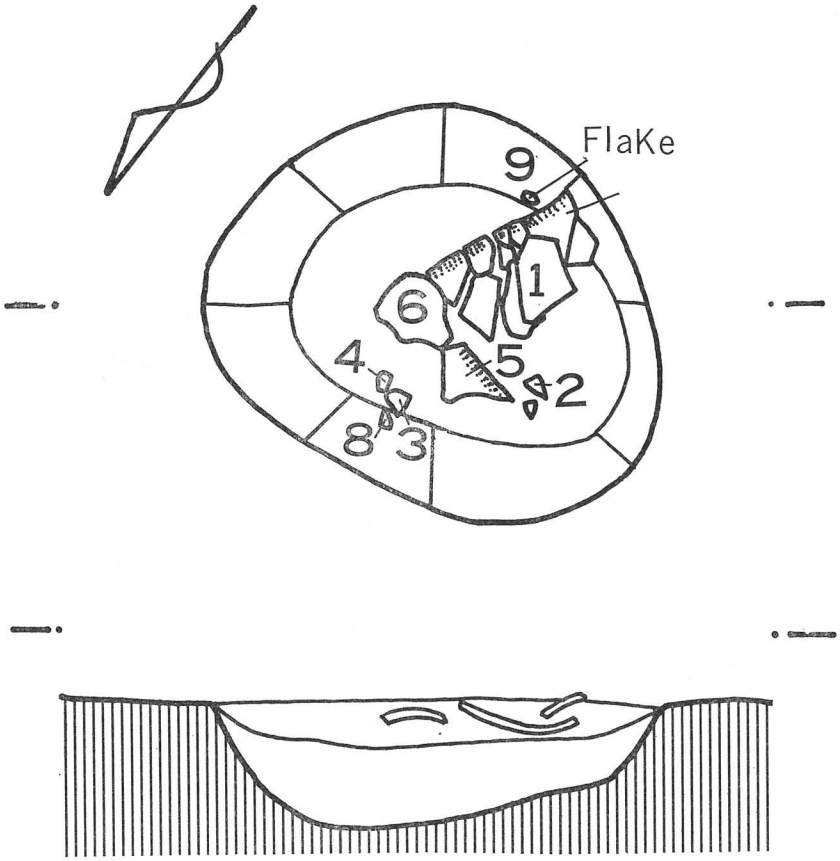
楕円形のプランで長軸55cm，短軸40cm，深さ8cmの小さな土壙である。中には焼土が堆積し，その上に礫が図のように配されていた。しかし礫そのものはさほど焼けているとは思えないものであった。

第3号土壙（第21図）

不整楕円形のプランで長軸105cm，短軸70cm，深さ18cmの土壙である。底面からゆるかやなカーブを描いて立ち上がり壁に続いている。短軸部に深さ38cmの小ピットを有する。覆土はスコリアを多量に含み，粘性のない黒色土であった。遺物は見られなかったが，覆土上面に20cm程の角礫が認められた。

第4号土壙（第21図）

不整楕円形のプランで長軸170cm，短軸120cm，深さ80cmの大きな土壙である。底面からだ



第25図　B地点第１号土壙

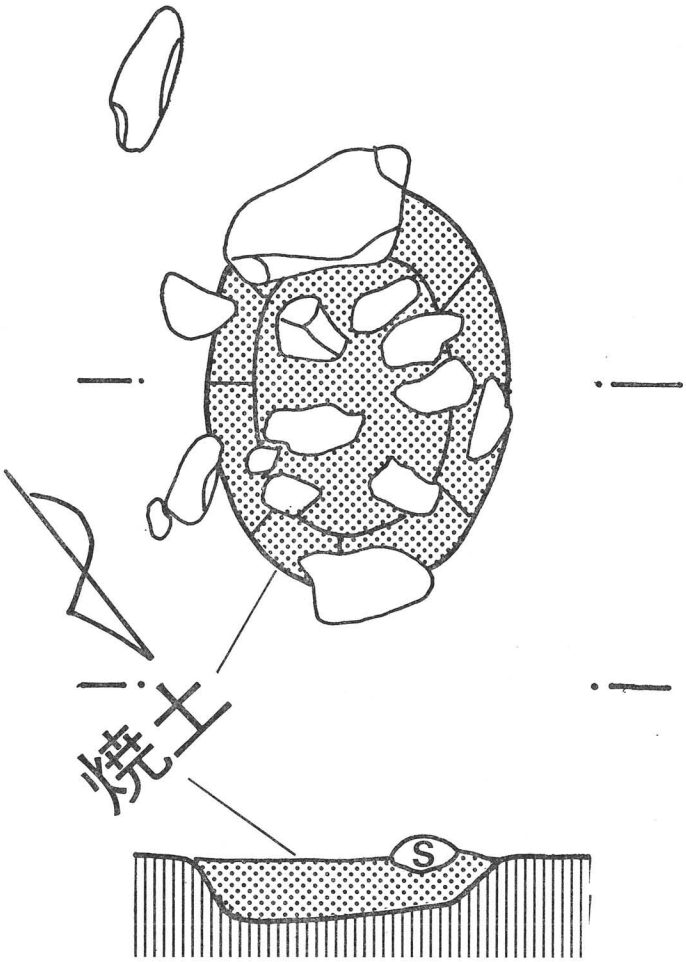
らだらとした立ち上がりで覆土は，スコリアを多量に含み，粘性のない黒色土である。遺物は見られなかったが，覆土上面に40cm×20cm程の礫が認められた。

第５号土壙（第23図）

不整円形のプランで長軸80cm，短軸78cm，深さ15cmの当遺跡では特殊な土壙である。底面はほぼ平坦で，覆土は第１層が焼土を多量に含み，質の緻密な黒褐色土，第２層が焼土を少量含む褐色土である。覆土第１層中に拳大の礫が，かなり認められた。この礫はほとんどが焼けていると思えるものであった。礫以外に遺物は見られなかった。

第６号土壙（第23図）

不整円形のプランで長軸104cm，短軸85cm，深さ24cmで，第５号と同質の土壙である。底面はほぼ平坦であり，壁はなだらかに立ち上がっている。覆土は第１層が赤色スコリアを少量含み，粘性のない黒色土，第２層が赤色スコリアを微量含み，粘性のある黒褐色土で炭化粒を若干含む，第３層が赤色スコリアを少量含み，粘性のある黄褐色土である。遺物は覆土第１層より，時期不明の土器片２個を発見した。また壁に礫２個が密着していた。この礫は二つとも焼けていると思えるものであった。



第26図　B地点第２号土壙

第７号土壙（第22・24図）

不整楕円形のプランで長軸155cm、短軸105cm，深さ50cmの大きな土壙である。底面はほぼ平坦で，壁は一部を除いて垂直に立ち上がっている。覆土の黒褐色土中より，第35図(4)の土器が発見された。

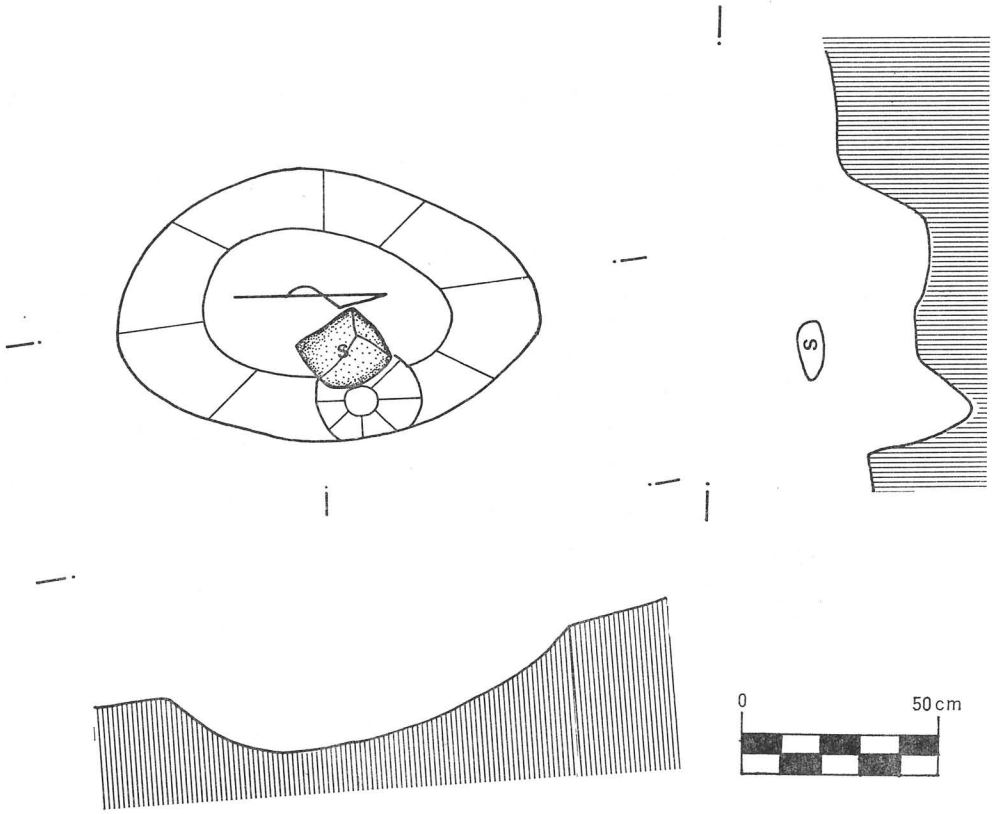
第８号土壙（第22・24図）

不整楕円形のプランで長軸170cm，短軸120cm，深さ30cmの大きな土壙である。底面はほぼ平坦であり，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土の黒褐色土中より，第37図―８の土器片が発見された。

まとめ

B地点の土壙群はその形態や性格から，４種類にわけられる。

第１類は第１号土壙１基で，その性格は埋め甕的要素を持つものと思われ，時期的にも撚糸文系土器に伴う古いものと思われる。



第27図　B地点第３号土壙

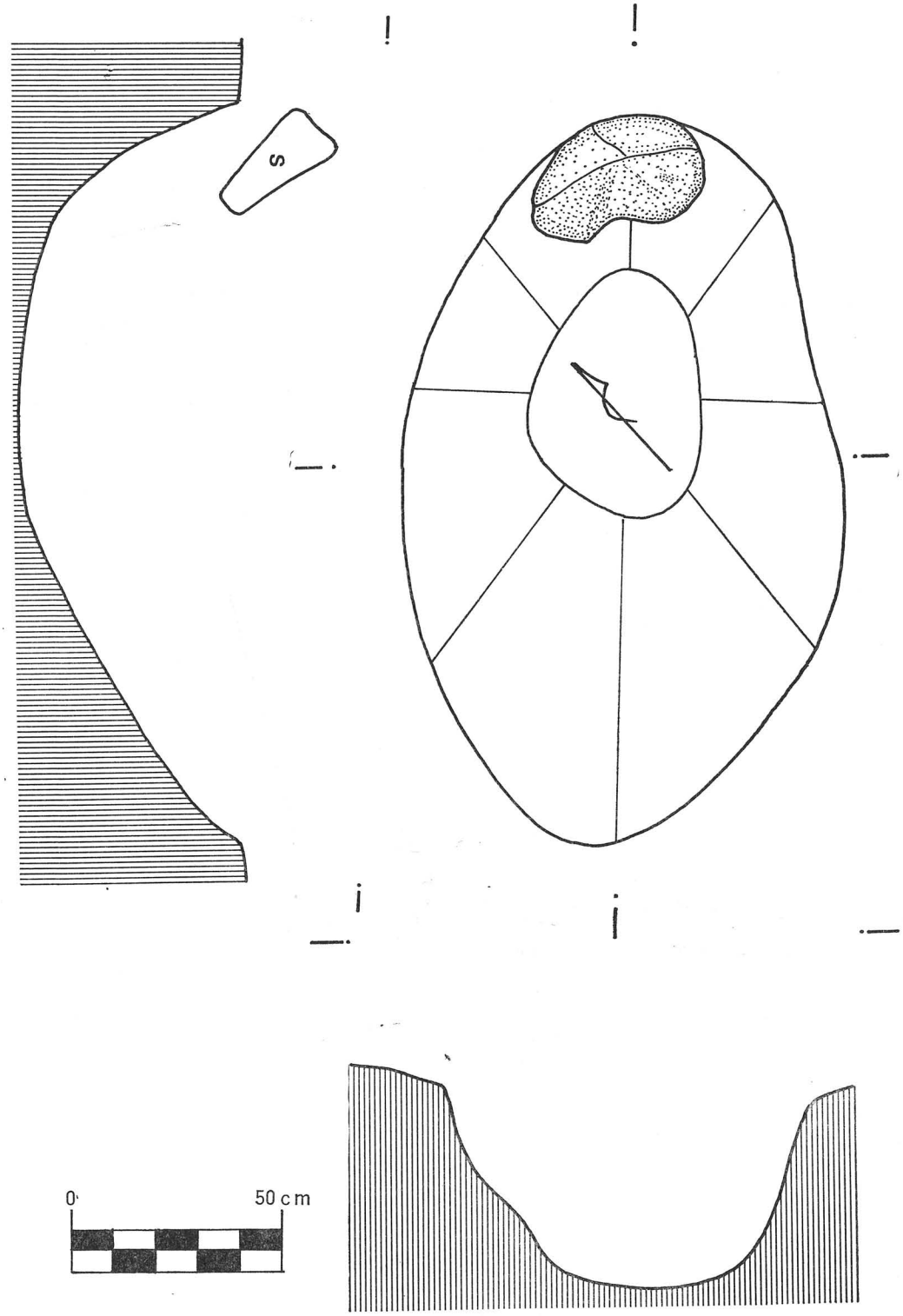
第２類は第２・３号土壙２基で焼土と配石を持つ，小形の第２号土壙とそれに並ぶ第３号土壙とである。

第３類は第４・７・８号土壙３基で，楕円形プランを呈し，その形態において共通性がある。とくに７・８号土壙からは覆土中より，早期後半の尖底土器の底部が発見されており，何らかの関係が考えられ興味深い。

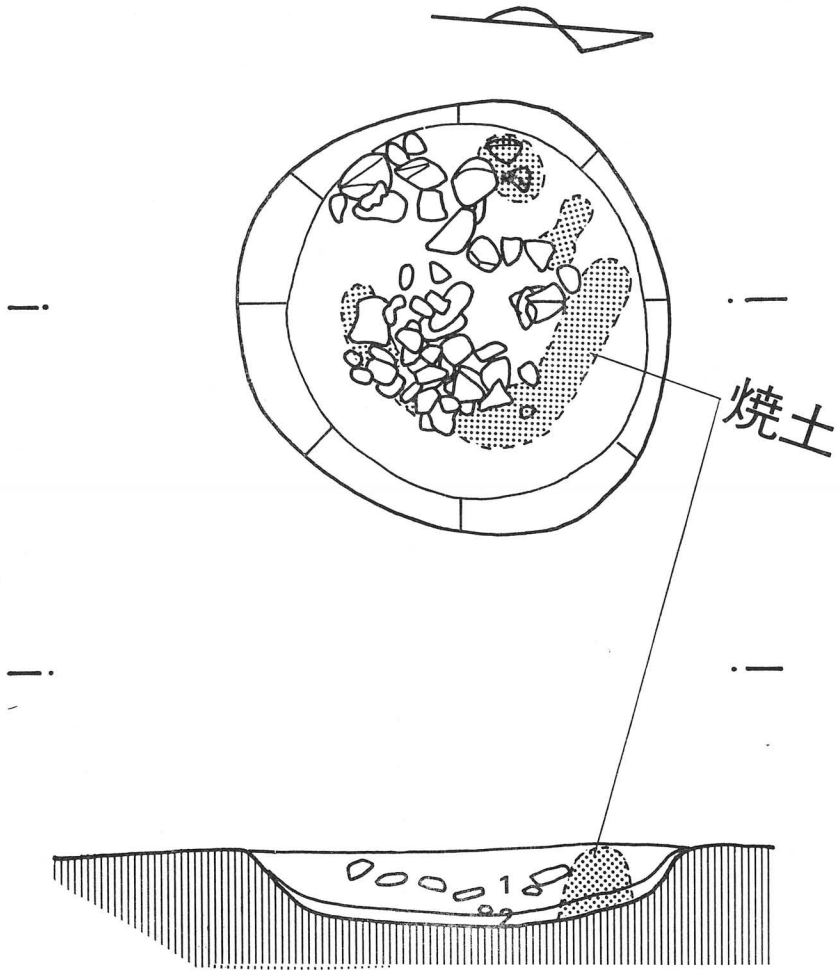
第４類は第５・６号土壙２基で，覆土中に焼土と焼石を含み，そばに焼石の集石が見られる。第５・６号土壙は並ぶようにあり，形態的にも共通している。この２基の土壙が，確認された層位は他の土壙より浅い位置にあることから，時期的にも他の土壙より，新しいものと思われる。

土壙の用途については従来，墳墓説・貯蔵穴説・おとし穴説等あるが，第２類と第３類は明らかに炉穴（ファイヤーピット）として使用されており，今後の研究に興味深いものがある。また第３類の大形土壙は，その形態から見て貯蔵穴に近いと思われる。しかしそれを証明する証拠は確認することができなかった。

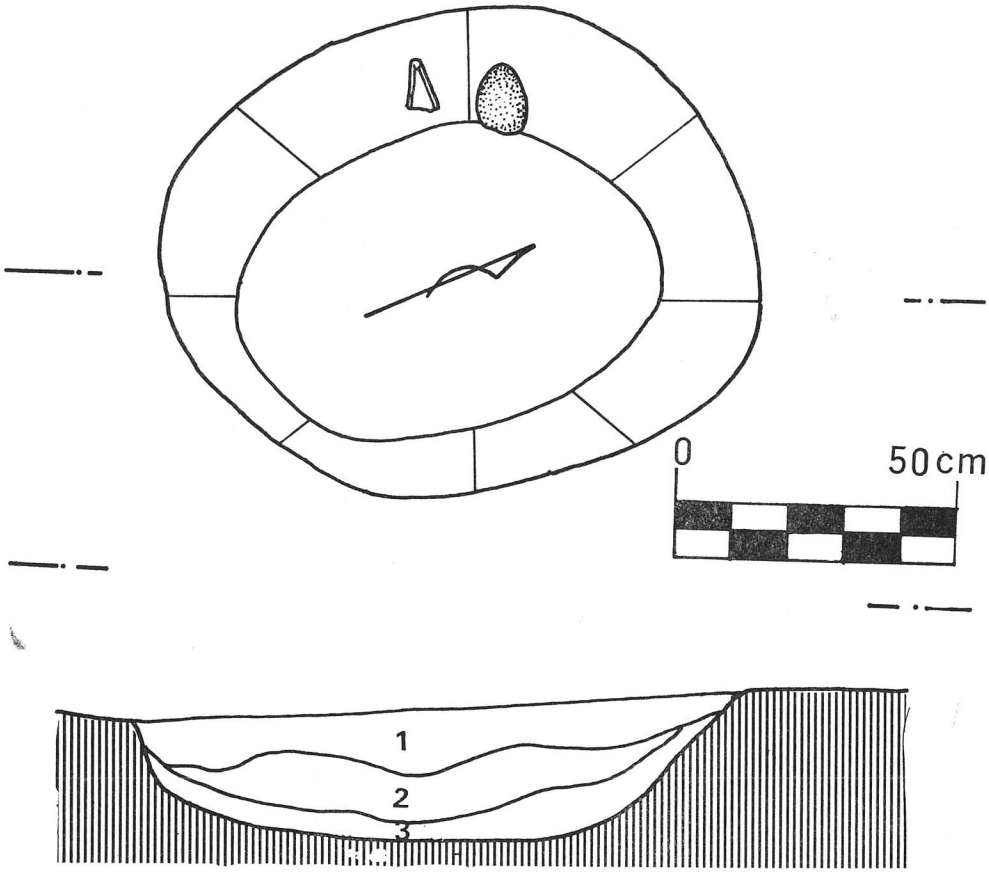
第１類は前に述べた通り，まったく特殊な例で，はたして土壙と呼べるかどうか疑問がある。



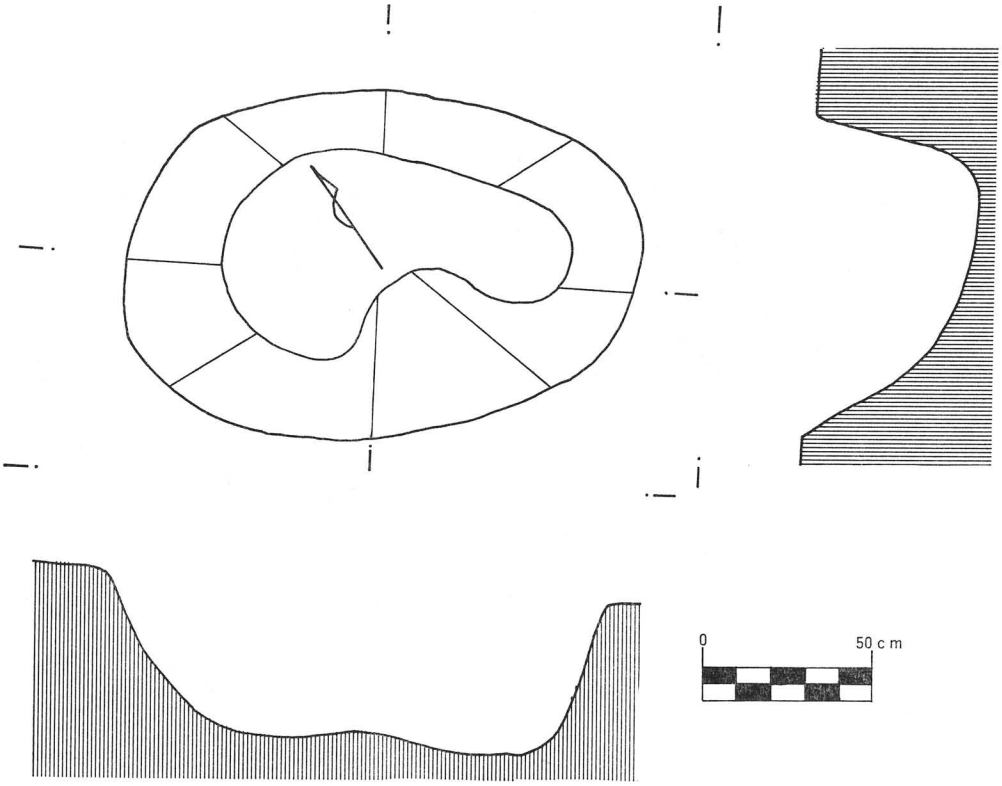
第28図　B地点第4号土壙



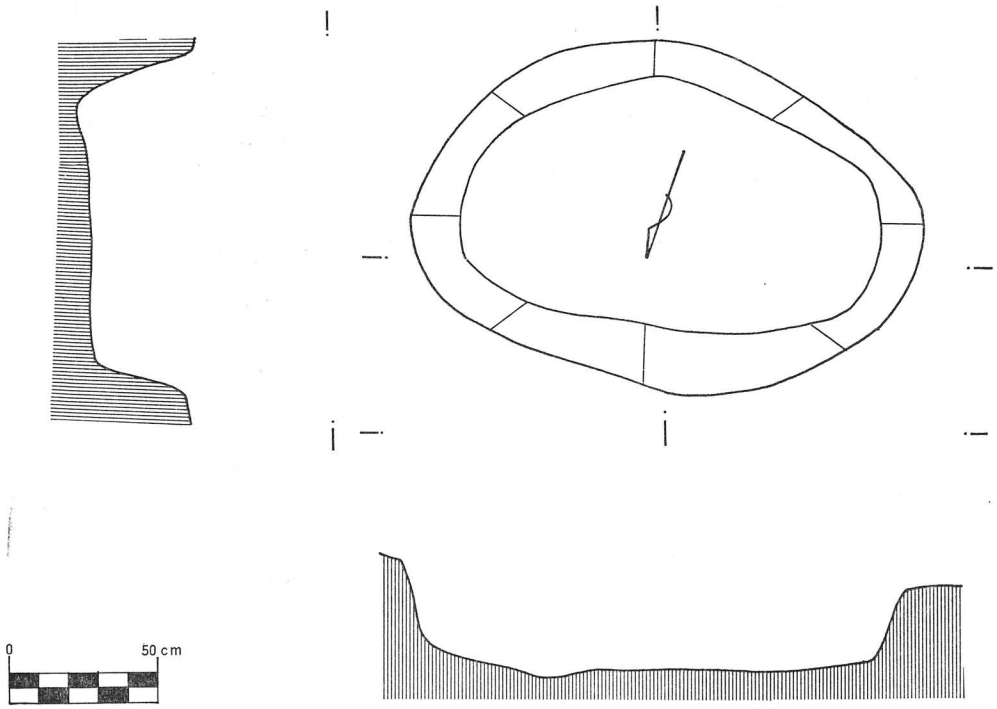
第29図　B地点第５号土壙



第30図　B地点第6号土壙



第31図　B地点第７号土壙



第32図　B地点第８号土壙

第5章　遺　　物

本遺跡で発見された遺物は土師・須恵の時代から縄文早期初頭まで広範囲におよび，その数も多いので，遺構にあわせて，三つに大別した。すなわち，住居址に伴う土師・須恵の遺物と，土壙群に伴った土器と石器である。

(1)　住居址内の出土遺物（第33・34図）

1は土師の甕の口縁部破片である。表面は，胴部にかけて櫛状篦による，縦方向に走る整形をしてあり，裏面は横方向に走る整形がほどこされている。

2は，土師の杯の破片で，ロクロ整形後，篦によって底部を削った痕跡をとどめている。

3は，須恵の甕の底部破片である。表面はタタキ目を残し，裏面にはロクロ整形の痕跡をとどめている。

4は，土師の壺の口縁部破片で，口縁部は外反している。表面に胴部にかけて，櫛状篦による縦方向に走る整形をしており，裏面には口縁部と胴部を区切って，横方向に走る整形が反対方向になされている。

5は，須恵の甕の底部破片で，高台付きである。ロクロ整形，底部糸切り技法使用後，高台を付けたと思われる。裏面には釉がほどこされている。

6は，須恵の甕の胴部破片で，ロクロ整形後，タタキ板でたたかれており，タタキ目が見られる。

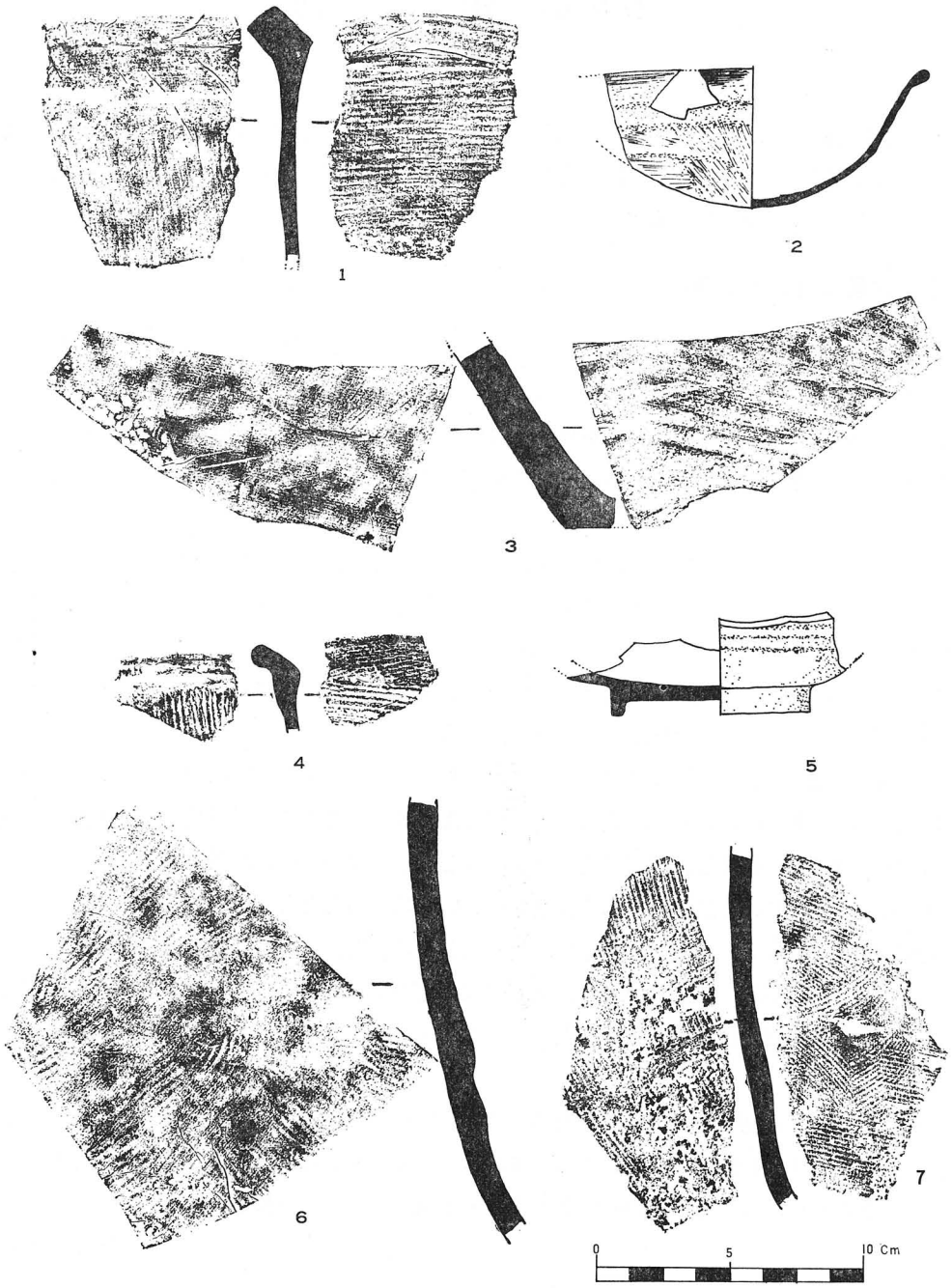
7は，土師の甕の胴部破片で，表面は櫛状篦による縦方向に走る整形が見られ，裏面は左右交互に，櫛状篦による傾斜した方向に走る整形がほどこされている。また表面に，カマドによる煮沸のために，使用された甕とみられる長胴甕らしい火焼のあとをとどめている。

8～12は，第3住より出土の土師片で，ほとんど甕の破胴部片である。表面には櫛状篦により縦方向に走る整形がほどこされており，裏面には，左右交互に傾斜した方向に走る整形がほどこされている。8，12には，煮沸による火焼のあとをとどめている。

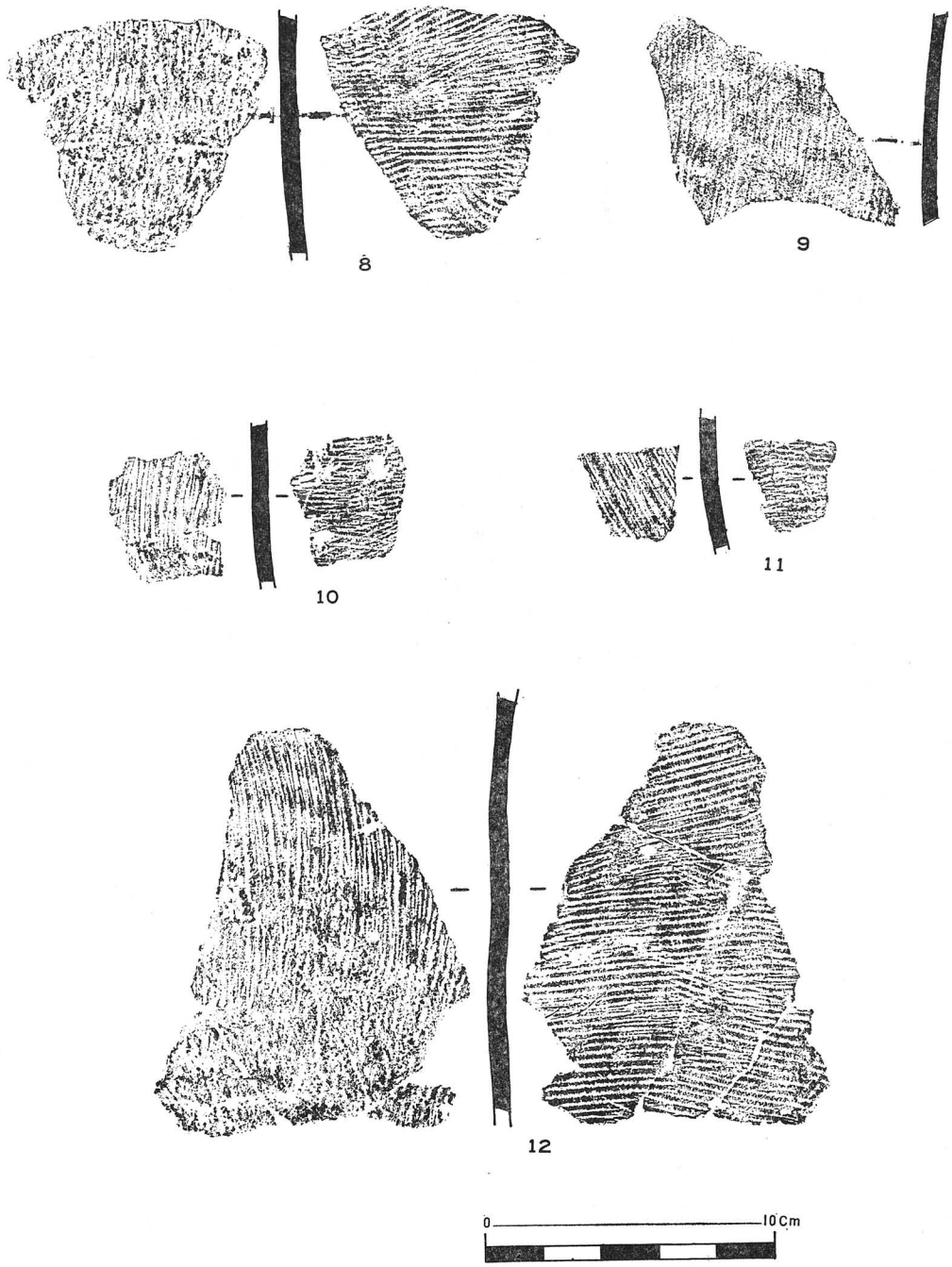
まとめ

とくに高台付，糸切り技法等を使った時代の新しい時期の須恵器が出土したことと，カマドの発生以後に登場する長胴甕が見られること等から，第1住・第3住は，土師編年の国分期に相当するものと思われ，これ等の遺物は同期の土師・須恵であると思われる。

（田中　悟）



第33図　第１号住居址内出土遺物



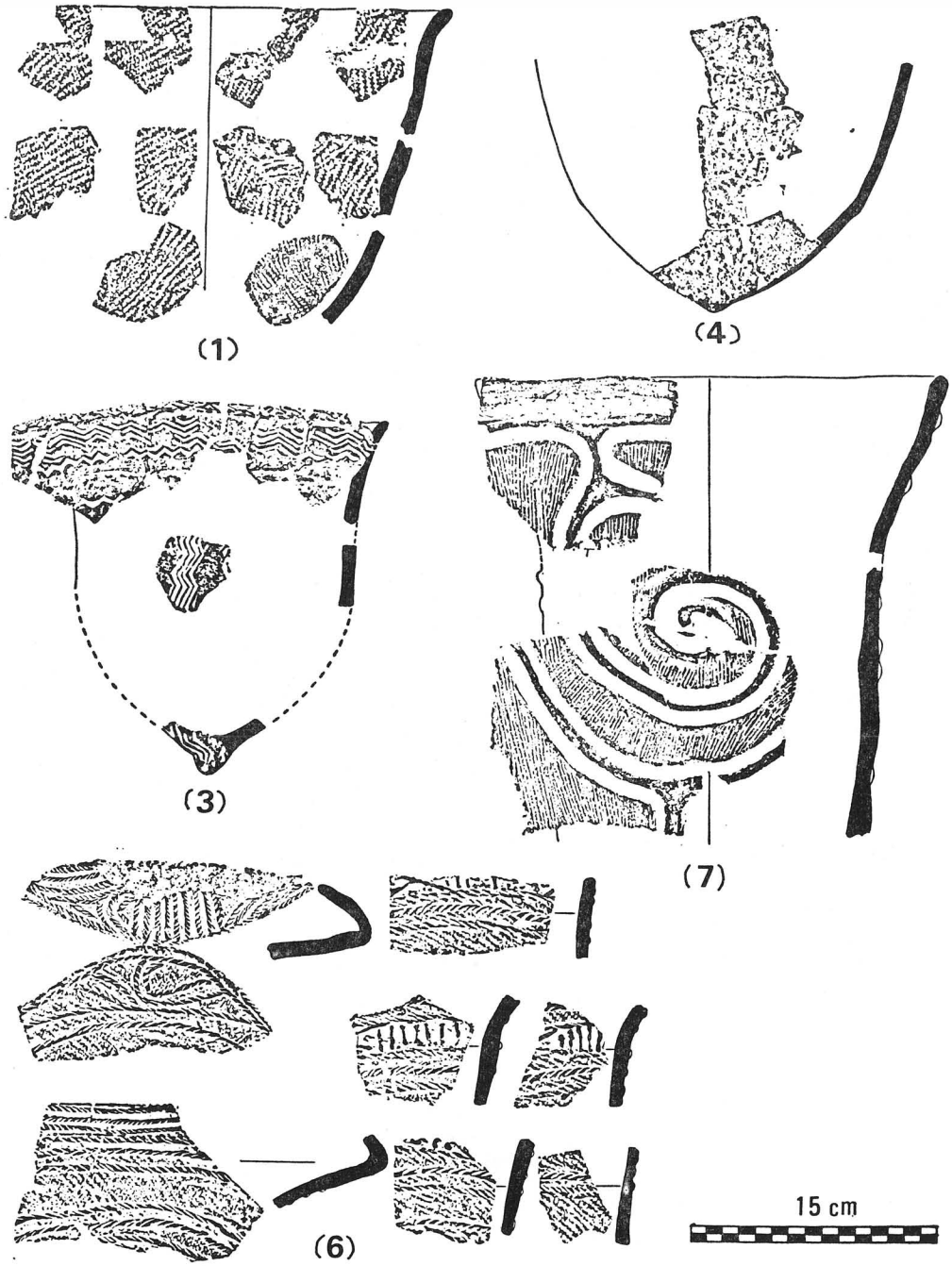
第34図　第３号住居址内出土遺物

住居址内の出土遺物表

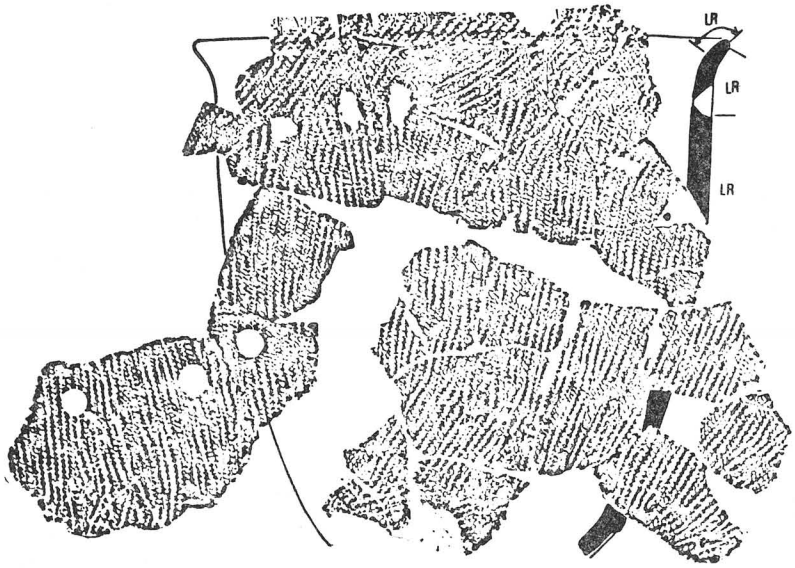
図版番号	出土地点	種　　願	器　形	口　径	部　　分	整形方法	そ　の　他
1	第1住内	土師器片	甕		口縁部	櫛　状　篦	
2	〃	〃	杯	13.2cm	〃	ロ　ク　ロ	
					底　　部	篦　　削	
3	〃	須恵器片	甕		〃	ロクロ整形	
4	〃	土師器片	壺		口縁部	櫛　状　篦	
5	〃	須恵器片	甕		底　　部	ロクロ整形，糸切り技法	高台付き
6	〃	〃	〃		胴　　部	ロクロ整形	
7	〃	土師器片	〃		〃	櫛　状　篦	
8	第3住内	〃	〃		〃	〃	
9	〃	〃	〃		〃	〃	
10	〃	〃	〃		〃	〃	
11	〃	〃	〃		〃	〃	
12	〃	〃	〃		〃	〃	

(2) 土壙群出土遺物

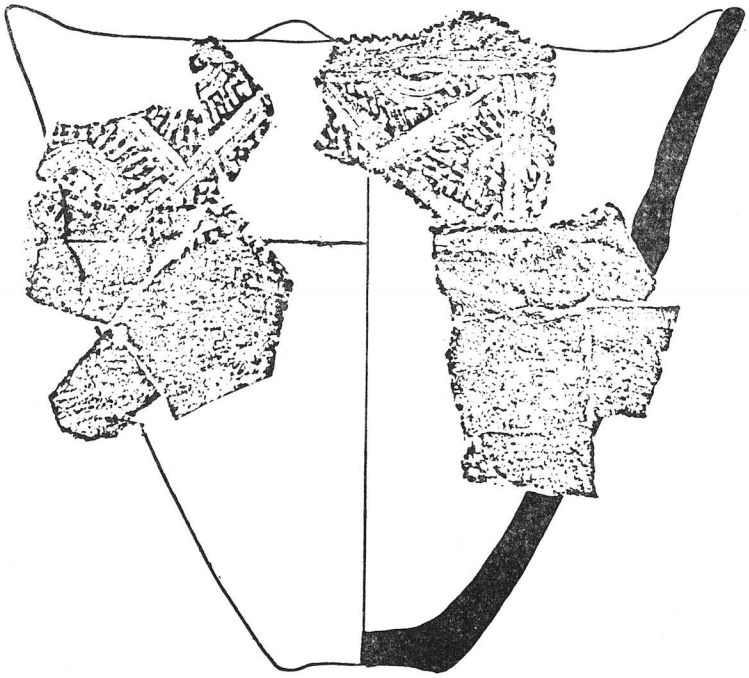
a 土 器



第35図　土壙群出土遺物（図上復元）



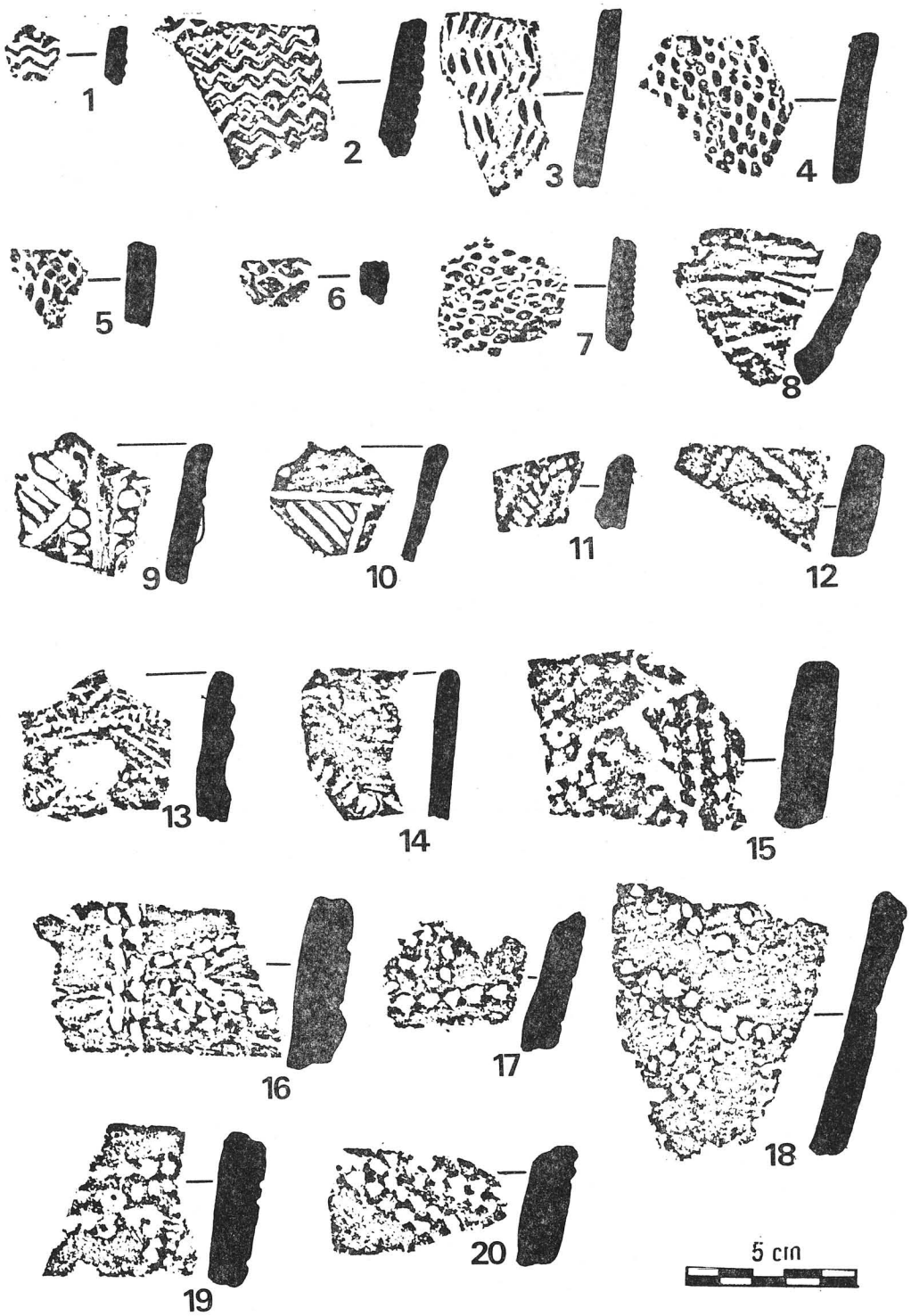
(2)



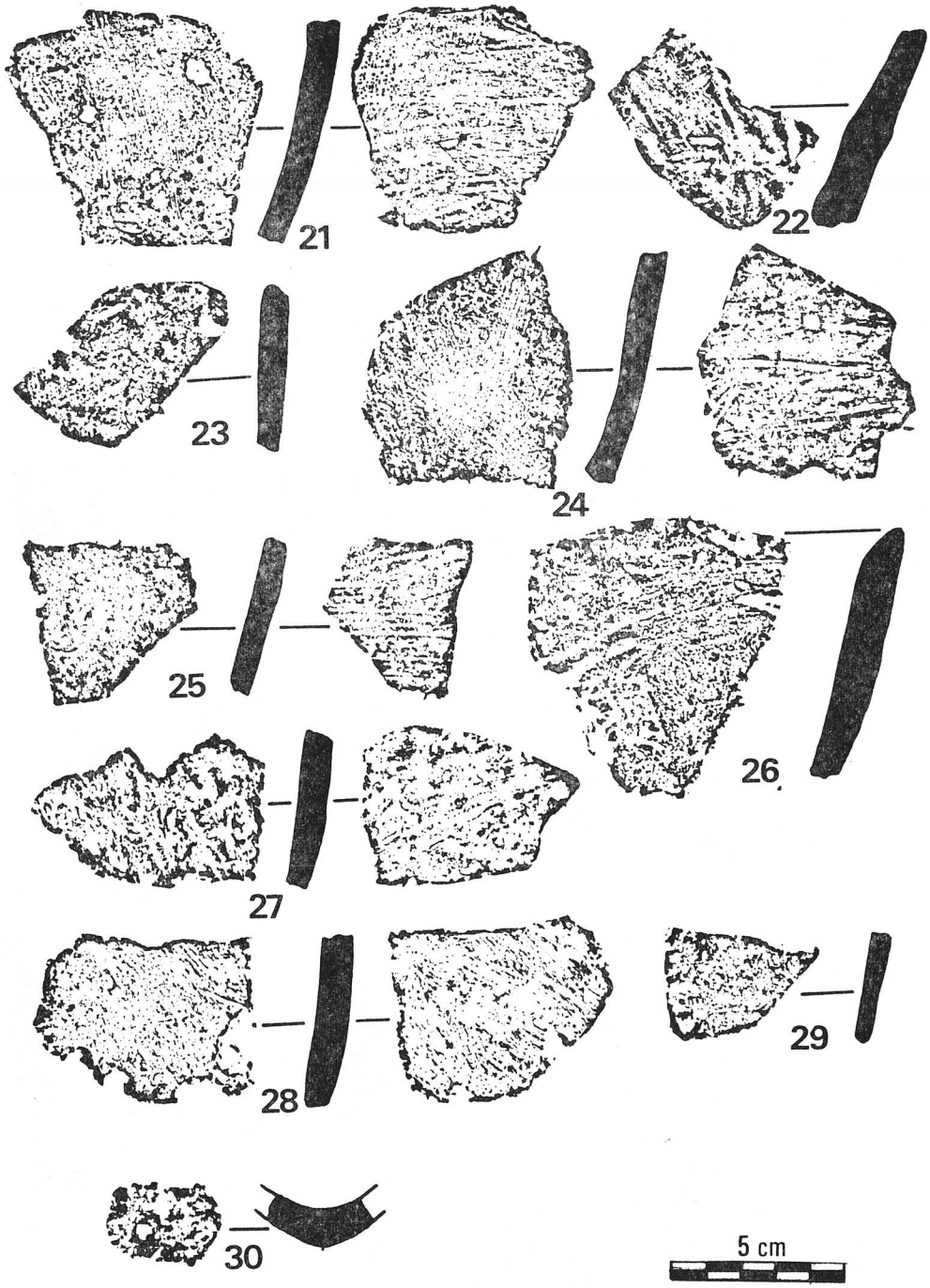
(5)

15 cm

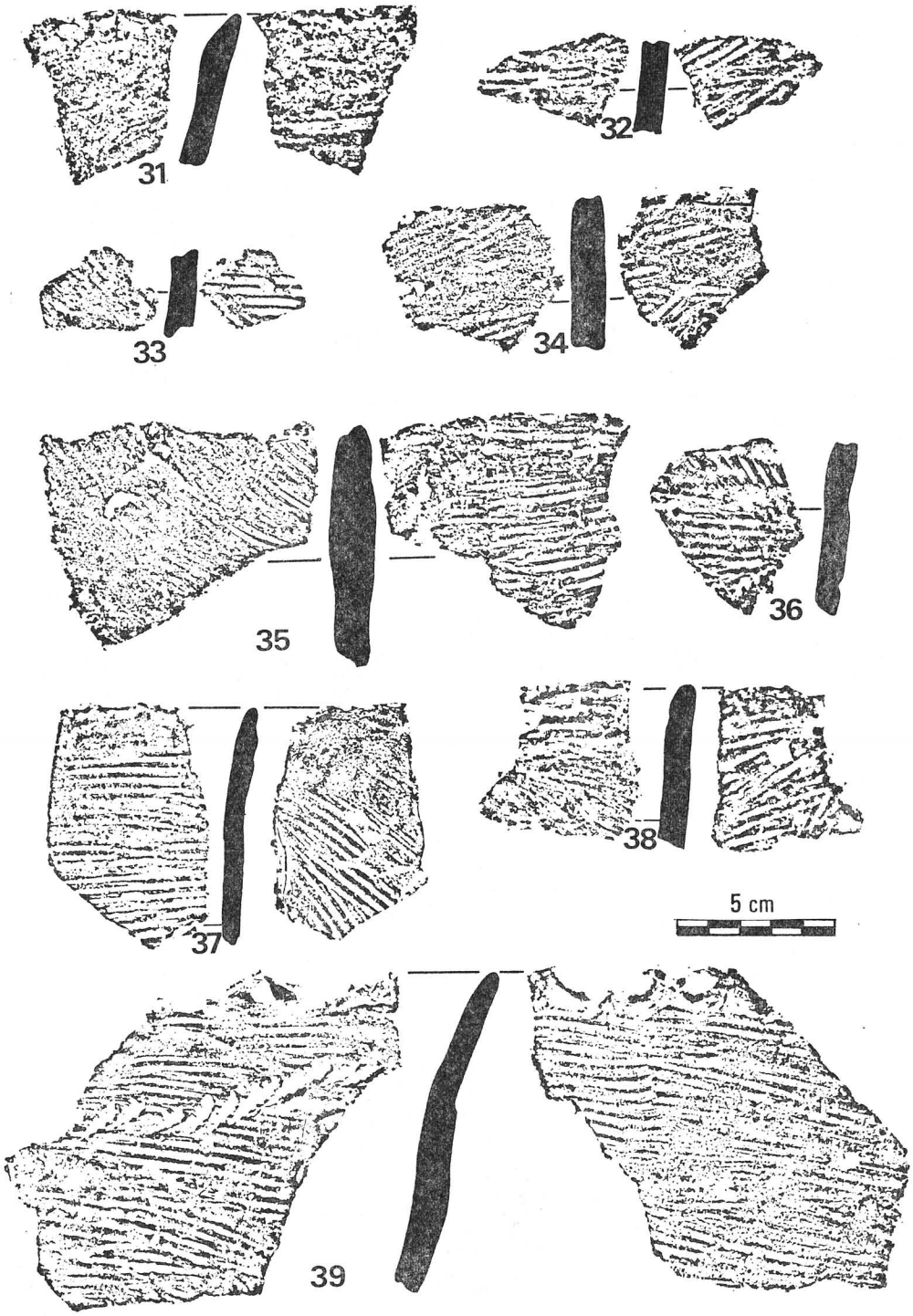
第36図　土壙群出土遺物（図上復元）



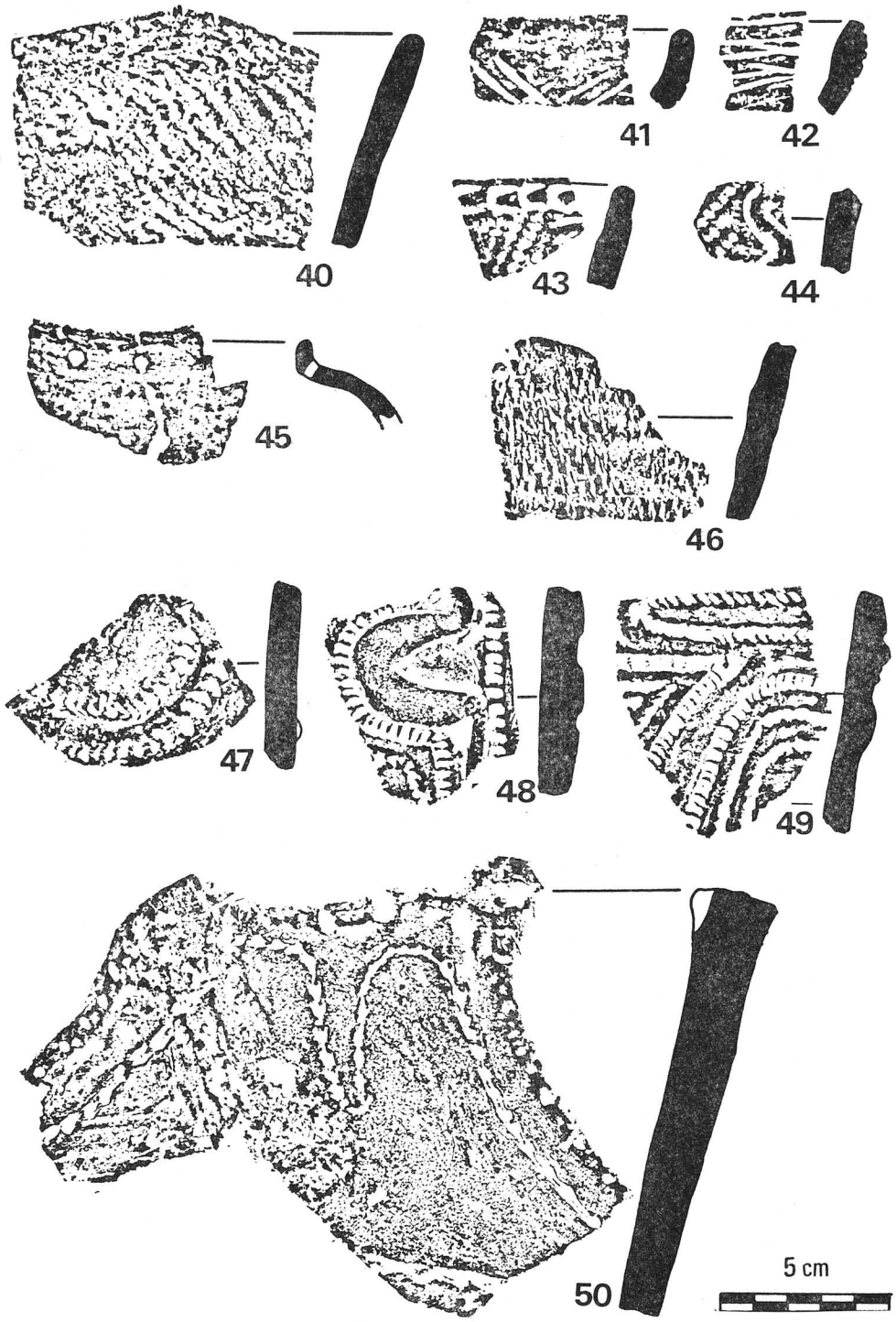
第37図　土壙群出土遺物（土器拓影）



第38図　土壙群出土遺物（土器拓影）



第39図　土壙群出土遺物（土器拓影）



第40図　土壙群出土遺物（土器拓影）

番号 図版	器形	文様構成と施文方法	調整	胎土	色調	備考
(1)	・口縁は外反している。 ・底部は丸底と思われる。	器表面は口縁から底部まで斜行縄文施文（原体ＬＲ条の長さ約44㎜）。裏面は口縁部のみ幅１㎝程斜行縄文施文。それ以下は縦走ぎみの縄文施文。原体は器表面と同じくＬＲ，しかし底部付近は若干細い原体使用，裏面に一部分施文されていない部分が認められるが，ほぼ両面全面施文。いわゆる表裏縄文土器である。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面の一部にナデによる調整痕が看取される。 ・表裏とも薄く剝離しやすい。とくに口縁から胴部にかけて著しい。 ・化粧用の粘土を両面に貼付した後に縄文施文。	・石英細粒含有。	・明るい淡褐色。	・口縁部に補修孔が認められる。
(2)	・口縁は肥厚せずに外反している。 ・底部は丸底と思われる。	・口縁下に幅４㎝程，斜行縄文施文(原体ＬＲ条の長さ約30㎜程)胴部以下は同一原体を縦走させている。 ・裏面は口唇から幅１㎝程に斜行縄文を施文，原体は同一と思われる。	・全面平滑に調整されている。裏面に若干ナデによる調整痕が認められる。 ・器表面が薄く剝離しやすい。器表面には化粧用の粘土が貼付されている。	・よく精選され若干白色の細粒を含有している。	・口縁から胴部にかけては淡黒色。 ・胴部から底部にかけては淡赤褐色。 ・裏面は茶褐色を呈している。	・口縁と胴部に５個の補修孔が認められる。
(3)	・口縁はやや外反。 ・底部は乳房状尖底を呈する。	・口縁から幅３㎝に山形押型文を横位に施文。胴部以下は縦位に施文し，乳房状尖底にまで達している。	・器面は荒くザラザラしている。 ・両面とも調整時の擦痕が認められる。	・石英粒及び雲母含有。 ・粒子が荒い。	・口縁は淡黒色。 ・胴部及び尖底部は赤褐色。	
(4)	・乳房状尖底を呈する。	・器表面に口縁から底部方向に擦痕が認められる。 ・無文の土器である。	・全面平滑に調整されている。とくに器表面は丁寧に調整されている。 ・離面にナデによる調整痕が認められる。	・よく精選され粒子がこまかい。	・器表面赤褐色。 ・裏面黒褐色。	・尖底部に薄く淡いクリーム色の粘土が付着している。
(5)	・口縁は４単位の波状を呈している。	・文様は口縁部に集約され口縁部文様帯を構成する。胴部以下は	・器表面は平滑に調整されている。	・石英，雲母の細粒含有。	・赤褐色。	

	・口縁から胴部にかけて段を有する。 ・底部は平底。	無文である。 ・口唇部には刻みが入っている。 ・口縁部文様帯は先端が平らな，篦状の施文具による沈線文と角棒状施文具による連続刺突文とによって構成されている。 ・モチーフは沈線文によって菱形，円などの幾何学的な文様を形成し，その間を連続刺突文で充塡している。 ・文様は四単位で構成されている。	・裏面はデコボコしている。指頭で粘土ひもの接合部の調整をしたものと思われる。	・繊維を若干混入。		
(6)	・口縁は鋭く内湾し，また波状を呈すると思われる。 ・頸部では直角にカーブして胴部に続く，胴部はほぼ垂直に下降すると思われる。 ・頸部は若干くびれて段をなしている。	・ＲＬＲの地文と浮線文によって構成されている。 ・浮線文は３～４㎜程の幅で篦状の施文具によって刻みが入れられている。刻みは浮線が並ぶ時には“八”状になるように入れられている。口縁には２度刻みをクロスして入れて“Ｘ”状になっている部分もある。 ・口縁部においては，波頂部を起点として文様が構成されている。 ・頸部のくびれ部に長さ15㎜幅３㎜程の粘土ひもを４～５㎜間隔に貼付されている。	・全面平滑に調整され磨きもかけられているように観察される。 ・若干ナデによる調整痕が認められる。	・１～２㎜程の石英粒を含有している。 ・よく精選されている。	・灰褐色。	
(7)	・若干内湾ぎみに直立した口縁で，頸部はややくびれ胴部ではわずかに膨みを持ち底部に至	・文様は細い半截竹管による条線と，隆帯による曲線的な文様によって構成されている。 ・口縁部は幅２㎝程の無文部を有し，その下に隆帯が口縁に並行	・全面平滑に調整されている。	・石英及び白色の細粒含有。	・赤褐色。	

	る深鉢。	して配され，そこから渦巻き状に隆帯が貼付されている。そして貼付の後それをカマボコ状に調整し，その周囲を指頭によってなぞっている。 ・文様施文の順序は隆帯を貼付，条線施文，隆帯周辺のなぞりの順と思われる。				

図版番号	器形・部位・厚さ	文様構成・施文方法	整形・調整	胎土	色調	出土地点層
1	不明（3㎜）	・山形押型文，原体は小片で判明しないが，山形2単位，文様要素は山形が鈍角で山形の頂部が尖かったもの〔a_2b_1〕である。	・石英が器面に露出してザラザラしている。	・石英粒を含有。	・淡赤褐色。	A′6e5・第4層
2	胴部（6㎜）	・山形押型文による全面施文。 ・原体は直径約9㎜程の丸棒に，約2～3㎜幅のジグザグの溝を3本並行して一周2単位ずつ彫ったものと推定される。 ・文様要素は山形が直角で頂部が丸味を帯びたもの〔a_1b_2〕である。	・平滑に調整されている。	・石英雲母細粒をかなり含有。	・淡褐色。	A01　表採
3	胴部（6㎜）	・凸部は長楕円を呈し，これが全体としてはジグザグに配され，山形文状である。 ・原体は直径約7㎜程の丸棒を用い，2単位に長楕円をジグザグに陰刻したものと思われる。	・平滑に調整されているが器面に石英粒が露出してザラザラしている。	・石英粒をかなり含有。	・淡赤褐色。	A′01　No3土壙

4	胴部（6㎜）	・楕円押型文，縦位に施文。 ・原体は二単位，文様要素は楕円を呈し尖出部が斜め横に並ぶもの〔1a₁〕である。	・器面は石英粒が露出してザラザラしている。 ・ナデによる調整痕が認められる。	・白色粒と石英粒含有。	・淡赤褐色。	A3c4　第3層
5	不明（6㎜）	・楕円押型文。文様要素は〔1a₁〕。	・摩耗しているため器面がザラザラしている。	・石英粒含有。	・淡赤褐色。	B1a2　第3層
6	不明（5㎜）	・楕円押型文，横位に施文。 ・文様要素は〔1a₁〕である。	・全面にわたって平滑に調整されている。	・石英粒若干含有。	・淡褐色。	A1e2　第3層
7	胴部（7㎜）	・楕円押型文，横位に施文。 ・文様要素は〔1a₁〕である。 ・重複によって文様が崩れている。	・器表面は平滑に調整されているが裏面は石英・白色粒子が露出してザラザラしている。	・石英・白色粒子含有。	・淡褐色。	B1a1　第3層
8	尖底部（5㎜）	・半截竹管による沈線文が施されている。 ・重複して施文することによって沈線の幅を広げて，あたかも棒状施文具によって施文されているかのようである。	・器表面は平滑に調整されている。 ・裏面は半截竹管による調整痕が認められる。	・石英及び白色粒含有。	・器面赤褐色。 ・裏面灰黒色。	A′6e5　第8号土壙　覆土
9	口縁部，波状を呈する（7㎜）	・幅5㎜の断面三角の微隆帯と直径4㎜程の丸棒状施文具による刺突文及び沈線文沈線と沈線の間にできた微隆線によって構成されている。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面にナデによる調整痕が認められる。	・よく精選されていてこまかい砂粒を含有。	・赤褐色。	A6a5
10	・口縁部，小波状を呈する。 （3㎜）	・幅3㎜程の丸棒状施文具による沈線及び沈線と沈線の間にできた，微隆線によって構成されている。 ・直線的な菱形等の幾何学的なモチーフである。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面にナデによる調整痕が認められる。	・よく精選されていて粒子がこまかい若干石英細粒含有。	・灰褐色。	A5e5

		・菱形状に区画して，その中を沈線文で充塡している。				
11	口縁部付近（7㎜）	・刺突文施文，細い角棒状施文具による施文と思われる。	・平滑に調整されている。	・白色粒含有。	・暗い赤褐色。	A 6 a 5
12	口縁部付近（8㎜）	・八字状に刺突文が施されている。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面は篦状工具による調整痕が認められる。	・石英粒をかなり含有。	・器面淡黒色。 ・裏面淡い茶褐色。	A 7 b 1　第4層
13	口縁部付近（8㎜）	・貝殻腹縁による刺突文二条並行に配されている。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面に篦状工具による調整痕が認められる。	・白色粒子含有。	・器面黒褐色。 ・裏面淡い茶褐色。	A 7 b 1　第5層
14	口縁部（5㎜）	・幅7㎜程の篦状施文具によって施文。 ・爪形状の刺突を直線的に連続施文。 ・口唇部にも刻みを入れている。	・全面平滑に調整されている。	・よく精選されていて粒子がこまかい若干石英細粒含有。	・灰褐色。	A 6 b 4
15	口縁部付近（8㎜）	・直各3㎜程のほそい施文具による刺突文。 ・刺突を重複させてあたかも太い角棒状の施文具を用いたかのような効果を上げている。 ・また同一施文具にて円が描かれている。	・器面に石英粒が露出してザラザラしている。 ・裏面にも刺突痕が認められる。	・石英・白色細粒含有。	・器面灰褐色。 ・裏面淡い赤褐色。	A 1 c 3　第2層
16	・胴部段を有する。（1㎝）	・直径3㎜程の丸棒状の施文具による刺突文。 ・刺突を直線的に配して菱形等の幾何学的な文様を構成しているものと思われる。	・器面は平滑に調整されている。 ・裏面は石英粒が器面に露出してザラザラしている。 ・石英粒はナデによる調整のさい右→左に移動している。 ・これによってナデの方向が看取される。	・2～3㎜の石英粒及び若干雲母含有。	・茶褐色。	A 4 c 5　第3層

17	口縁部付近（8㎜）	・直径3㎜程の丸棒状の施文具によって刺突。 ・刺突を重複させることによって三角形状の刺突文をなしている。 ・三角形状の刺突は直線的に配されている。	・全面平滑に調整されている。	・石英粒がかなり含有。	・灰褐色。	表採
18	口縁部付近（8㎜）	・直径3㎜程の丸棒状の施文具によって施文，同施文具を刺突するだけでなく，ぐるりと円を描くことによって刺突を拡大させ，もっと太い丸棒を用いているかのような効果を上げている。 ・刺突文を直線的に配して菱形等の幾何学的なモチーフを構成している。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面にナデによる調整痕が認められる。	・1～2㎜位の石英粒をかなり含有。	・器面灰褐色。 ・裏面赤褐色	A4c4　第4層
19	口縁部付近（8㎜）	・直径4㎜程の半截竹管の背による刺突及び，同一原体を垂直に刺突し，½回転させることによってできる円形竹管状の刺突とによって構成されている。	・全面平滑に調整されている。	・石英粒及び白色粒子がかなり含有。	・器面灰褐色。 ・裏面赤褐色。	A7b1　第2層
20	口縁部付近（10㎜）	・直径3㎜程の丸棒状の施文具によって施文。 ・円形の刺突を直線的に配している。	・全面平滑に調整されている。	・かなり石英粒及び若干の雲母含有。	・灰褐色。	A5d5　第2層
21	胴部（5㎜）	・無文土器である。 ・若干口縁から底部方向に擦痕が走っている。	・全面平滑に調整されている。 ・表裏とも箆状の工具による調整痕が認められる。	・若干繊維混入。 ・小砂礫含有。	・器面赤褐色。 ・裏面黒褐色。	A6a5　第7土壙覆土

22	底部付近（5㎜）	・無文で若干調整痕と思われる擦痕が斜めに走っている。また角棒状の刺突痕もかすかに認められる。	・両面とも器面はデコボコしている。 ・ナデによる調整痕が認められる。 ・表面に露出した石英粒によってキラキラしている。	・石英粒含有。	・器面茶褐色。 ・裏面灰黒色。	A 6 a 3　第3層
23	胴部（4㎜）	・無文。	・全面平滑に調整されている。 ・篦状の工具によるナデの調整痕が認められる。	・雲母細粒含有。	・器面茶褐色。 ・裏面暗黒色。	A 6 b 3　第3層
24	胴部（5㎜）	・無文斜めに走る擦痕が認められる。	・全面平滑に調整されている。 ・篦状の工具によるナデの調整痕が認められる。	・白色粒を若干含有。	・器面赤褐色。 ・裏面暗い赤褐色。	A 7 b 1　第4層
25	胴部（4㎜）	・無文。	・全面平滑に調整されている。 ・細い半截竹管による調整痕が認められる。	・白色粒及び石英細粒含有。	・灰褐色。	A 6 c 2　第2層
26	・口縁部，波状を呈すると思われる。（8㎜）	・無文。	・器面は石英粒や繊維の痕跡によってザラザラしている。	・石英粒含有。 ・繊維をかなり含有。	・灰黒色。	A 6 b 3
27	胴部（5㎜）	・無文。	・全面平滑に調整されている。 ・細い半截竹管による調整痕が認められる。	・白色粒及び石英粒含有。	・灰褐色。	A 6 a 4
28	胴部（6㎜）	・無文。かすかに斜行及び縦走する擦痕が認められる。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面は篦状工具による調整痕が認められる。	・繊維を若干含有。	・器面赤褐色。 ・裏面淡黒色。	A 6 c 4　第2層
29	胴部（3㎜）	・無文。	・全面平滑に調整。	・石英粒をかなり含有。	・灰褐色。	A 6 b 2　第3層
30	・わずかに乳房状を呈する尖底部。	・不明。	・平滑に調整されているようである。	・白色粒含有。	・器面赤褐色。 ・裏面黒褐色。	A 6 d 4

31	口縁部（7㎜）	・無文土器。	・器面はデコボコしているが丁寧に調整されている。 ・裏面に篦状工具による調整痕が認められる。	・1～2㎜程の石英及び白色粒子含有。 ・繊維をかなり含んでいる。	・灰黒色。	
32	胴部（9㎜）	・直径5㎜程の半截竹管によって器面に沈線が施されている。	・全面平滑に調整されている。 ・表裏とも半截竹管による調整痕が認められる。	・白色粒子若干含有。 ・繊維を若干含む。	・器面茶褐色。 ・裏面灰黒色。	A′7e1
33	胴部（10㎜）	・器表面は条痕を施文した後に器面を平滑に調整され，かすかに認められる程度である。 ・貝殻条痕と思われる。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面には条痕が認められる。	・繊維をかなり含む。	・灰褐色。	A7a1
34	胴部（11㎜）	・条痕文土器。	・器表面は条痕を施文した後に平滑に調整され，かすかに認められる程度である。 ・裏面は条痕がはっきり認められる。	・繊維をかなり含む。	・器面赤褐色。 ・裏面淡黒色。	A6e5
35	胴部（10㎜）	・条痕文土器。 ・両面施文，器面斜行裏面横走。	・全面平滑に調整。	・繊維をかなり含む。	・器面橙褐色。 ・裏面灰褐色。	A7a1
36	胴部（5㎜）	・表裏条痕土器。 ・器表面は条痕を縦走後に再度横走させるように施文している。 ・貝殻腹縁による刺突が認められる。	・平滑に調整した後に条痕が施されている。	・1㎜程の石英を含有。 ・繊維を若干含む。	・灰褐色。	B1a1　第2層
37	・口縁部（5㎜） ・平縁で直立している。	・表裏条痕土器である。 ・器表面は横走し裏面は斜行している。 ・裏面は口唇から2㎝程の無文部を残しその下から施文。 ・口唇に刻みが入れられている。	・器面はデコボコしている。 ・ナデによる調整後，条痕を施こしていると思われる。	・よく精選されていて粒子のこまかいものである。	・橙褐色。	A′7c3

38	口縁部（7㎜）	・表裏条痕の土器である。	・繊維痕によって器面はデコボコしている。	・繊維をかなり含む。	・暗い赤褐色。	A 7 a 2
39	・口縁部・小波状を呈する。	・口唇部は土器の内側からの指頭圧痕によって小波状を呈している。 ・指は圧痕のはいり方を観察した結果右指が用いられていると思われる。 ・表裏条痕土器である。 ・条痕はほぼ平行に走っている。	・全面平滑に調整された後に条痕が施こされたと思われる。	・よく精選されていて粒子が緻密である。	・灰黒色。	
40	口縁部（6㎜） ・ゆるやかな波状を呈する。	・斜行縄文施文原体はＬＲ。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面はナデの後研磨されている。	・石英，白色粒含有。	・灰黒色。	A 6 c 2
41	口縁部（6㎜）	・半截竹管による竹管文施文。	・全色平滑に調整されている。	・雲母・白色粒含有。	・茶褐色。	A 6 b 3
42	口縁部（7㎜）	・半截竹管による平行沈線文施文。	・全面平滑に調整されている。	・雲母・白色粒含有。	・茶褐色。	A 6 b 4
43・44	口縁部（7㎜）	・地文として原体ＲＬを縦コロガシによって施文。 ・口縁部には半截竹管状施文具の圧痕を左回りに施文。 ・胴部は同一原体によってけん垂状に施文。	・全面平滑に調整されている。 ・口唇部及び裏面は研磨されている。	・石英粒・白色粒子含有。	・黒褐色。	A′7 e 1
45	口縁部（5㎜）	・有孔土器である。	・全面平滑に調整されている。 ・器面は研磨されている。	・雲母・石英細粒含有。	・赤褐色。	A′6 e 5　第3層
46	底部付近（7㎜）	・撚糸文施文。	・全面平滑に調整されている。 ・裏面にはすすが付着。	・雲母がかなり含有。	・暗褐色。	A 6 a 4　第4層
47	胴部（9㎜）	・隆帯と箆状施文具による連続刺突文によって構成されている。	・器表面は平滑に調整されている。	・石英粒や小砂をかなり含有。	・淡い赤褐色。	B 5 a 1　第3層

		・隆帯は丸味を帯び曲線的に貼付されている。 ・隆帯に沿って両側に三角形状の刺突が配されている。	・裏面は石英が露出してザラザラしている。			
48	胴部（9㎜）	・隆帯と篦状施文具による連続刺突によって構成されている。 ・刺突文は先が平らなものによるものと尖ったものとの使い分けによって構成されている。	・全面平滑に調整されている。	・雲母及び石英の細粒砂含有。 ・細粒砂。	・赤褐色。	B５a１
49	胴部（8㎜）	・隆帯と篦状施文具による連続刺突文によって構成されている。 ・隆帯の断面はカマボコ状を呈している。 ・刺突文は先端が角ばったものと尖ったものとの使い分けによって角ばった刺突と三角形状の刺突を作っている。	・全面平滑に調整されている。 ・篦状工具による調整痕が裏面に認められる。	・石英粒を若干含有。	・淡い赤褐色。	A５d４
50	口縁部（12㎜） ・扇状の口縁を呈すると思われる。	・直径１～２㎜程の細い丸棒二本をいっしょに持って施文したものと思われる。 ・文様は二本の丸棒による連続刺突文である。一部一本によって刺突した部分もある。 ・口唇部にも連続刺突文が施されている。また刻みが入れられている。	・全面平滑に調整されている。 ・丁寧に研磨されている。	・石英粒，雲母，白色粒子含有。	・灰褐色。	A５d４

まとめ

本遺跡出土の縄文土器は当地域の草創期後半から，中期後葉を構成する土器まで断続的であり，なおかつ長期間に渡るものが含まれていた。したがってここでは，あえて型式学的に細分することにより，各時期を構成する土器群に比定できるものを抽出して，群単位で把握することに努めた。

なお個々の土器および土器片については，一括して表にまとめておいたので参照されたい。

第1群（第35図(1)・第36図(2)）

斜縄文系の土器群であり，第35図(1)はいわゆる表裏縄文土器である。出土点数は9点，ほぼ同一個体と思われる。この土器片はかなり広範囲に散乱しており，出土層は5点が表土及び攪乱層より発見され，残り4点は第5層上面からの出土である。

第36図はB地点第1号土壙より口縁部が，またA５ｃ５グリットからは胴部より底部にかけての破片が，第5層中に直立した状態で，埋設されていたかのような状態で出土した。この土器片はA５ｃ５グリット周辺に集中していた。

第2群（第35図(3)・第37図１～７）

押型文土器であり，全部で11点出土したが，図上復元できた第35図以外はすべて断片的なものであった。11点の内，山形文4点，楕円文6点，その他1点（その他としたのは第37図3で長楕円の凹部をジグザグに配している）。

これを文様の要素で分類すると，山形が鈍角で山形の頂部が尖ったもの3点，山形が直角に近く山頂部が尖ったもの1点尖出部が斜め横に並び楕円を呈するもの6点である。

第3群（第36図(5)・第37図８～20）

沈線文及び連続する刺突文を，施文する土器群である。この土器群として，第37図8のように沈線文を主体としたもの，9・10のように微隆起線文を有するもの，11～14のような刺突文や，15～20のような丸棒，角棒等による刺突文を有する土器片なども，抱括的に第3類とした。

第36図(5)は箆状施文具による幾何学的な幅の広い凹線文による区画と，その中を充填している連続刺突文によって構成されている。

第4群（第35図(4)・第38図）

無文土器および擦痕を有する土器群である。この中には繊維を含まないもの第38図26・28，若干含むもの第35図(4)・第38図21～25・27・29，繊維を多量に含むもの30などがある。またこれらの土器片の中には，調整痕と思われる擦痕が顕著に認められるもの21・24・25・27がある。第35図(4)・第38図29などの底部は若干乳房状の尖底を呈している。第4群とした土器片は全部で154点出土した。

第5群（第39図）

貝殻条痕文土器であり，大部分の土器片は両面に施文されている。またほとんどの土器片は多量の繊維を含んでいるが，含まないもの38・39もある。39は貝殻腹縁による刺突文が施されている。口縁部は平縁でやや開くもの31・39，直立するもの37・38，口唇部に刻みが入るもの38，小波状を呈するもの39などがある。第5群とした土器片は全部で104点出土した。これら条痕文土

器のうち39は口唇部の形態，貝殻腹縁による刺突及び胎土・色調などの点で他の土器片と異なっている。

第6群（第35図(6)・第40図）

諸磯式に比定される土器である。この第6群とした土器片は全部で40点出土した。これらの土器片のうち，第40図45は小形有孔土器である。46は底部付近の破片で，器形は平底を呈し，地文には撚糸文（原体不明）が施文されている。

第6群とした土器は諸磯 b 式段階のものが大半で，第35図(6)は浮線文の存在が目立つ土器である。

第7群（第40図47～50）

第7群とした土器片は全部で15点出土した。これらのうち隆帯と連続刺突文によって構成されているもの，47～49と連続刺突文のみで構成されているもの50とがある。しかしこれらはすべて断片的であり，全体を語ることは不可能である。50は新道式的な三角形区画文を，意識したものとも考えられるが，47などと共により，阿玉台式的な様相を呈したものと思われる。

第8群（第35図(7)）

この第8群とした土器片は全部で7点出土した。これらは図上復元した第35図(7)以外は，すべて断片的なものであった。(7)は地文が条線であることなどから，曽利系の土器と思われる。胴部文様帯における，渦巻状のモチーフを有する土器はかなり広域に分布している。また曽利系統内に限ってみても，その変遷を追うことが可能であると思われる。しかしこの問題は発見された同期の土器があまりに少ないため，これ以上の考察はむりである。

（奈良　泰史）

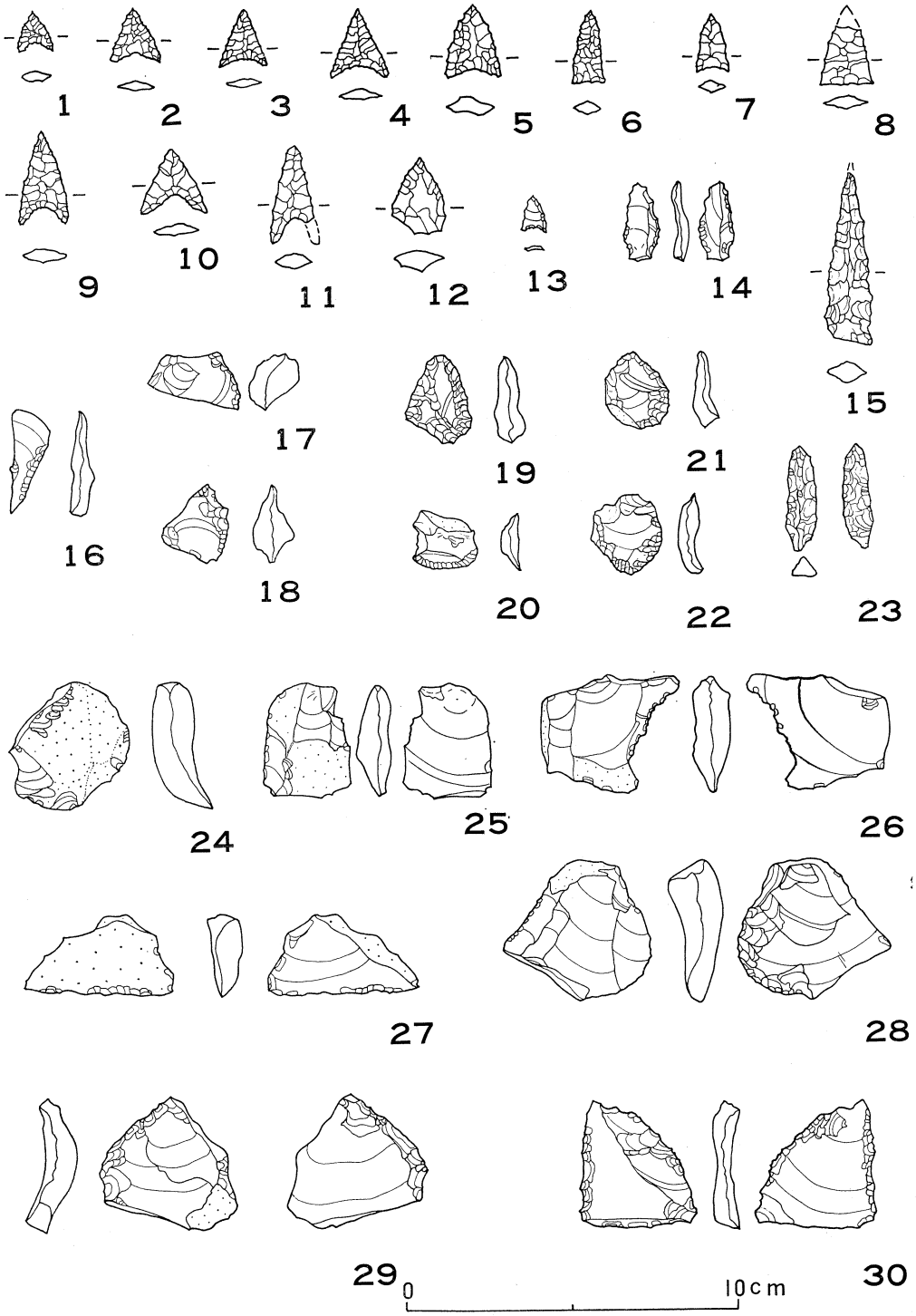
b 石　器

本遺跡出土の石器には石鏃・尖頭器・スクレイパー・石匙・打製石斧・礫器・磨石・凹石・敲石・石皿等の器種がある。石器の総数は95点が確認され，また剥片や未完成品も多量に出土した。石器の多くは，縄文早期の石器で，一部前期・中期を含んでいる。

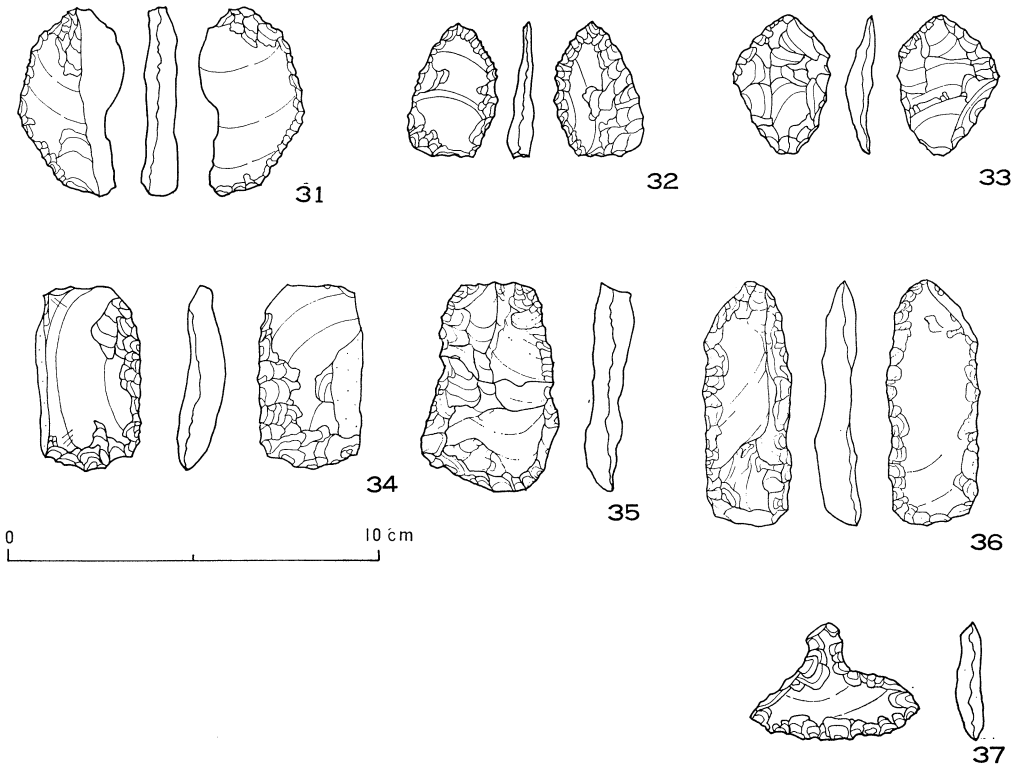
器種別に説明すると次の通りである。

石鏃（第41図1～14）

1は，小形で側縁がゆるやかに曲がり基部の抉りは浅い。2・3・4は正三角形に近く基部の抉りは浅い。3・4の側縁は直線的である5は節理にそって剥離痕が残っている。6・7は二等辺三角形であり，基部の抉りは浅い。8は先端・脚を欠損し，側縁は直線的である。9は側縁がゆるやかに曲がり，基部の抉りは深い。10は正三角形に近く基部の抉りが深く，脚を作り出している。11は長身のもので基部の抉りが深く，脚を作り出しており右脚部を欠損する。12は主要剥離面を残し，調整も粗いものである。13は最大長1.1cm，最大幅0.7cm，厚さ0.1cmという非常に小形なものである。基部の抉り込みもあり，左側縁の裏面には調整剥離を施されている。14は，側縁に調整剥離を施しており，先端は尖るが調整剥離は施されていない。基部には自然面を残し，刺突具としての機能を持つと思われるのでこの中に含めた。石質は1～4・8・13・14が黒曜石，5～7・9・12がチャート，10・11が凝灰岩である。この他に19点出土している。



第41図　土壙群出土遺物（石器実測）



第42図　土壙群出土遺物（石器実測）

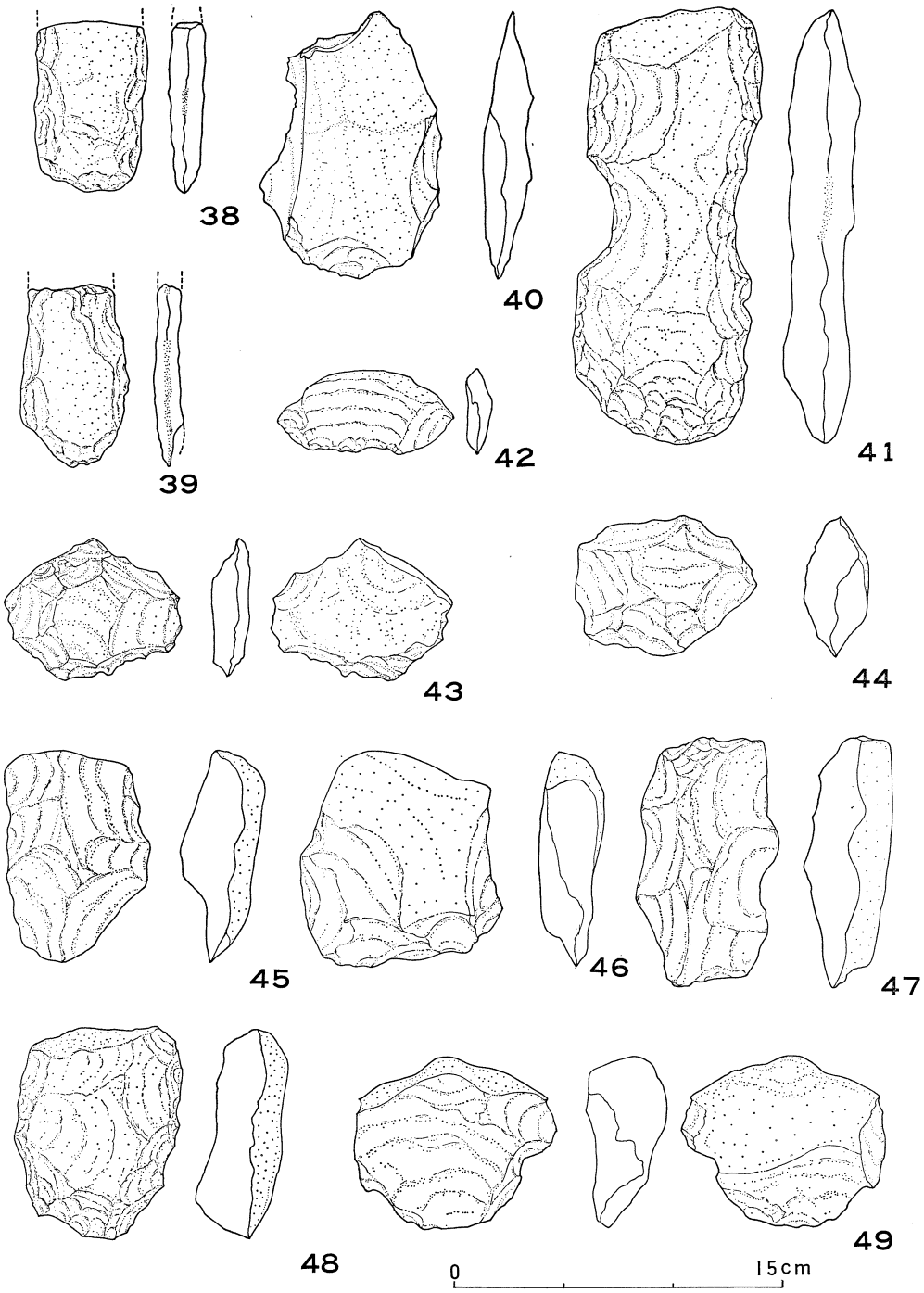
尖頭器（第41図15）

両面からの押圧剥離を施しており，先端部と基部を欠損し，おそらく有舌尖頭器であろう。石質は，風化しているが安山岩である。

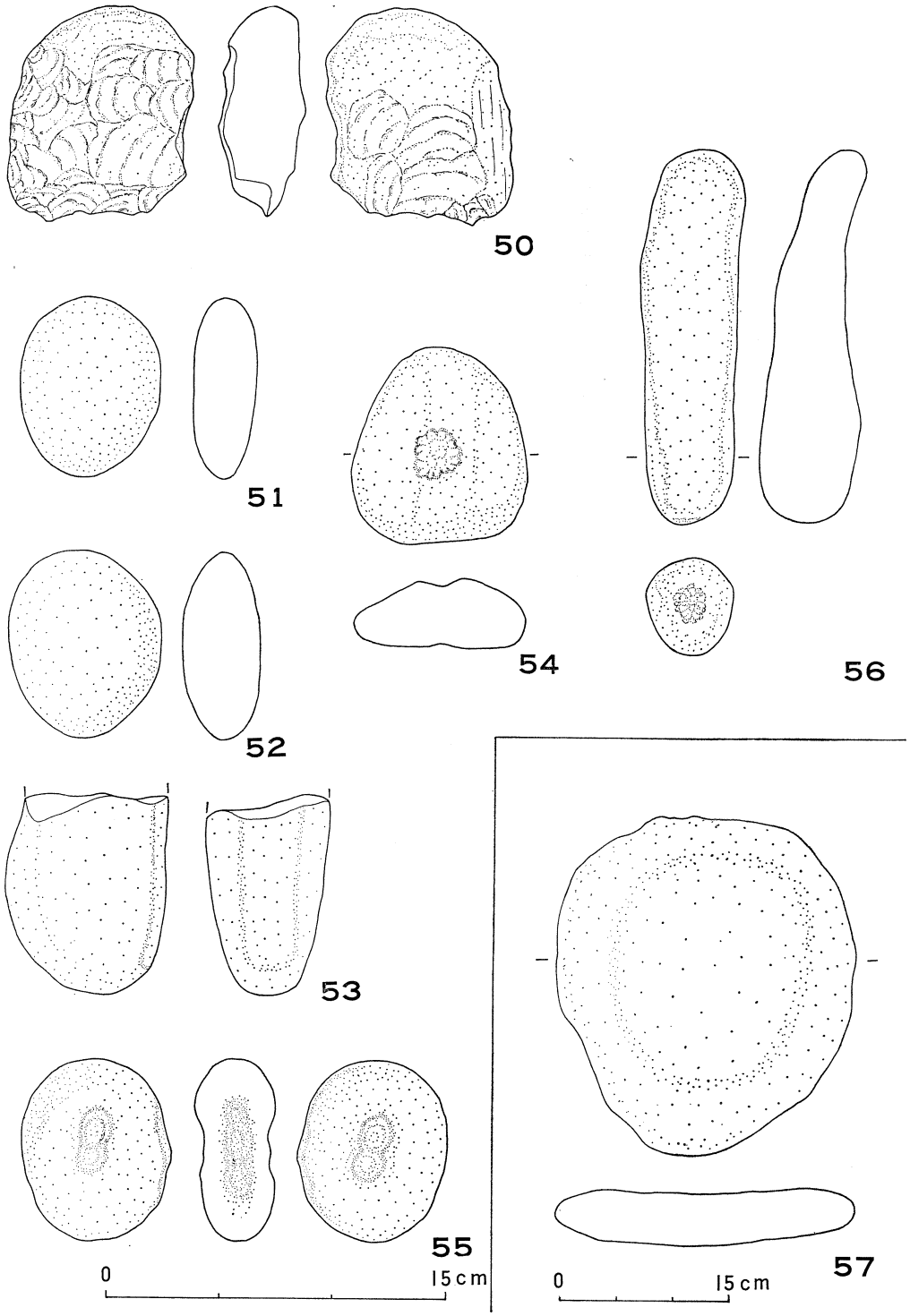
スクレイパー（第41図16～30・第42図31～36）

16・17・18は表面右側縁に刃部が形成されている。19は両側縁・右側縁の裏面に調整剥離を施しており，右側縁を刃部として用いたのであろう。20は表面下辺に刃部が形成されている。21は表面右側縁に，22は表面右側縁，下辺にやや厚い刃部が形成されている。23は断面三角形で舟底形を呈し，両側縁に刃部を形成するように調整剥離が施されている。下端にはつまみと思われるような小さな突き出しがある。

24・25は自然面を残す剥片である。はっきりとした調整剥離はないが，両側縁・下辺は鋭く，使用痕が見られる。26・27は自然面を残し，26は右側縁に刃部を形成している。27は下辺に両面から調整剥離を施している。28は表面左側縁に使用痕が見られ，裏面左側縁に刃部を形成している。29は表面左側縁・裏面右側縁の両面からの調整剥離によって刃部を形成している。30は両側縁に両面からの細かい調整剥離により，刃部を形成し，下辺に使用痕と思われる剥離痕が見られる。第42図31は右半分欠損し，表面右側縁に両面からの調整剥離により，刃部を形成している。32・33は尖頭状を呈する。32は主要剥離面を残し，両面からの細かい調整剥離により，刃部を形成している。33は両側縁・上部に両面からの調整剥離により，刃部を形成している。34は方形を



第43図　土壙群出土遺物（石器実測）



第44図　土壙群出土遺物（石器実測）

呈して主要剥離面を残し，右側縁・下辺に両面からの調整剥離により，刃部を形成し少しそりぎみである。35は同じグリット内より出土し，接合したものである。両側縁に両面からの調整剥離により刃部を形成している。36は主要剥離面を残し，両側縁に両面からの細かい調整剥離により刃部を形成している。裏面・下辺に調整剥離が見られ，やや細身である。

石質は第41図22，第42図31・33・35・36がチャートであり，他は黒曜石である。第41図16～22は小さな剥片に調整剥離を施したもので，この他に4点出土している。

第41図24～30，第42図31～36はやや大形であり，この他に2点出土した。第41図24・25のような剥片は他にも多く出土した。

石　匙（第42図）

横形で刃部は両面から細かい調整剥離が施されており，石質は凝灰岩である。この他に同形の黒曜石を素材にしたものが，1点出土している。

打製石斧（第43図38～41）

38は短冊形であり基部を欠損する。全体に調整剥離が施されている。39は撥形であろう，刃部と基部を欠損し，風化が著しい。40は数回の剥離により，刃部を形成しているが，非常に鋭い。

41は大きな分銅形であり，上辺に自然面を残す。側縁の抉りの磨耗は着柄のためであろうか，全体に丁寧に仕上げられている。

石質は40が安山岩で，他は硬質頁岩でこの他に2点出土した。

礫　器（第43図42～49・第43図50）

第43図42は上辺に自然面を持ち，細かい調整剥離により刃部を形成している。熱を受けたのか幾分赤味がある。43・44は周辺から剥離が施されており，裏面の剥離によって，刃部を鋭利にしている。44は裏面に自然面を残し1回の剥離が見られる。45は表面に2回，裏面に1回の粗い剥離により，刃部を形成している。両側縁・左側縁の裏面には胴部整形と思われる剥離がある。46は表面・裏面から調整剥離により，刃部を形成し側縁には胴部整形の剥離が施されている。47は右側縁に3回の粗い剥離により，鋭利な刃部を形成している。左側縁には3回の粗い剥離が加えられているが，鈍角をなし，刃部は右側縁と思われ裏面には自然面を残す。48は表面からの細かい調整剥離により，分厚い刃部を形成している。両側縁には胴部整形の剥離が施され裏面には自然面を残す。49は両面から1回の粗い剥離と，数回の調整剥離により，やや厚い刃部を形成している。第44図50は両面からの細かい調整剥離により，分厚い刃部を形成し，表面側縁はよく磨かれて平坦になっている。

石質は44～48・50が安山岩で，42・49が硬砂岩，43が凝灰岩である。この他に5点出土している。

磨　石（第44図51～53）

51・52は円礫を素材としてよく磨かれている。53は楕円形を呈し，両面・右側縁はよく磨かれている。

石質は51が多孔質安山岩，52が砂岩，53が花崗閃緑岩である。この他に5点出土している。

凹　石（第44図54・55）

54はおむすび形である。両面の中央部に凹みを持ち，表面は磨かれている。55は円礫を素材とし，両面に２つずつの凹みを持ち，側縁に敲打痕が見られる。両面が磨かれ，石質は，54が多孔質安山岩，55が砂岩である。

敲　石（第44図56）

砂岩の細長い礫を素材とし，下端に敲打痕が見られ全体に磨かれている。

石　皿（第44図57）

中央部に浅い凹みを持つ程度で，それほど擦り減っていない。石質は多孔質安山岩である。

まとめ

石鏃第41図１～７の基部の抉りが浅いものは，概して，早期末葉の条痕文系土器に伴って発見され，第41図９～11の基部の抉りが深いものは，上層部の前期後半の浮線文系土器に伴って発見された。

有舌尖頭器（第41図15）と思われるものは，スクレイパー（第42図35・36）と一緒に，褐色土（ソフトローム層）の中より発見されてた。石匙（第42図37）は上層部より発見されており，浮線文系土器に伴うものと思われる。

打製石斧の数が非常に少なく，確認されたのは６点にとどまり，中期の土器に伴うと思われるのは２点（第43図38・39）位である。第43図41の打整石斧は本遺跡発見の唯一の分銅形を呈し，一番大形の石器である。

礫器が多く発見されたのが本遺跡の特色であり，確認されただけでも14点を数え，他にこれに近い物まで入れると数十点にのぼる。概して下部より発見されることから，早期の土器に伴うものと思われる。

凹石（第44図55）と敲石（第44図56）はA′01区で確認された，小竪穴の床面直上よりセットで発見され，この遺構に伴う石器である。

石皿（第44図57）は上層部より発見されており，浮線文系土器に伴うものと思われる。

石器に使われてる石材は，すぐ下を流れる谷田川の花崗閃緑岩・硬砂岩・凝灰岩等が主であるが，相模川の安山岩もかなり使っている。黒曜石やチャートにまじって，水晶のフレークもかなり見られた。

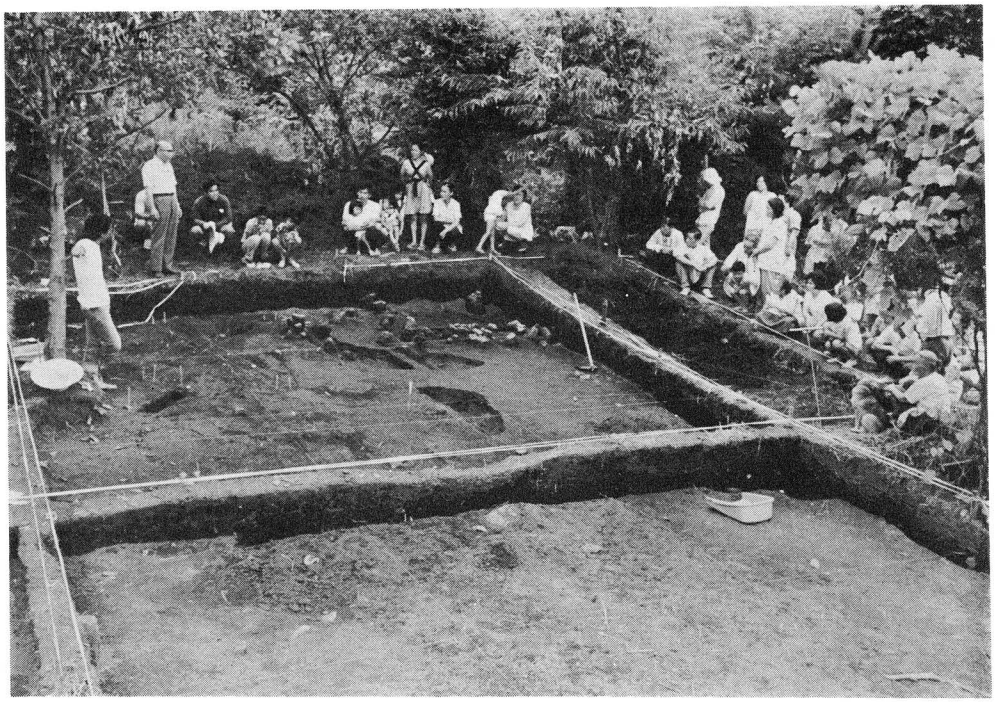
（佐々木　克典）

図版 1

仲大地遺跡全景（発掘以前の姿）

B3区　発　掘　風　景

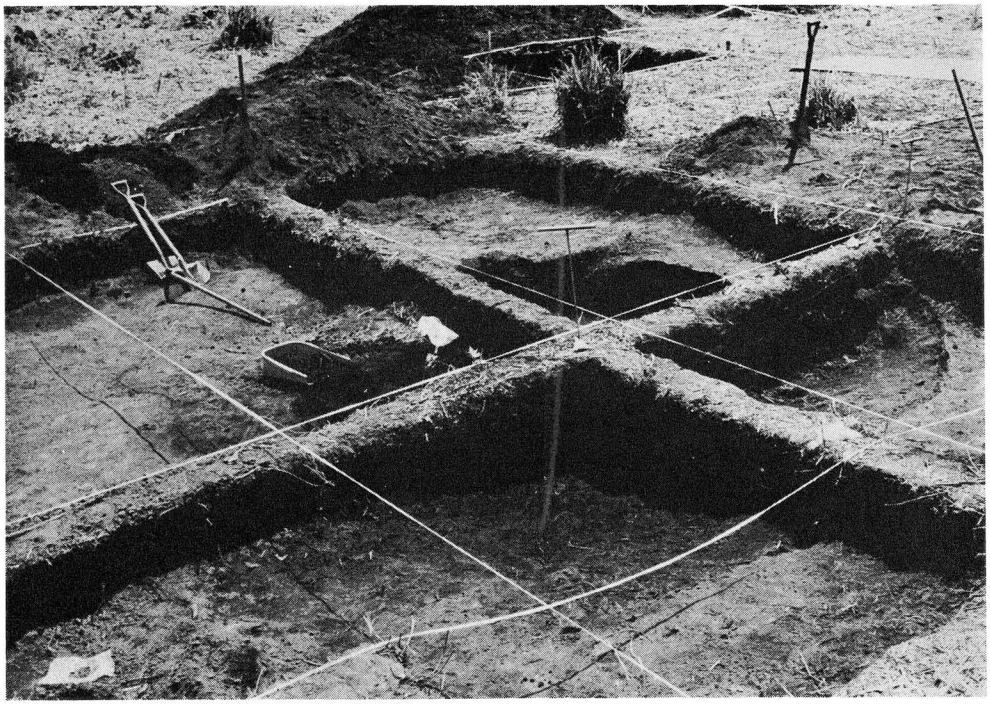
図版 2



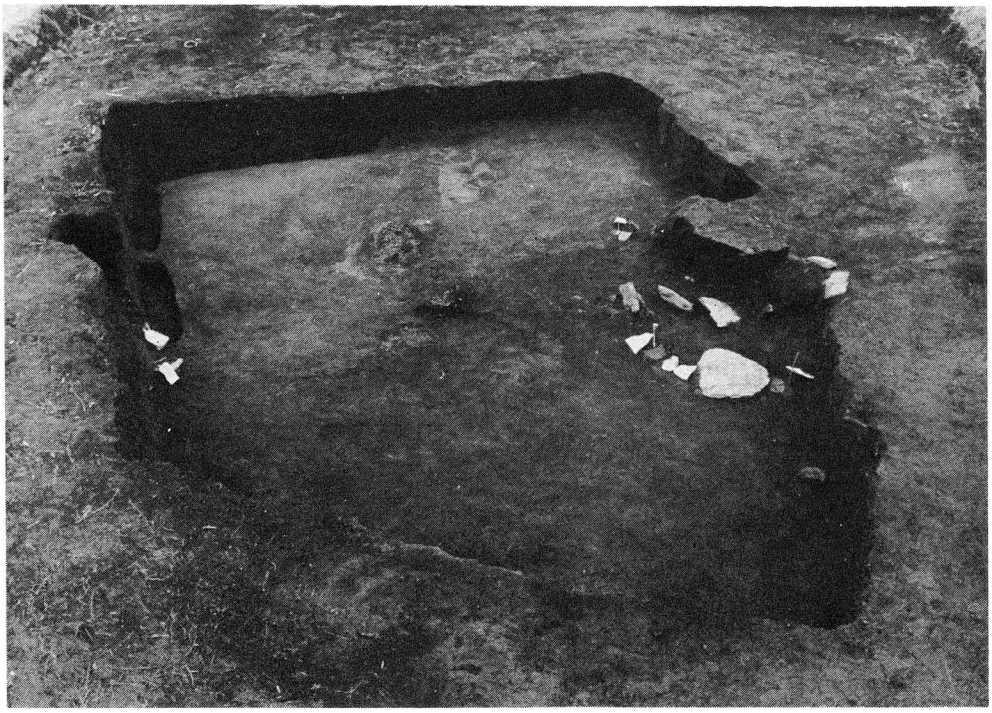
発掘中間現場報告会風景

A地点A′01区　発　掘　風　景

図版 3

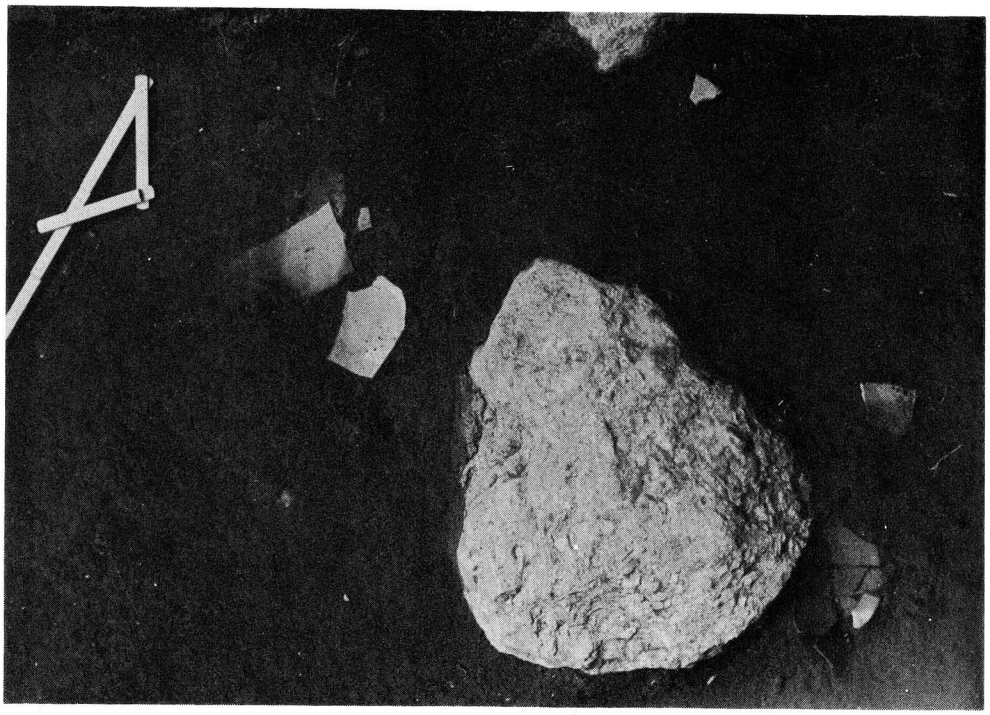


B 3 区　第 1 号住居発掘途中風景

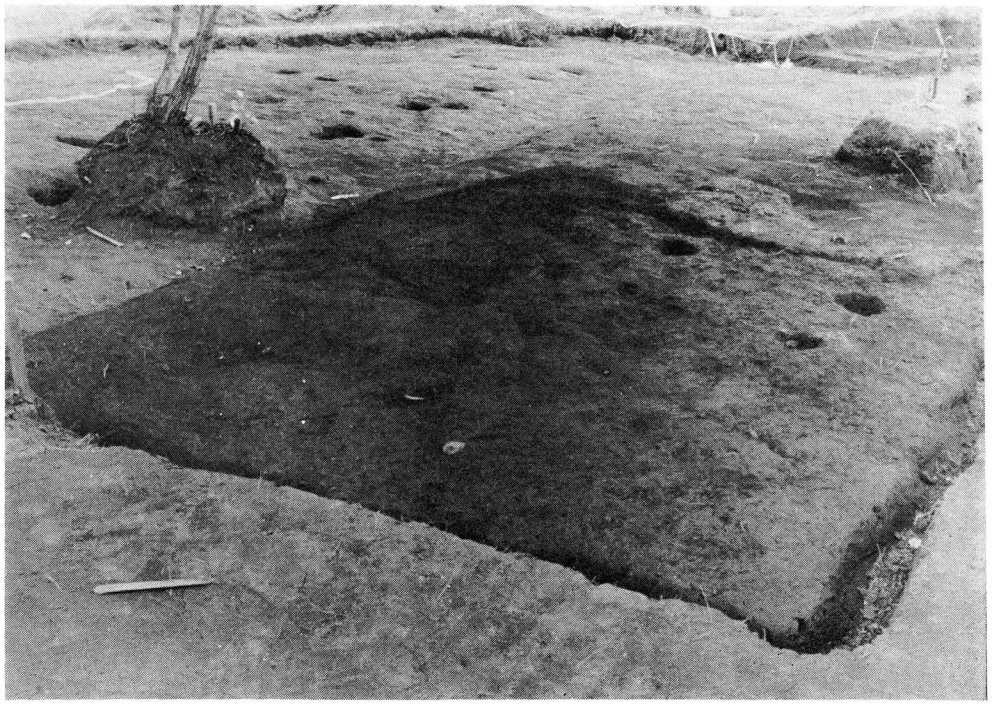


B 3 区　第 1 号住居

図版 4



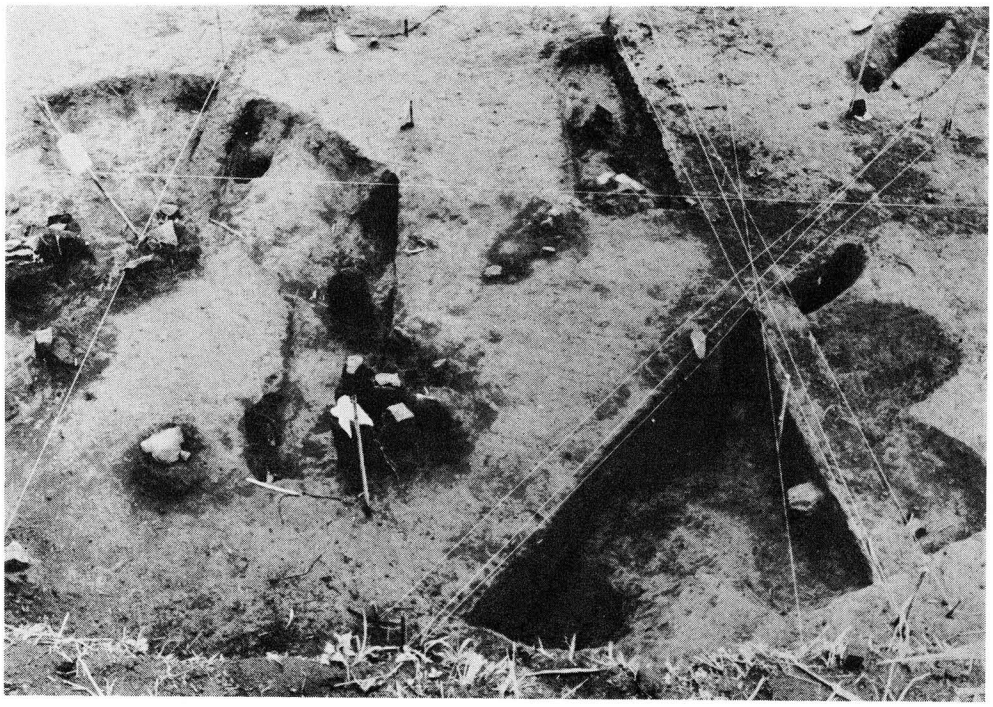
B 3 区　第 1 号住居遺物出土状況



A地点A01区　第 3 号 住 居

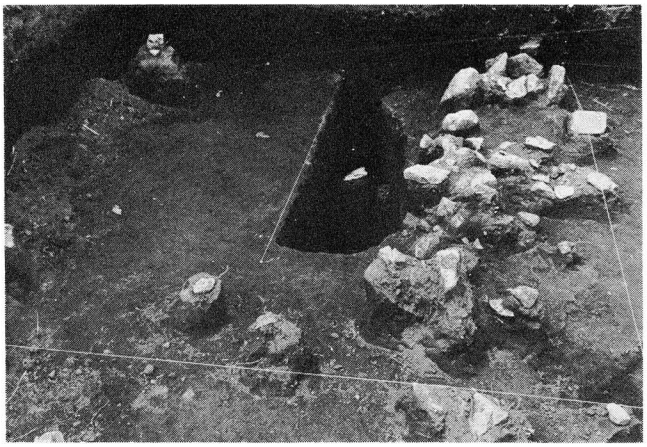
図版 5

A地点A′01区　実測途中風景

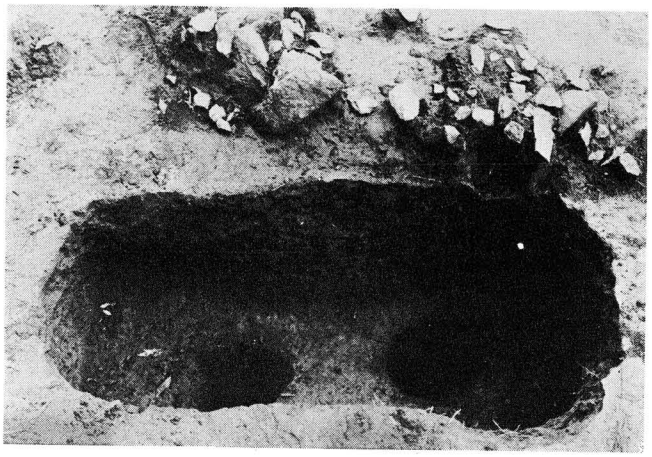


A地点A′01区　ファイヤーピット群出土状況

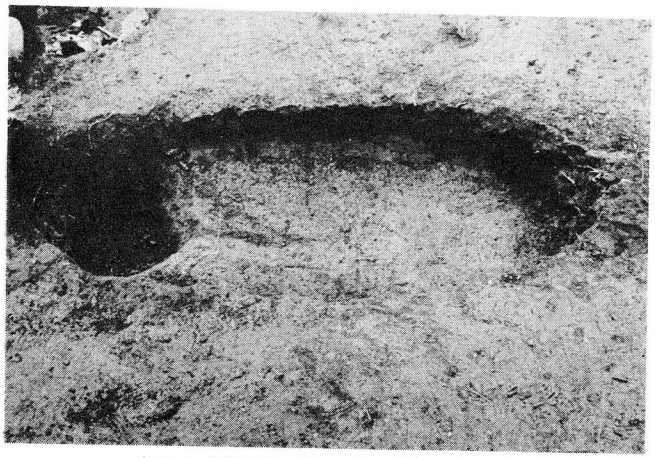
図版 6



A地点A′01区　第 2 号土壙発掘途中風景



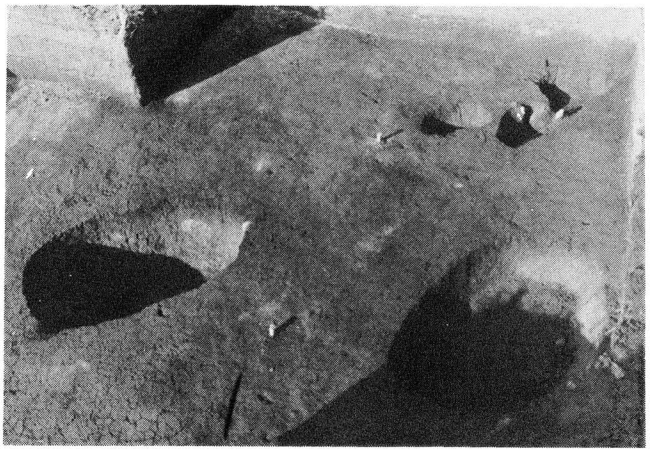
A地点A′01区　第　2　号　土　壙



A地点A′01区　第　4　号　土　壙

図版 7

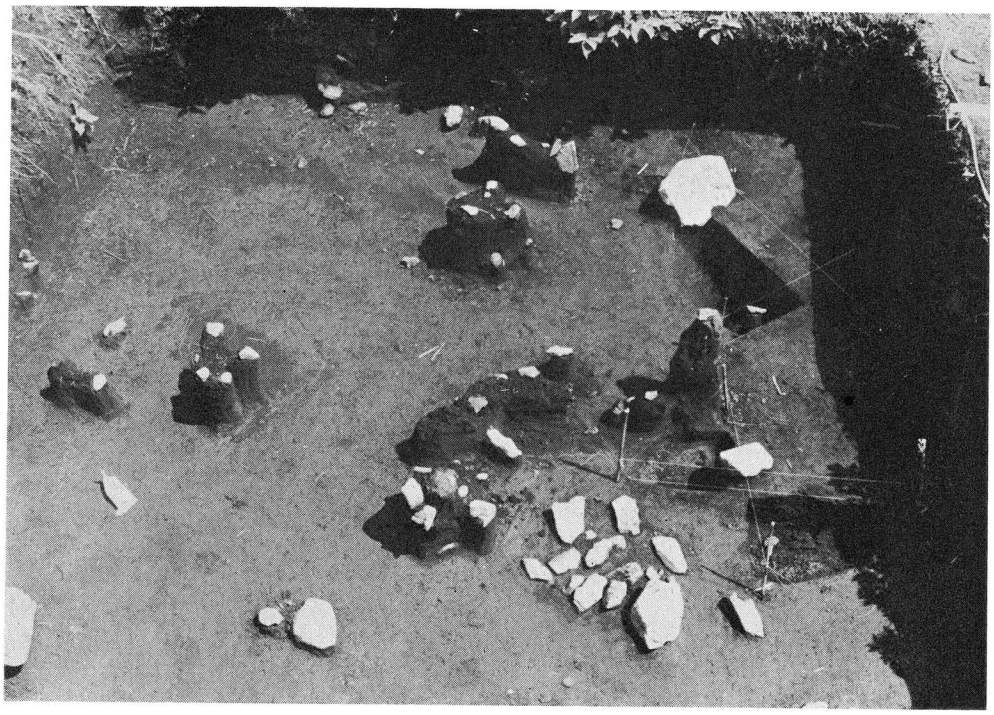
B地点A6区　発　掘　風　景



B地点A6区　第7・8号土壙

図版 8

B地点A 6 区　発　掘　風　景



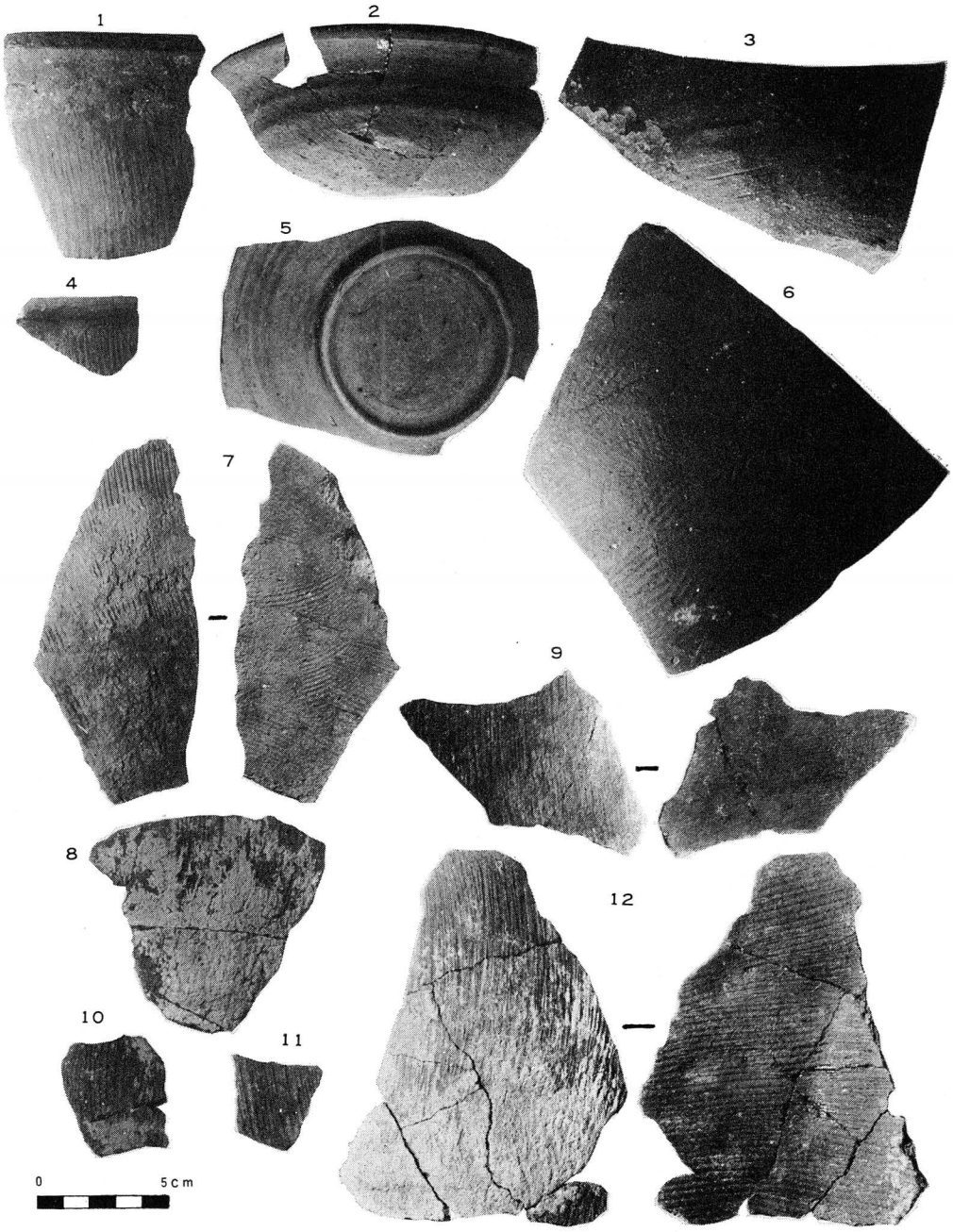
B地点A 6 区　礫　　分　　布

図版 9

B地点A 6 区　第 5 ・ 6 号土壙と焼石

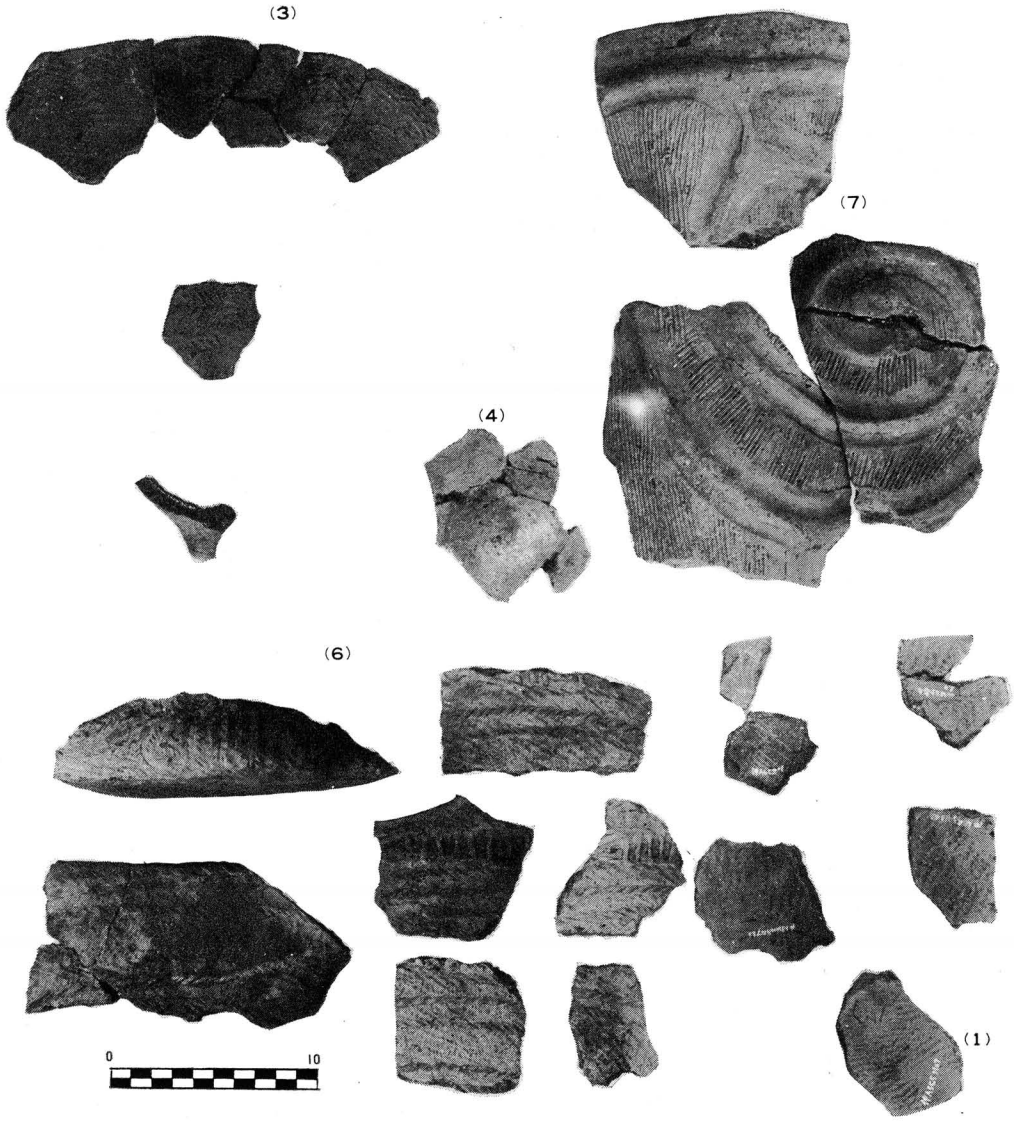
B地点A 6 区　遺 物 出 土 状 況

図版10



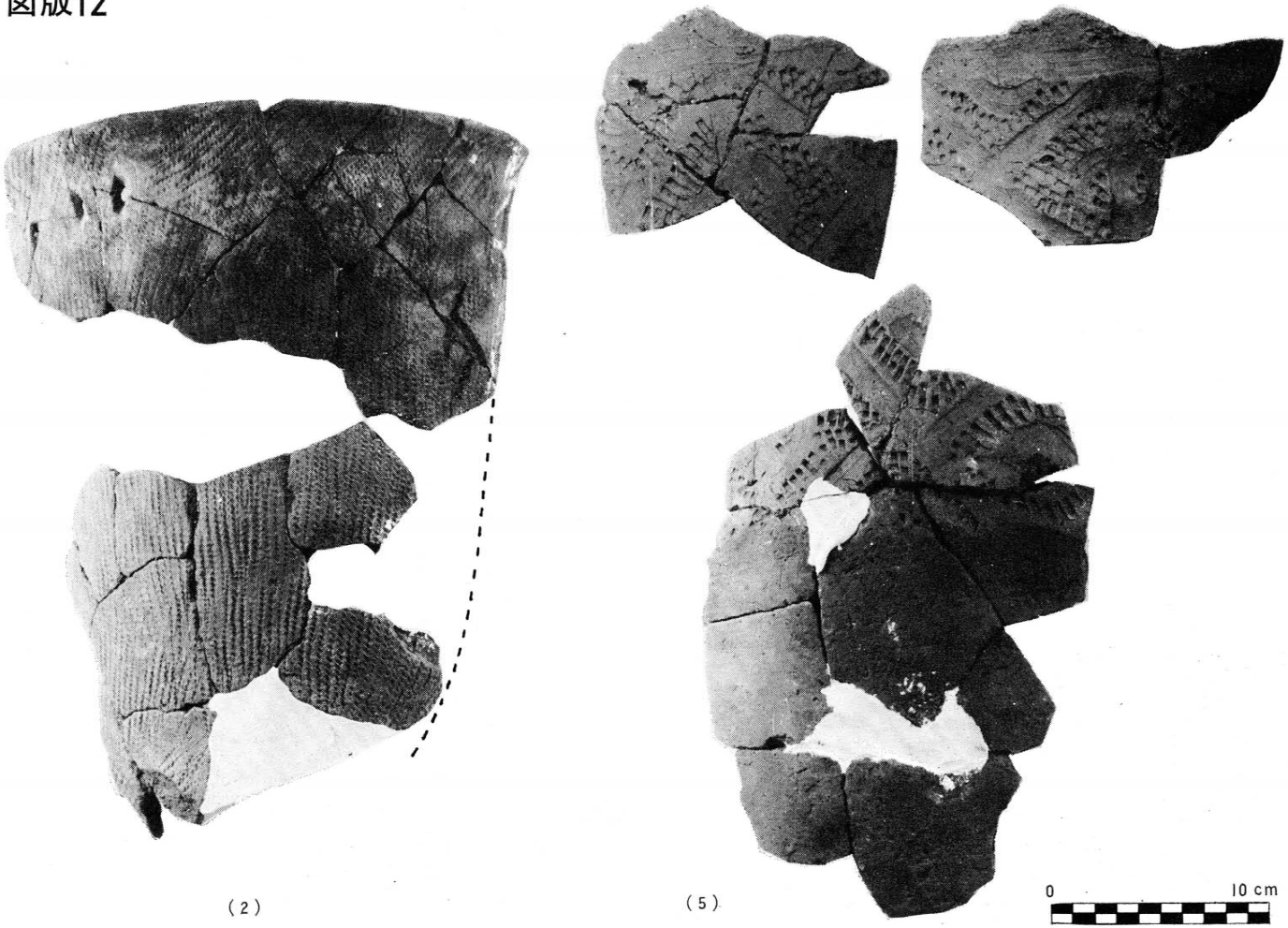
挿図第33・34図出土遺物

図版11



土 壙 群 出 土 遺 物

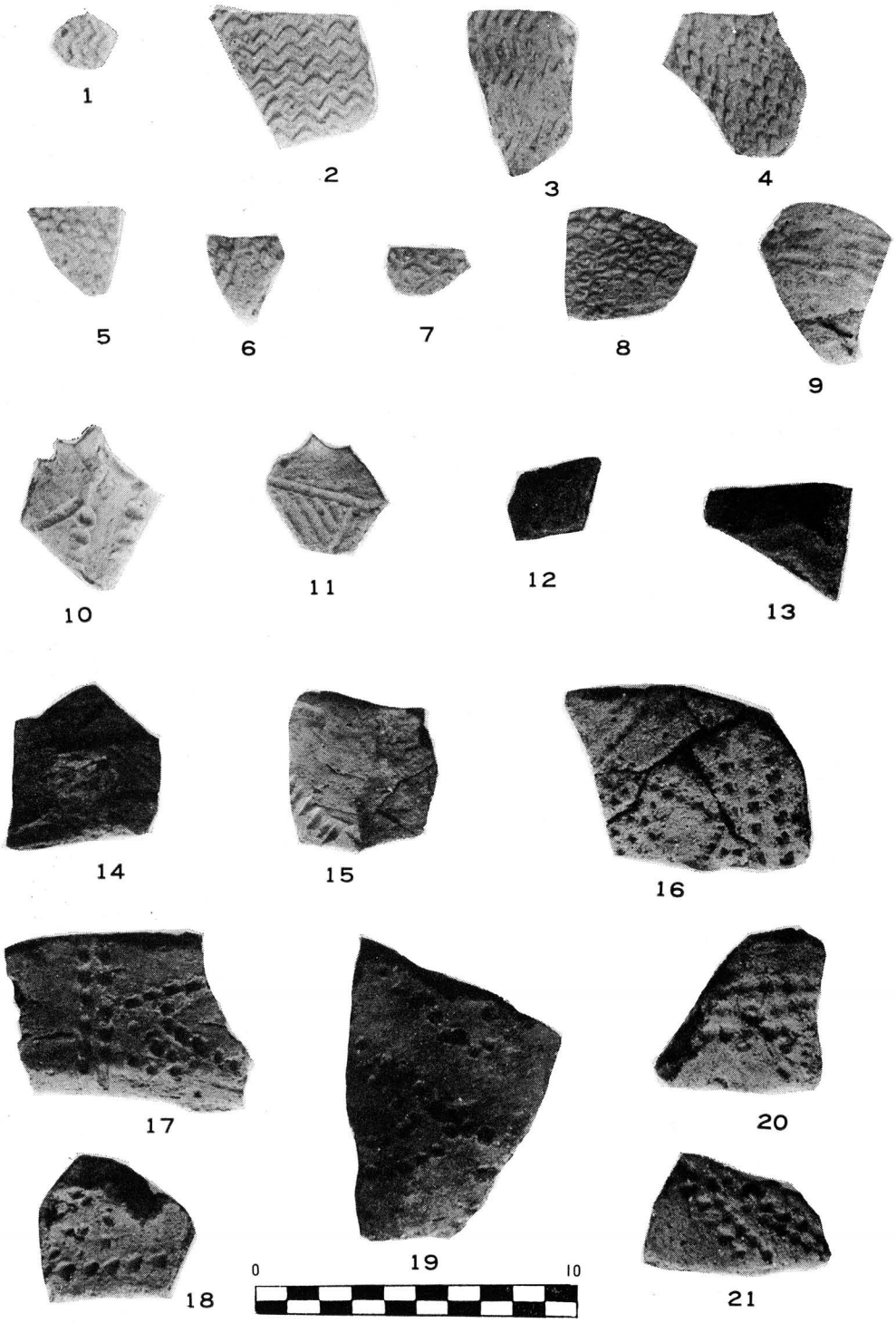
図版12



(2)　　(5)

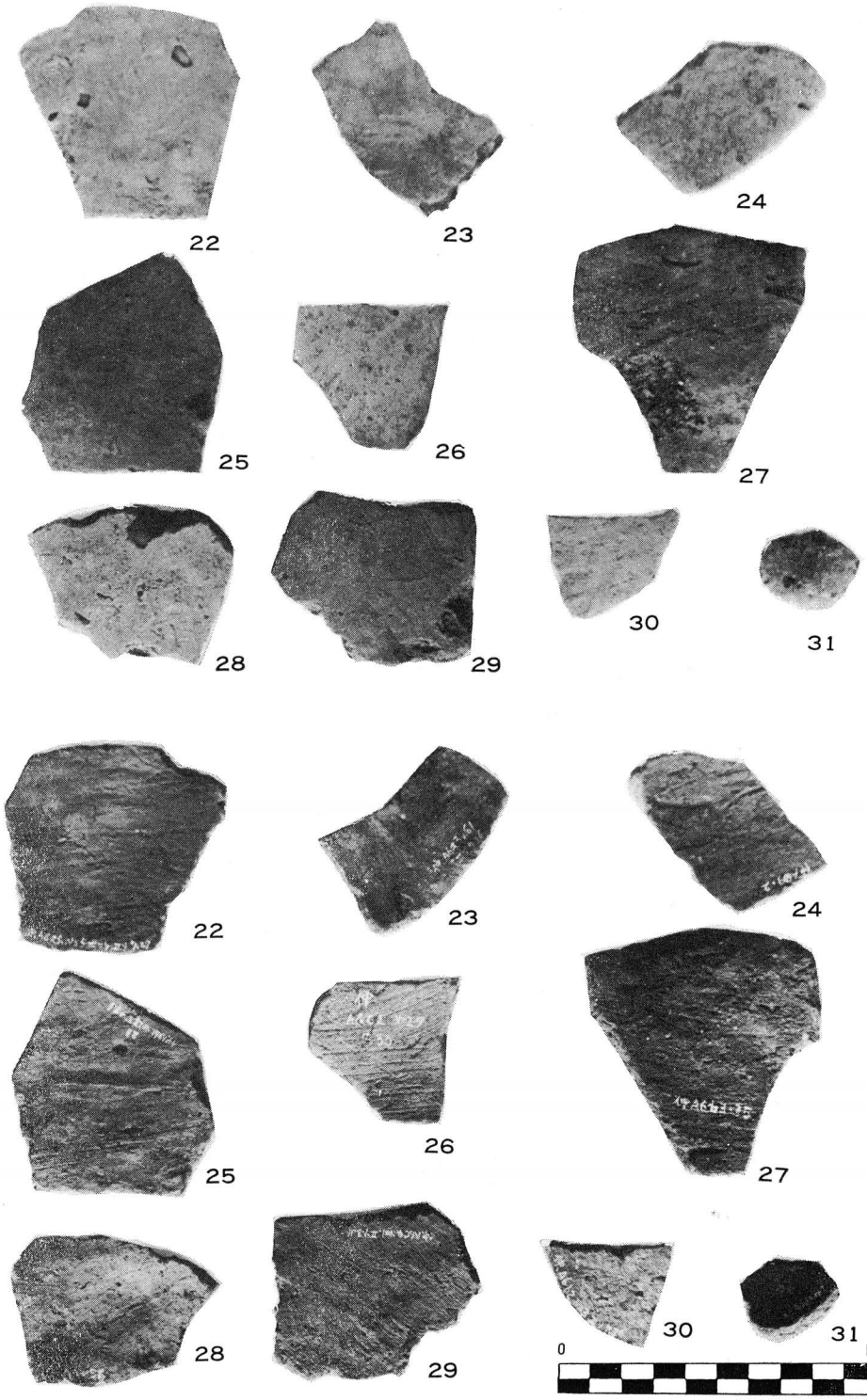
B 地点土壙群出土遺物写真

図版13



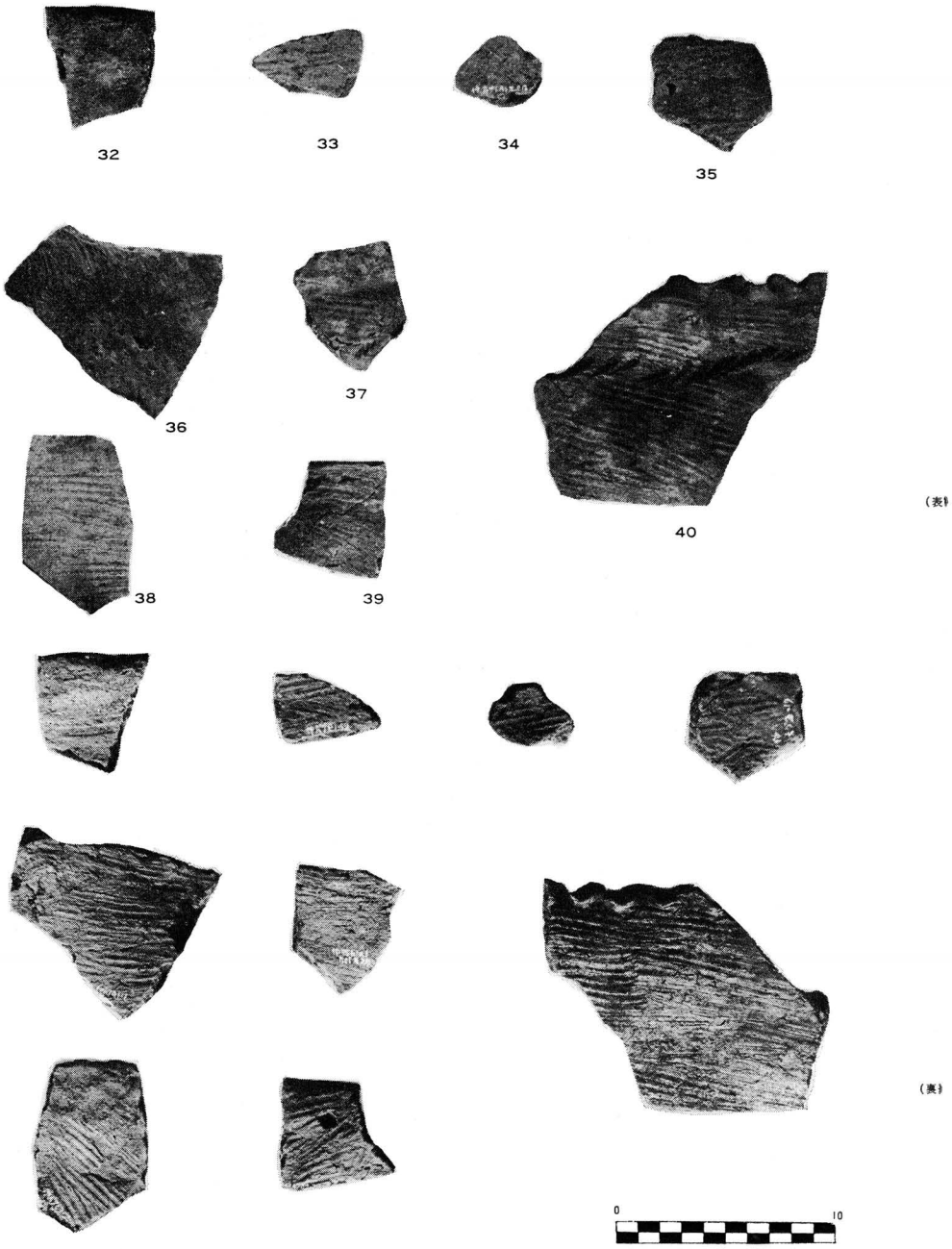
土 壙 群 出 土 遺 物

図版14



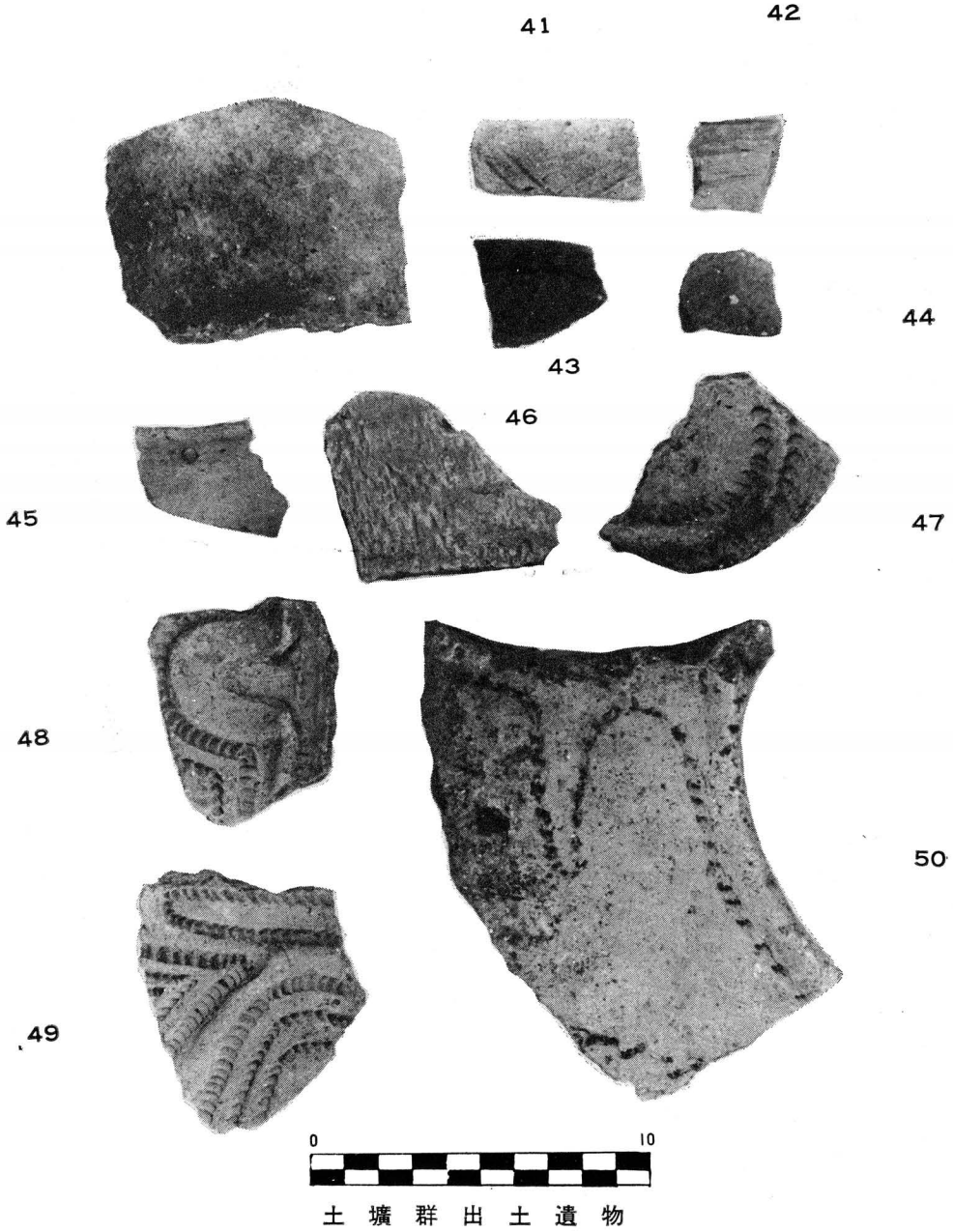
土 壙 群 出 土 遺 物

図版15



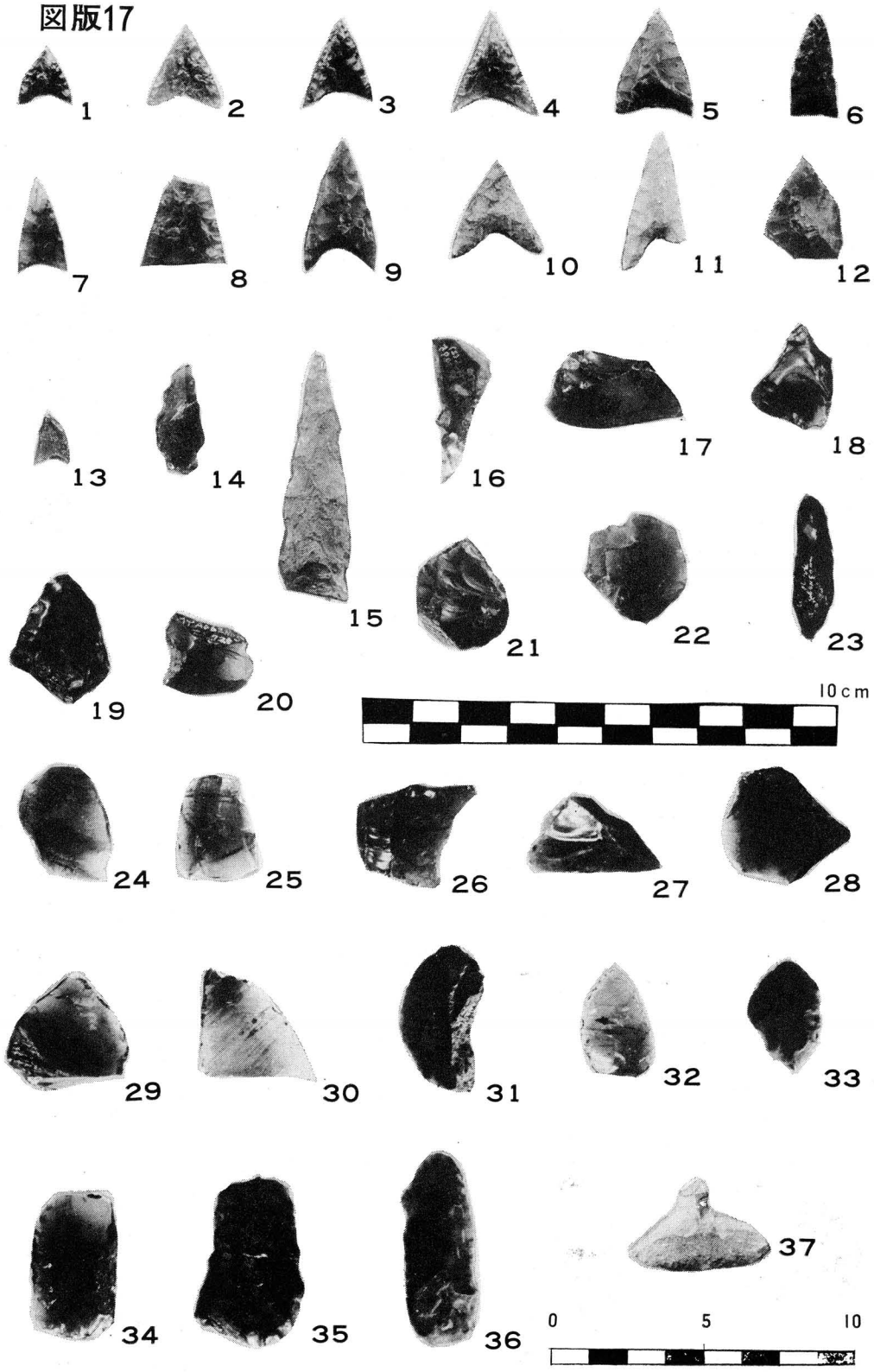
土 壙 群 出 土 遺 物

図版16



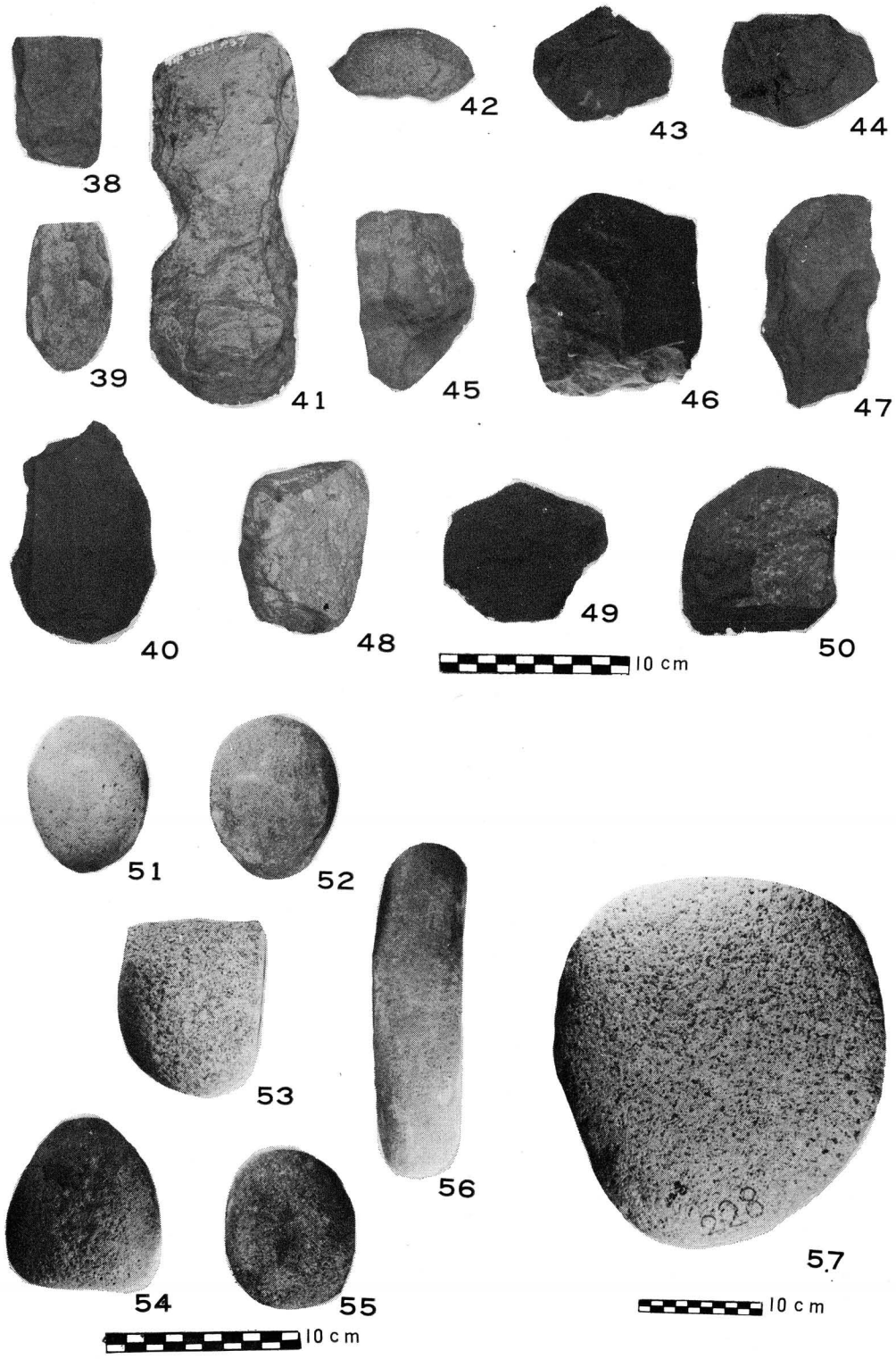
土 壙 群 出 土 遺 物

図版17



土 壙 群 出 土 遺 物

図版18



土 壙 群 出 土 遺 物

第6章　む　す　び

以上が本遺跡の第1次，第2次調査の主な報告である。この調査が単なるゴルフ場造成に伴う行政発掘でないことは，二年数ヵ月の歳月をかけ，江坂教授，川崎義雄，重住豊の諸先生方の御指導のもとに，地域住民の協力及び行政者の御指導等により地元研究グループの手によって行われた事実からみても理解願えると思う。

ゴルフ場造成敷地内に確認された7遺跡を仲大地遺跡だけにしぼり発掘調査し，他6遺跡中3遺跡を敷地からはずし，3遺跡をコース変更や工事方法の改善（盛土等）により守ったことは，遺跡保護という観点からも高く評価すべきである。

また，最近上野原町においては町民の手で約10年の歳月をかけ町誌を編集して以来歴史や文化財に対する住民の関心が急激に高まっている時でもあり，本報告書も地元研究グループのメンバーによりまとめてみた。

学識，経験の少ない学生や一般社会人を中心としたサークルであるため，編集校正において考察をさけ，あくまでも事実の報告に止めた。この点，先輩各位のあたたかいご批判ご叱正をいただき，研修を深めたい所存である。しかし，地形の地学的考察には専門に研究されている内藤久敬氏の協力が得られ，編集校正には町誌の経験を生かして，町企画課の小俣博氏の協力が得られたことは，本報告書の完成に大きな力となったのである。

本調査が成功したのは，以上述べて来た多くの方々の御指導，御協力のおかげであるが，森和敏，森本圭一両先生をはじめとする県文化課の御指導があったこともここに明記して，併せて御礼申し上げる次第である。

最後に，本発掘調査に多額な経費を出し，営利を超えて御協力くださった株式会社上野原カントリークラブに対して忠心より感謝し，今後とも造成工事にあたられては，埋蔵文化財の保護に御協力くださいます様お願いする次第である。

（長谷川　孟）

参考文献

山本寿々雄　　1968 『山梨県の考古学』

鎌木　義昌　　1965 『縄文時代』日本の考古学Ⅱ

土橋　里木　大森　義憲 『日本の民俗，山梨』

上野原町誌編纂委員会　　1975 『上野原町誌』

山内　清男　　1969 『縄文革創期の諸問題』ミューゼアム 224

原　　寛　杠村　　弘　　1974 『椛ノ湖遺跡』

山梨県教育委員会　　1974 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』小渕沢

町地内
山梨県教育委員会　1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』長坂，明野，韮崎地内
山梨県 『山梨の地質誌』

調査団の構成と参加者

調　査　団

団　　長	上野原町教育委員会教育長	横瀬　　仁
副 団 長	上野原教育委員会事務局次長	臼井　計雄
	前任	鷹取　　清
〃	（現場責任）上野原考古学研究会会長	長谷川　孟
監　　事	上野原町文化財審議委員	上條甚之甫
〃	〃	中村律太郎
〃	〃	田中　久弥
〃	〃	古家　寛治
調査員長	慶応義塾大学教授	江坂　輝弥
調　査　員	川崎　義雄　重住　　豊　長谷川　孟	
調査補助員	横瀬　武文　村上　信行　田中　　悟　佐藤　　正	
	奈良　泰史　山田　行輝　佐々木克典	
特別参加者	森本　圭一　田中　純男　林　　炳泰	
事務局員	上野原町教育委員会主事　清水　　博	

参　加　者

一　般

小俣　貴雄　長谷川雅之　須藤　和幸　平塚さよ子　小林　　誠
清水ゆかり　渡辺久美子　久島　幸子　藤巻　幸男　仙波　　享
原　　雅信　古屋　貴雄　寺内　敏郎　萩原　圭一　関本　長男
小俣　明美　橋本　広美　網野　光子　尾形　元子　宮野　　始
水越　礼子　長尾加代子

都留高等学校　浅川　　保

小林　　稔　安藤　正文　長田　貴光　鈴木　春代　井上　直子
岡本　悦子　吉岡　祥子　吉岡奈緒美　小俣　直美　野沢　和代
富田　千秋　小俣　八美　小林　春野　藤本　和美

大月高等学校　中山　光男

志村　祐子　天野はるみ　天野ひさ子　飯島美佐子　一ノ宮富士子

田中真佐子　内田まり子　佐藤　昌子　石井　利守（谷村高校）

明誠高等学校　小柏　仁鋭　長尾　将司

内野　茂　高橋　一郎　山口　英明　小林　光吉　橋本　真吾

秦野　武広　馬場　進　外口　実　奥山　和久　恩田　伸也

津久井高等学校　原　昇　山本　正人

山崎　孝　笹野　春美　菊地原久美子　山口久美子　高橋久美子

平井登志子　山口せつ子　斉藤　祐一　岩本　義昭　塚本　真一

岩田　均

一般参加

黒部　勝　黒部　秋夫　黒部　正文　小俣　国男　佐藤　貴

佐藤　正行　安藤　隆　岡部　嘉治

団体参加

巌中学校　平和中学校　菅井小学校　中央小学校郷土史クラブ

協　力　者

上條　忠良　上條　源喜　上條　正教　水越　義昭　水越　虎利

水越　旭祝　水越　正文　上條しづよ　横瀬　荘吉　石井　裕雄

上條　隆信　水越　政　浅井　功雄

（以上順序不同敬称略）

仲大地遺跡

上野原町仲大地遺跡発掘調査報告書

昭和51年3月31日発行

編　集　仲大地遺跡発掘調査団

発　行　上野原町教育委員会

〔三和印刷印行・甲陽書房納〕